

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

第六卷 アントアネット

青空文庫



母に捧ぐ

ジャンナン家は、数世紀来田舎いなかの一地方に定住して、少しも外来の混血を受けないでいる、フランスの古い家族の一つだった。そういう家族は、社会に種々の変化が襲来したにもかかわらず、フランスには思いのほかたくさんある。彼らは自分でも知らない多くの深い関係で、その土地に結びつけられているのであって、一大変動がない以上は、そこから彼らを引き抜くことはできない。彼らのそういう執着には、なんらの理由もないし、また利害関係もほとんどない。歴史的追憶などという博識な感傷性といったものは、ある種の文学者らにしか働きかけるものではない。打ち克か

ちがたい抱擁力ほうようりきで人を一地方に結びつけるものは、もつとも粗野な者にももつとも聡明そうめいな者にも共通なる、漠然ぼくぜんとしたしかも強い感覚——数世紀以来その土地の一塊であり、その生命に生き、その息吹いぶきを呼吸し、同じ床に相並んで寝た二人の者のように、その心臓の音がじかに自分の心臓へ響くのを聞き、そのかすかなおののき、時間や季節や晴れ日や曇り日の無数の気味合ニユアンス、事物の声や沈黙、などを一々感じ取つてるといふ、漠然としたしかも強い感覚なのである。おそらくは、もつとも美しい地方よりも、または生活のもつとも楽しい地方よりも、土地がもつとも簡素で、もつとも見すばらしく、人間に近く、親しい馴れ馴れしいな言葉を話しかけるような、そういう地方こそ、よりよく人の心を

とらえるものである。

ジャンナン家の人たちが住んでいたフランス中部の小地方は、まさにそのとおりであった。平坦へいたんな濡うるいのある土地、淀よどんだ運河の濁り水に退屈げな顔を映してる、居眠った古い小さな町。その周囲には、単調な田野、耕作地、牧場、小さな流れ、大きな森、単調な田野……。美景もなく、塔碑もなく、古跡もない。人の心をひきつけるようなものは何もない。しかし、すべてが人を引き留めるようにできている。その無気力らんだ懶惰のうちには、一つの力が潜んでいる。それを初めて味わう者は、悩みと反発心とをそそられる。けれども、その印象を数代つづいて受けてきた者は、もはやそれから離脱することができない。すっかり沁しみ込まれてい

る。その事物の沈滞、そのなごやかな倦怠けんたい、その单调さは、彼にとつて一つの魅力であり、深い甘美であつて、彼はそれをみずから知つてはいず、あるいはけな貶しあるいは好むが、長く忘れることはできないであらう。

ジャンナン家の人たちはいつもそこに生活してきた。町の中や近郊において、十六世紀まで家系をさかのぼることができた。というのは、一人の大伯父おじが一生をささげて、この無名な勤勉なつまらない人たちの系統を調べ上げたからである。農夫、小作人、村の職人、つぎには、僧侶そうりよ、田舎いなかの公証人、などであつて、しまいとその郡役所所在地に来て身を落ち着けたのであつた。その

地で、現在のジャンナンの父であるオーギュスタン・ジャンナンは、銀行家としてすこぶる巧みに仕事をしていった。巧妙な人物で、百姓のように狡猾こうかつで頑固がんこで、根は正直だが小心翼翼しつぱくたるところはなく、非常な働き者で快活であつて、ずるい質しつぱく朴ぼくさや露骨な話しぶりや財産などのために、十里四方の人々から重んぜられ恐れられていた。背の低いでつぷりした強健な男で、痘瘡とうそうのある太い赭あから顔に、小さな鋭い眼が光っていた。昔は色好みだとの評判だったが、あとまでその趣味を全然失いはしなかった。彼は露骨な冗談やりっぱな御馳走ごちそうが好きだった。食卓の彼は見物みものだった。息子むすこのアントアヌがその相手をし、他に会食者としては数名の老人仲間がいた。治安裁判所判事、公証人、大会堂の司祭

——（ジャンナン老人はよく牧師を食い物にしていたが、牧師が大食家であるときにはそれと会食する道をも心得ていた）——ラブレー風の陽気な土地の同じモデルでこしらえられてる丈夫な快漢たちだった。馬鹿ばかげた冗談が火のように燃え上がり、テーブルに拳固げんこの音がし、荒々しい哄こう笑しょうの音が湧わきたった。その快活な騒ぎは、台所の召使どもにも感染し、表を通りかかる人々にも感染していった。

その後、オーギユスタン老人は、ごく暑い夏のある日、葡萄酒ぶどう酒を瓶びんにつめようと思いたって、シャツ一つになつて窖あなぐらへ降りていったが、そのとき肺炎にかかった。そして二十四時間とたたないうちに、あまり信じてもないあの世へ旅だつてしまった。もと

より教会のあらゆる秘蹟サクラメントは行なわれたが、それも田舎いなかのヴオルテール主義者である善良な中流人士としてであつて、女どももか  
らかれこれ言われなかったために、臨終のおりされるままに任したの  
だつた。彼にとつてそれはどの道同じことだつたし……また、死  
後のことはわかるものではない……。

息子のアントアーンがその業務を引き継いだ。でつぷりした赭あか  
ら顔の快活な小男で、剃り残してゐる長めの頬髯ほおひげ、聞き取れない  
ほどの早口——いつも騒々しくつて、ちよこちよこ動き回つてい  
た。彼は父ほどの経済的知力をもつてはいなかつたが、監理者と  
してはかなりの腕をもつていた。着手されてゐる事業を静かにつづ  
けてゆきさえすればよかつた。それは単に継続されてるといふだ

けで、盛んになっていった。彼はその地方で手腕家との評判を得ていたが、事業の成功は彼の力ではほとんどなかった。彼はただ秩序と精励とを事としたばかりだった。それに彼はまったく誉むべき人物であつて、至当な尊敬の念をだれにも起こさせた。その態度が、ある人にたいしては馴れ馴れしすぎるくらいであり、やや大袈裟おおげさで、多少平民的で、まったく円滑親切だったので、その小さな町や近傍の田舎いなかでは、りっぱな人だとの評判を得ていた。金使いは荒くなかったが、感傷癖のためにしまりがなかった。すぐに涙を眼に浮かべた。悲惨な様を見ては深く心を動かして、その悲惨に会つてゐる者をいつも感動させた。

小都市に住んでゐる多数の者と同様に、彼も政治のことをたい

へん念頭に置いていた。彼はごく温和な共和主義者であり、頑固がんこな自由主義者であり、愛国者であり、また父にならつて極端な反はん僧侶そうりよ主義者であつた。彼は町会の一員だつた。そして彼はその同僚とともに、教区の司祭をからかったり、町の婦人間に多くの感激を起こさせる四旬節祭の説教者に、無邪気な悪いたずら戯ずをしたりすることを、ごく面白がつていた。実際、フランスの小都市のかかる反僧侶主義は、いつも多少なりと家庭不和の一事であつて、ほとんどすべての家に起こる夫婦間の激しい暗闘の陰険な一形式であることを、忘れてはいけけないのである。

アントアヌ・ジャンナンはまた、文学上の抱負をもつていた。同時代の地方の人々はたいいていそうであつたが、彼もやはりラテ

ンの古典に養われて、その数ページやたくさんの諺ことわざを暗記して  
 いた。その他、ラ・フォンテーヌ、ボアロー——ボアローの詩論や  
 ことに譜面台——オルレアンの少女の著者、フランス十八世紀の  
 小詩人ら、などからも養われていた。そういう趣味の詩を作るこ  
 とに骨折っていた。彼の知人の範囲内では、そういう嗜癖しへきをもつ  
 てるのは彼一人ではなかつた。そして彼はこの点でも名声を得て  
 いた。彼の諧かいぎ諷ぎやく詩、四句詩、題韻詩、折句詩、諷ふう詩、歌謡詩、  
 などは幾度も人々の口にのぼつた。それらは往々にしてかなり危あぶな  
 つかしいものだったが、露骨なある種の機才がないでもなかつた。  
 消化作用の神秘も歌い忘れられていなかつた。ロアール河のほと  
 りのこの詩神は、好んで荘重な語気を使つていた、それもダンテ

の名高い悪魔のような調子で、

「……彼はその尻しりをらっぱとしていた……」

この強健で活発快活な小さな男は、まったく性質の違つた女——その土地の司法官の娘で、リュシー・ド・ヴィリエという女を娶めとつた。ド・ヴィリエというのは、むしろドウヴィリエというベきであるが、小石が坂をころがり落ちながら二つに割れるように、途中で二つに裂けてしまったのである。でこのド・ヴィリエ家の人たちは、代々司法官であつた。法律、義務、社交的儀礼、完全な正直さで固められ多少道学者めいた気味のある個人の品位、こ

とに職業的品位、などについて高い観念をもっている、フランスの議会関係の古い家柄、その一つだった。前世紀において、彼らは、不平がちなジャンセニスムにもまれたので、ジエズイット精神にたいする軽蔑<sup>けいべつ</sup>とともに、悲観的な、多少不満がちなあるものを、心のうちに残していた。彼らは人生を美しいものと見なさなかつた。人生の困難を軽く見んとつとめるところか、かえつてその困難を多くなして、不平を言う権利を得たがつっていた。リュシー・ド・ヴィリエもそういう性質を多少もつていたが、それは、夫のあまり精練されていない楽天主想と相反するものだった。彼女は背が高く、夫より頭だけ高く、痩<sup>や</sup>せていて、姿がよく、着物の着こなしが上<sup>じょうず</sup>手<sup>ず</sup>だったが、いくらか堅苦しい容姿であつて、

いつも——わざとかもしれないが——實際以上に老けて見えた。

彼女は道徳的にはきわめてすぐれていた。しかし他人にたいしては嚴格だった。いかなる過失も許さなかつたし、ほとんどいかなる悪癖をも許さなかつたので、冷淡な傲慢ごうまんな女だと人から見られていた。非常に信心深かつたが、それが絶えざる夫婦喧嘩げんかの種となつた。それでも彼らはたいへん愛し合つていた。しばしば言い争いながらも、たがいに離れることができにくかつた。彼らは二人とも実務家ではなかつた、彼は心理の方面に欠けてるところがあるために——（彼はいつも温顔や甘言に欺かれがちだった）——彼女は業務にまつたく無経験なために——（彼女はいつも業務から遠ざかつていたので興味ももたなかつた）。

彼らには二人の子があつた。アントアネットという娘と、それより五つ年下のオリヴィエという息子むすことだつた。

アントアネットはきれいな栗色くり髪の子で、上品で正直なフランス式の小さな丸顔、敏びんしやう捷な眼つき、つき出た額ひたい、ほっそりした頤あご、まっすぐな小さな鼻——フランスのある古い肖像画家が、みじくも言ったとおり、「きわめて美しい細い上品な鼻の一つ、顔つき全体を活気だたせるような、また、話したり聴きいたりするにつれて内部に起こる微細な感情を示すような、あるかすかな細かい動きを見せる鼻、」であつた。彼女は快活さと無頓着むとんじやくさとを父から受けていた。

オリヴィエは花車<sup>きやしや</sup>な金髪の子で、父に似て背は低かったが、性質は父とまったく異なっていた。彼の健康は、幼いころたえず病気をしたために、ひどく痛められていた。それだけにまた家じゆうの者から大事にされていたけれども、身体の虚弱なせいで早くから、死を恐れ生活力の弱い憂鬱<sup>ゆううつ</sup>な夢想的な少年となつてしまつた。人馴<sup>な</sup>れないのと趣味とで、いつも一人ぼっちだつた。他の子供たちと遊ぶのを避けた。彼らといつしよにいと不快だつた。彼らの遊戯や喧嘩<sup>けんか</sup>をきらい、彼らの乱暴を恐れた。勇氣に乏しいせいではないが、内気なせいで、彼らからなぐられるままになつていた。身を守るのが恐<sup>こわ</sup>かつたし、他人を痛めるのが恐かつたのである。もし父親の社会的地位から保護されなかつたら、い

じめられどおしだったかもしれない。彼は心がやさしくて、病的なほど感じやすかった。ちよつとした一言を聞いても、ちよつと同情されても、ちよつと叱しかられても、すぐに涙を出した。彼よりもずっと健全だった姉は、いつも彼を笑って、小さな泉と呼んでいた。

二人の子供は心から愛し合っていたが、いつしよに生活するにはあまりに性質が異なっていた。各自に勝手な方向へ走って、自分の空想を追っていた。アントアネットは大きくなるにつれて、ますますきれいになった。人からもそう言われ、自分でもそれをよく知っていた。そのために心楽しくて、すでに未来の物ロマンス語までみずから描いていた。オリヴィエは病身で陰気であって、外界

と接触することにたえずいらだちを感じた。そしては自分の荒こころと唐無稽うむけいな小さい頭脳の中に逃げ込んで、いろんな話をみずから考え出した。愛し愛されたい激しい女らしい欲求をもっていた。同年輩の者たちから離れて一人ぼっちで暮らしながら、二、三の想像の友だちをこしらえ出していた。一人はジャンといい、も一人はエティエンヌといい、も一人はフランソアといった。彼はいつもそれらの友だちといっしょにいた。それで、近所の友だちといっしょには決してならなかった。彼はよく眠らなかつたし、たえず夢をみた。朝になって寢床から引き起こされても、ぼんやり我れを忘れていて、裸のままの小さい両足を寢台の外にたれたり、またしばしば、一方の足に靴くつした下を二枚ともはいたりした。盥たらいの

中に両手をつき込んで我れを忘れてることもあった。物を書きかけながら、学課を勉強しながら、机に向かったままで我れを忘れてることもあった。幾時間も夢想到にふけていて、そのあとで突然、何にも学び知っていないのに気づいてびっくりした。食事のときに、人から言葉をかけられてはまごついた。尋ねかけられてから一、二分間もたつて返辞をした。文句の途中で何を言うつもりだったのかわからなくなった。彼は自分の思想の囁きのうちに、また、ゆるやかにたつてゆく田舎いなかの単調な日々の親しい感覚のうち、ちに、ぼんやり浸り込んでいた。一部分にしか人の住んでいない半ば空むなしい大きな家、大きな恐ろしい窟あなぐらや屋根裏、様子ありげに閉め切られてる室、閉ざされてる雨戸、覆おおいにしてある家具、布

が掛けられてる大鏡、包まれてる燭台しよくだい、または、変に気をひ  
 く微笑を浮かべてる古い家族の肖像、あるいは、高潔でかつ猥らみだ  
 な勇武を示してる帝国式の版画、娼家しょうかにおけるアルキビアデス  
 とソクラテス、アンチオキユスとストラトニス、エパミノンダス  
 の話、乞食こじきのベリザリウス……。家の外には、真向まむかいの鍛冶場かじ  
 で蹄鉄ていてつを鍛える音、鉄砧かなしきの上に落ちる金槌かなづちのどんちんかん  
 な踊り、鞆ふいごのふうふういう息使い、蹄ひづめの焼かれる匂い、水辺にう  
 ずくまつてる洗濯女せんたくの杵音きね、隣家の肉屋の肉切包丁の鈍い音、  
 街路の舗石に鳴る馬の足音、ポンプのきしる音、運河の上の回転  
 橋、高い庭の前を綱でひかれておもむろに通つてゆく、木材をい  
 っぱい積んだ重い舟の列、方形の花壇を一つそなえてる、小さな

石だたみの中庭、花壇の中にゼラニウムやペチュニアの茂みの  
 間から伸び出てる、二株のリラ、運河を見おろすテラス覧台の上に花  
 咲いてる、月桂樹げっけいじゆと柘榴ざくろとの鉢はち、時としては、近くの広場に開  
 かれる市のいち擾じようそ騒そう、ぎらぎらした青服の百姓、鳴き立てる豚：  
 …。そして日曜日には、教会堂で、調子はずれの歌い方をしてる  
 唱歌隊、ミサを唱えながら居眠りをしてる老司祭、または、停車  
 場へ通ずる並木道を、一家打ちそろって散歩する人たち——彼ら  
 は、おおげさ大袈裟に帽子をぬいで他の不幸な人たちと会釈をかわしなが  
 ら、その時間をつぶし、不幸な人たちの方でもまた、いつしよに  
 散歩しなければならぬように考え、そして一同は、眼に見えな  
 いほど空高くひばり雲雀が舞っている日に照らされた田野まで、あるい

は、両側にポプラが立ち並んでそよいでる鏡のように淀よどんだ運河に沿って、散歩をつづける……。それから、たいへんな晩ばん餐さん、長たらしい食事——その間、ひとかどの見識と歓喜とをもつて食物のことが話される。皆その道の通人ばかりだし、また、田舎いなかでは貪どん食しょくということが、おもな仕事でありすぐれた技術だからである。その他、事業のことや露骨な冗談や時には病氣のことなども、仔細しさいにわたってはてしなく口へのぼせられる……。子供のオリヴィエは、片隅かたすみの席について、鼠ねずみの子ほどの音もたてず、ぼつぽつかじるだけで、ほとんど食べもせず、耳を澄まして聞いていた。何一つ聞き漏らさなかつた。よく聞き取れないところは想像で補った。幾世紀もの印象が強く刻み込まれてる古い種族の

古い家庭の子供らには、しばしば特殊な才能が認められるものであるが、彼もそういう天賦の才能をもっていて、かつて頭に浮かべたこともなければまたほとんど理解もしがたいほどの思想をも、よく察知することができたのだった。——それからまた、血のしたたる汗しるけ気のある不思議な物がこしらえられる料理場もあり、ばかげた恐ろしいはなし噺はなしをしてくれる老婢ろうひもいた……。ついに晩となる。音もなく飛び回るこうもり蝙蝠こうもり、また、古い家の内部に動めいてるのがよくわかる恐ろしい怪物、大きな鼠ねずみや毛はの生はえた大蜘蛛ぐもなど、それから、何を言ってるのか自分でもよくわからない、寝台の足もとでの祈きとう禱とう、尼たちの就寝時間を告げる近くの僧院の小さい鐘の急な音。そして、白い寢床、夢の小島……。

一年じゆうでもっとも楽しい時期は、春と秋とに、町から数里隔たった自家の所有地で暮らす時だった。そこでは気ままに夢想することができた。だれにも会わないでよかった。小さな中流人士の多くと同様に、二人の子供は、婢僕ひぼくや農夫などの平民たちから遠ざかっていた。二人は彼らに会うと、多少の恐れと嫌悪けんおとを心の底に覚ゆるのだった。手先の労働者らにたいする、貴族的な——あるいはむしろ、まったく中流人的な——軽侮の念を、二人は母から受けていた。オリヴィエは秦とねりこ皮の枝の間に登って、不思議な話を読みながら日を過ごした。愉快な神話、ムゼウスやオールノア夫人の小話、千一夜物語、旅行小説、などを讀んだ。フランスの田舎いなかの小さい町の少年をときどき苦しめる、遠い土地に

たいする怪しい郷愁、「あの大洋の夢」、それを彼もやはりもつ  
ていたのである。枝葉の茂みにさえぎられて家が見えなかったの  
で、彼はごく遠い所にいるのだと思うことができた。それでも、  
すぐ近くにいることを知っていて、少しも不安ではなかった、と  
いうのは、一人きりで遠くへ離れることをあまり好まなかったか  
ら。彼は自然の中に埋もれた心地がしていた。周囲には樹木が波  
打っていた。木の葉がぐれに遠く、黄色がかった葡萄畑ぶどうが見え、  
また牧場も見えた。斑まだらの牝牛めうしが牧場の草を食べていて、そのゆる  
やかな鳴き声は、うつらうつらしてる田舎の静けさを満たしてい  
た。鋭い声の雄おんどり鶏が農家から農家へ答え合っていた。納屋なやの中  
の連枷からざおの不規則な律動リズムが聞こえていた。そして、万象のかかる

平和の中にも、無数の生物の熱烈な生活が満々と流れつづけていた。オリヴィエは気がかりな眼で見守つた、いつも急いでる蟻ありの縦列、オルガン管のような音をたてながら重い分捕品をになつてる蜜蜂みつばち、何をするつもりか自分でもわからないでいる愚かないばりくさつてる地蜂など——すべて、忙がしげな動物の世界を。彼らはどこかへ到着したくてたまらながつてるように見えた……。どこへか？ 彼らもそれを知らない。どこでも構わないのだ。ただどこかへ……。オリヴィエは、その盲目で敵意に満ちた世界のまん中にあつて、ぞつと身を震わした。松ぼっくりの落つる音にも、枯れ枝の折れる音にも、小兎こつぎのように飛び上がった……。そしては、庭の向こう端に、ぶらんこの鉄輪の音を耳にして、ほ

つと安堵あんどした。ぶらんこには、アントアネットが猛然と身を揺すつていた。

彼女も夢想到にふけていた。しかしそれは彼女一流の仕方であった。貪欲どんよくで好奇心に富み笑い好きで彼女は、庭じゆうを捜し回つて一日を過ごした。鶉つぐみのように葡萄ぶどうの実を盗み食いし、果樹がきから桃ももをひそかにもぎ取り、梅の木によじ登り、あるいは通りがかりにそつと梅の幹をたたいて、口に入れると香りかおある蜜のようとに融ける金色の小梅を、雨のように振り落とす。あるいはまた、禁じられてるにもかかわらず花を摘み取つた。朝から眼をつけてる薔薇ばらの花を素早くもぎ取り、それをもつて庭の奥の亭ちんへ逃げ込んだ。そして酔うような強い香りの花の中に、飲よろこばしげに小

さな鼻をつき込み、それに接吻し、それを口に噛み、その汁を吸った。それからその盗み花を隠し、二つの小さな乳房の間に襟元から押し込んだ、はだけてるシャツへ乳房がぽつりとふくらんでるのを、珍しげにうちながめた……。なお、禁ぜられてるも一つのえも言えぬ快樂は、靴と靴下とをぬいで、小径の冷やかな細かな砂の上、芝地のぬれた草の上、日影の冷たい石の上や日向の熱い石の上、森はずれを流れる小川の中などを、素足のまま歩き回り、足先や脛や膝などを、水や土や光にさらすことだった。樅の木影に横たわっては、日光に透きとおってる手をながめ、細やかで豊かな腕のなめらかな肌を、何心なく唇でなで回した。蔦の葉や榿の葉で、冠や頸環や長衣をこしらえた。青い薊の花や赤い

へびのぼうず  
伏牛花や緑色の実のなつてる縦の小枝などを、それに突きさした。まるで野蛮国の小さな女王みたいだった。そしてただ一人で、噴水のまわりを跳ねた。両腕を広げてぐるぐる回り、ついには眼が回つてき、芝生のうちのうち倒れ、草の中に顔を埋め、幾分間も笑いこけて、みずから笑いやめることもできず、またなぜ笑うかもみずからわからなかつた。

かくて二人の子供の日々は過ぎていった。たがいに少し遠ざかつて相手を気にもかけなかつた。——がときどきアントアネットは、通りがかりに弟へちよつと悪戯いたずらを試してみたくなり、ひとつかみの松葉を彼の鼻先へ投げつけ、落つこととしてやるとおどかしながら彼が登つてる木を揺すり、あるいは、恐こわがらすために突然

彼へ飛びついて叫んだ。

「そら、そら……。」

彼女はときとすると、彼をからかいたくてたまらなくなつた。母が呼んでると言つて彼を木から降りさせた。彼が降りて来るとそのあとに登つて、もう動こうとしなかつた。オリヴィエは不平で、言つつけてやるとおどかした。しかしアントアネットが長く木に登つてる心配はなかつた。彼女は二、三分間もじつとしてることができなかつた。枝の上からオリヴィエを笑つてやり、思うまま怒ら<sup>おこ</sup>して泣かせかけると、彼女は下にすべり降り、彼に飛びつき、笑いながら彼を揺すり、「泣きむし」と彼を呼び、彼を地面にころがして、一握りの草をその鼻先にこすりつけた。彼は手

向かいしようとしたが、その力がなかった。するともう身動きもせず、黄金虫こがねむしのように仰向けにひっくり返って、痩やせた両腕をアントアネットの頑がんじょう丈な手で芝生しばふに押えつけられた。悲しげなあきらめた様子だった。アントアネットはその様子に気が折れた。打ち負けて屈伏してる彼をながめた。そして突然笑い出し、いきなり彼を抱擁して、そのまま置きざりにした——それでもなお、別れの挨拶あいさつの代わりに、丸めた生草を彼の口へ押し込んだ。彼はそれを何よりもきらっていた、非常に厭いやな味だったから。彼は唾つばを吐き、口を拭ぬぐい、ののしりたてたが、彼女は笑いながら一散に逃げていった。

彼女はいつも笑っていた。夜眠ってからもお笑っていた。隣

室で眠られないでいるオリヴィエは、いろんな話を一人で考え出している最中に、彼女の狂気じみた笑い声や、夜の静けさの中で彼女が言ってる途切れ途切れの言葉などを、ふと耳にしてはびつくりした。外では、樹木が風に吹かれて音をたて、梟ふくろうが悲しげに鳴き、遠い村の中や森の奥の農家で、犬がほえていた。夜の蒼白あおしろいぼんやりした明るみの中に、樅もみの重い黒い枝が幽鬼のように揺らめくのが、窓の前に見えていた。そしてアントアネットの笑い声は、彼にとっては一つの慰撫いぶであつた。

二人の子供は、ことにオリヴィエは、きわめて信心深かつた。父は例の反僧侶はんそうりよ主義的言説で彼らに眉まゆをひそめさしたが、しか

し彼らを放任しておいた。実のところ彼は、無信仰な多くの中流人士と同じく、家族の者らが自分に代わって信仰していることを厭いやには思っていないかった。敵の陣中に味方をもってるのはいつも結構なことであり、どちらへ運が向いてくるかわかったものではない。要するに彼は自然教信者であつて、父親がなしたとおりに、時が来たら牧師を招く余地を残しておいた。それは益にならないとしても、害になるはずはない。火災保険を契約するためには、焼けることを信ずる必要は別がない。

病身なオリヴィエは、神秘説への傾向をもっていた。彼はときとすると、もう自分が存在しないように思われることもあつた。信じやすくして心やさしいので、支持を一つ求めていた。いつも両

腕を広げていてくれて、こちらからなんでも言うことができ、どんなことをも理解し宥恕ゆうじょしてくれる、眼に見えない友へ、自分の心を打ち明けるといふ慰安を、もの悲しい楽しみを、彼は懺悔ざんげのうちに味わった。魂が洗われ休められて純潔になつて出て来る、謙抑けんよくと愛との沐浴もくよくの快さを、彼はしみじみと感じた。彼にとつては信ずることがいかにも自然だったので、どうして人が疑い得るかを了解しなかつた。疑うのは邪悪なからであり、あるいは神に罰せられてるからであると、考えていた。父が神の恵みに心動かされるようにと、人知れず祈っていた。そしてある日、父といっしょに田舎いなかの教会堂を見物に行き、父が十字を切るのを見て、非常にうれしかった。聖史の物語は彼の心の中で、リユーベザー

ル、グラシユーズとペルシネー、ハルーン・アル・ラシツド教主、などの不可思議な話と交り合っていた。幼いころには、それらのどの話も真実であると疑わなかった。そして、唇くちびるの裂けたシヤカバクや、おしやべりの理髪師や、カスガールの小さな佝僂せむしなどを、たしかに知ってる気がしたし、また、宝搜しの男の魔法の木の根をくわえてる黒い啄木鳥きつつきを、田舎いなかに散歩しながら見出そうとつとめていた。そしてまた、カナーンの地や約束の土地などは、彼の幼い想像力によって、ブルーゴーニユやベリーの地方と一つになつていた。色褪あせた古い羽飾りのように小さな木が一本頂に立っている、向こうの丸い丘は、アブラハムが火烙台ひあぶりを立てた山のように思われた。茅屋ぼうおくのほとりにある大きな枯れた叢くさむらは、長い

年代のために消えてしまつて燃ゆる荊いばらであつた。少し大きくなつて、批判力が眼覚めざめかけたところでさえ彼は、信仰を飾る通俗な伝説に心を向けるのが好きだつた。それが非常に楽しかつたので、まったくだまされはしなかつたがだまされるのが面白かつた。かくて彼は長い間、聖土曜日には、復活祭の鐘の归来を待ち受けた。その鐘は、この前の木曜日にローマへ出かけたのであつて、小さな吹き流しをつけて空中をもどつてくるはずだつた。そんなことは嘘うそだといふには気づいたけれど、それでもなお鐘の音を聞くときには、空の方を仰いでながめた。あるときなどは、青いリボンをつけた鐘が家の上空に消えてゆくのを——そんなはずはないとよく知りながらも——実際に見たような気がした。

彼は伝説と信仰とのそういう世界に、身を浸さないではおれなかつた。彼は人生からのがれた。自分自身からのがれた。瘦やせて蒼あおしろ白く虚弱だつた彼は、そういう状態を苦しみ、人からそうだと言われるのが堪えがたかつた。彼のうちには生まれながらの悲観思想があつた。それはもちろん母から受け継いだものであつて、病弱な子供である彼にはちようど適していた。彼はそのことを自覚しなかつた。だれでも自分と同じだと思つていた。そしてこの十歳の小童は、遊び時間にも庭で遊ぶことをしないで、自分の室に閉じこもつて、おやつ菓子をかじりながら、自分の遺書を書いていた。

彼は多く書いた。毎晩熱心に、人知れず日記をつけた——何に

も言うべきことはなく、つまらないことしか言えなかったのに、なぜ日記をつけるかは、自分でもわからなかった。彼にあっては、書くことは遺伝的な病癖だった。それは、フランスの地方の中流階級——不滅なる老種族——の古来の欲求だった。彼らは馬鹿げたほとんど勇敢な忍耐さをもつて、毎日見たり言ったりなしたり聞いたり食ったり飲んだり考えたりしたことを、死ぬまで毎日、自分のために詳しくしるしておく。自分のためにだ。他人のためにはではない。だれもその日記を読む者はあるまい。それを彼らはよく知っている。そして彼ら自身も、決して読み返すことをしないのである。

音楽も彼にとつては、信仰と同様に、あまりに強い白日の光にたいする避難所だった。姉と弟とは二人とも、心からの音楽家だった——母からその能力を受けてるオリヴィエはことにそうだった。けれども、二人の音楽的趣味はすぐれたものとは言えなかった。この田舎<sup>いなか</sup>では、音楽的趣味を涵養<sup>かんよう</sup>することはおそらくできなかった。音楽として聞かれるものは、速歩調やあるいは——祭りの日に——アドルフ・アダムの接続曲を奏する田舎楽隊、華想<sup>ロマ</sup>曲<sup>ンス</sup>をひく教会堂のオルガン、町の娘たちのピアノの練習、などばかりだった。その娘たちが調子の狂った楽器の上でたたきちらすものは、幾つかの円舞曲<sup>ワルツ</sup>とポルカ曲、バグダッドの太守の序曲、若きアンリーの狩の序曲、モーツアルトの二、三の奏鳴曲<sup>ソナタ</sup>など、

いつも同じものばかりで、またいつも音が間違っていた。それらの曲は、客を招待する夜会にはつきものだった。食事のあとにはかならず、技能ある人々はその腕前を見せてくれと願われた。彼らは最初顔を赤らめて断わるが、ついには一同の懇請にうち負けて、自慢の曲をそらでひいた。すると皆は、その音楽家の記憶力と「玉をころがすような」演奏とを賞賛した。

ほとんどの夜会にもくり返されるその儀式は、二人の子供にとつては、ばんさん晩餐の喜びを殺そいでしまうものだった。バザンのシナ旅行やウエーバーの小曲などを、四手でひかなければならないときにはまだ、たがいに頼り合つてさほど恐れはしなかった。しかし独奏しなければならぬときには、非常な苦痛だった。いつ

ものとおり、アントアネットの方がいくらか勇気があった。厭いやで厭いやでたまらなくはあつたけれども、のがれる道がないと知つていたから、彼女は思い切つて、かわいい決心の様子でピアノにつき、そのロンドをむちやくちやにひきながら、ある楽節ではまごつき、ひき渋つたり、ふいにひきやめたり、後ろを振り向き、「ああ、忘れたわ……」と微笑ほほえみながら言つたり、それからまた勇敢に、数節先からひきだして、終わりまでやりつづけるのだった。そのあとで彼女は、ひき終えた満足を隠さなかった。喝かつさい采さいを浴びせられながら元の席にもどつて来ると、笑いながら言つていた。

「私何度も間違えたわ……。」

しかしオリヴィエは、もつと気むずかしかった。公衆の前に出

てゆくことが、集まつてる人たちの目標となることが、辛棒でできなかった。人がたくさんいるときには、口をきくのさえ苦痛だった。まして、音楽を愛しもせず——（彼はそれをよく見て取つていた）——音楽に退屈までし、ただ習慣上から演奏を求めてる、その人たちのために演奏することは、彼にとつては迫害にも等しかった。彼はただいたずらに逆らおうとばかりした。いつも頑固がんこに拒んでやった。ときには逃げ出すこともあつた。まつ暗な室や、廊下の隅すみや、また、蜘蛛くもがひどく恐こわいのも構わずに、物置にまではいり込んで、身を隠した。しかしそういう抵抗のために、人々はいっそう激しく意地悪くせがんだ。あまり彼の反抗が横着になると、両親の叱責しっせきまで加わつて、頬ほおを打たれることさえあつた。

そして彼はいつも、しまいには演奏しなければならなかった——  
厭いやいや々ながらではあったが。そして演奏のあとでは、うまくひけ  
なかつたことを夜通し苦にした。なぜなら、彼はほんとうに音楽  
を愛していたから。

この小さな町の趣味は、いつもそれほど凡ほんよう庸だときまっては  
いなかつた。町の二、三の家で、かなりりっぱな室内音楽会が行  
なわれたときのことを、人々は記憶していた。ジャンナン夫人が  
しばしば語るところによれば、彼女の祖父は、熱心にチェロをひ  
き回したり、グルックやダレーラックやベルトンの節を歌つたの  
だった。今でもなお、大きな楽譜がイタリー歌曲のひとつつりと  
ともに、家に残っていた。愛すべき老祖父は、ベルリオーズが評

したアンドリユー氏に似ていた。「彼はグルツクを非常に好きだった」とベルリオーズは言っている。そして苦々しげにつけ加えている、「彼はピッチーニをも非常に好きだった。」——ところで祖父は、ピッチーニの方を多く好きだったろう。がそれはとにかく、彼の集めたものの中では、イタリーの歌曲が数においてはるかに優勢だった。それらのものが、小さなオリヴィエの音楽上のパンだった。中身の少ない食物であつて、子供に食べさせる田舎いなかの砂糖菓子に似ていた。その菓子は趣味を減退させ、胃をこない、より真面目まじめな食物にたいする食欲を永遠に奪い去る恐れがある。しかしオリヴィエは貪食どんしよくだとはめられるわけはなかった。彼はより真面目まじめな食物を与えられていなかった。パンが

なくて菓子ばかり食べていた。かくて自然の勢いとして、チマロ  
ーザやパエジエロやロツシーニなども、この神秘家の憂鬱ゆううつな少  
年の乳母となつた。それらの陽気な厚顔な老シレヌスたちや、率  
直でなまめかしい微笑を浮かべ眼に美しい涙をためてる、ナポリ  
とカタニアとの元気な二人の小酒神、ペルゴレージとベリーニな  
どが、牛乳の代わりに注ついでくれる、泡あわだつた白葡萄酒アスチを飲みな  
がら、彼は酔つて頭がふらふらするのだつた。

彼はただ一人で、自分の楽しみのために音楽を多く奏した。音  
楽が心の底まで沁しみ通つていた。彼は自分が奏してるものを理解  
しようとは求めないで、受動的にそれを楽しんだ。だれも和ハモニ  
声1を教えてやろうとする者はいなかつたし、彼自身も教わろう

とは心掛けなかった。あらゆる学問および学問的精神はことごとく、彼の家庭に欠けていて、ことに母方の方に欠けていた。法律の人であり才気の人であり古典文学者であるその人たちは、何かの問題に出会うとまごついてしまった。血縁の一人——遠縁のあの従弟——が天文協会にはいったというのを、一大珍事のように語っていた。その従弟は狂人になったとの噂までしていた。強健着実ではあるが長い消化と日々の単調さで眠らされてる精神の、田舎いなかの古い中流階級の人たちは、自分の良識だけを頼りとしている。彼らはいかにも自信の念が強くて、自分の良識で解決できない問題はないと自惚うぬぼれている。そして彼らは、学術の人を一種の芸術家と見なしがちで、ただ、芸術家よりも有用ではあるが高尚

ではないと考えている。なぜかと言えば、少なくとも芸術家はなんの役にも立たないからである。そしてその無為な生活には上品さがなくてもない。ところが学者は、たいてい手工的労働者で——（それは不名誉なことだ）——せいぜい職工長くらいのもので、芸術家より学問はあるが多少気が変になっている。紙の上ではすぐれてるか知れないが、その数字の工場から外へ出ると、もうまるで木偶でくの棒だ。生活と実務との経験ある良識家に導かれなかつたら、学者はとてもやってゆけるものではない。

ところがあいにくにも、生活と実務との経験が、これら良識家らが信じたがつてるほど堅実なものであるとは、まだ証明されてはいない。それはむしろ、ごくわずかのきわめて容易な場合にの

み限られてる、一種の熟練と言うべきである。迅速じんそく勇敢な決意を要する意外な場合にぶつかると、彼らはもうなす術すべを知らない。

銀行家ジャンナンは、そういう種類の人物だった。万事は前もつてよくわかっていたし、田舎生活いなかの一定の調子で正確にくり返されていたので、彼はその業務において重大な困難にかつて出会わなかった。その職業にたいする特殊の能力なしに、ただ父の業を受け継いだのだった。それ以来万事が好都合おごにいったので、自分が生来賢明なからだと慢おごっていた。正直で勤勉で良識をもつてるだけで足りると、いつも好んで言っていた。父親が彼の趣味を念頭むすこにおかなかつたとおり、彼も息子の趣味なんかは念頭むすこにおかずに、その職務を息子に譲ろうと考えていた。そして息子をそう

いうふう<sup>に</sup>育てようとはしなかった。子供たちを勝手に生成するま<sup>ま</sup>に放任しておいて、ただ彼らが善良でありことに幸福でさえあればいいとしていた。子供たちを鍾<sup>しょう</sup>愛<sup>あい</sup>していたのである。それで二人の子供は、この上もなく生存競争の準備が欠けていた。まるで温室の花だった。しかし、常にそういう生き方をしてはいけなかつたであろうか？ その柔弱な田舎において、名望ある富裕な家庭において、土地一流の地位を占めながら友人らに取り巻かれてる、快活で親切懇篤な父親をもつていて、生活はいかにも安易でなごやかだったのである。

アントアネットは十六歳になっていた。オリヴィエは初めての

聖体拝受を受けるころになっていた。彼は自分の神秘的な夢の羽音のうち、に潜み込んでいた。アントアネットは四月の鶯うぐいすの声のように青春の心を満たしてゆく陶然たる希望の歓よろこばしい歌声に耳を傾けていた。自分の身体や魂が花のように咲き出してくるのを、また、きれいだと自分でも知り人からそう言われるのを、しみじみと楽しんだ。父の贅辞や不用意な言葉だけでも、彼女を自惚うぬぼれさせるに十分だった。

父は彼女に見とれていた。彼女の婀娜あだつぽい素振り、鏡の前でものうの懶げな横目、罪のない意地悪な悪戯いたずら、などを彼は楽しんだ。彼女を膝ひざの上に抱き上げて、その小さな愛情のことや、男をあやなしていることや、結婚のことなどで、彼女をからかった。彼は

幾つも結婚の申し込みを受けてると言つて、それを列挙してみせた。りつぱな中流人たちで、どれもこれも年老いた醜男ばかりだった。彼女は父の首に両腕をまきつけ、顔を父の頬に押し当て、大笑いをしながら、嫌悪の叫び声をたてた。すると彼は、彼女の選に当たる仕合わせな者はどんな男かと尋ねた、七大罪を犯した者のように醜いとジャンナン家の老婢が言つていたあの検事さんか、あるいはあのでつぷりした公証人か。それを彼女は黙らせるために、ちよつと平手で打ったり、両手で口をふさいだりした。彼はその手に接吻して、膝の上で彼女を跳ね躍らしながら、世に知られてる小唄を歌つた。

別嬪べっぴんさんよ、何が望みか、  
 醜男ぶおとこの御亭主ごていしゅさんかえ？

彼女は放笑ふきだして、彼の頬鬚ほおひげを頤あごの下で結ゆわえながら、その反覆  
 句で答えた。

醜男ぶおとこよりもかわいい男を  
 お上さん、どうぞ願ねがいます。

彼女は自分で相手を選ぶつもりだった。自分はたいへん富裕で  
 ありあるいは富裕になるだろうということを、彼女は知っていた

——（父は口癖にそれをくり返していた）——彼女は「りっぱな嫁」だった。その地方での豪家で息子むすこのある人たちは、早くも彼女の機嫌きげんを取って、ちよつとした阿諛あゆと賢い術策との白糸の網を張りながら、この美しい銀の魚を捕えようとしていた。しかしその魚は彼らにたいして、単なる四月の魚になりやすかった。なぜなら、機敏なアントアネットは彼らの策略をすつかり見抜いていたから。そして彼女はそれを面白がっていた。彼女は捕とられたくはあつたが、だれからでも捕れたくはなかつた。その小さな頭の中で、結婚の相手をすでにきめていた。

土地の貴族——（一地方にはたいい貴族の家柄が一つだけあるものである。その地の昔の君主から出た家だと自称している。

けれど多くは、十八世紀の監察官やナポレオン時代の軍需商人など、国家の財産を買い取った者の子孫である——その貴族にボニヴェー家というのがあつた。町から二里隔たつてるその邸宅には、光つてる石盤屋根の尖塔せんとうがそびえ、まわりに大きな森があり、森の中には魚を放つた池が散在していた。そのボニヴェー家からジャンナン家へ懇親を求めてきた。息子のボニヴェーはアントアネットへしきりに媚こびてきた。年齢のわりにはかなり丈夫な肥満した美男子で、狩猟と飲食と睡眠とをその神聖な日課としていた。馬にも乗れるし、舞踏ダンスも心得ており、態度もかなりりっぱで、他の青年よりさほど劣つてはいなかつた。長靴をはき込み馬や二輪馬車を駆つて、ときどき自邸から町へ出て来た。用事を口

実にして銀行家ジャンナンを訪問した。ときとすると、猟の獲物えものをつめた目籠めかごを手みやげにしたり、大きな花束を婦人たちへもつてきたりした。その機会に乗じて、令嬢の意を迎えることにつとめた。令嬢といっしよに庭を散歩した。髭ひげをひねりながら、また、テラス覧台の舗石に拍車を鳴らしながら、腕のように太いお世辞を言ったり、愉快な冗談口をきいたりした。アントアネットは彼を面白い男だと思った。彼女の驕きょうまん慢と愛情とはしみじみとそそれた。彼女は幼い初恋のうれしさに浸り込んだ。オリヴィエはその田舎紳士いなかをきらいだった。強くて鈍重で粗暴で、騒々しい笑い方をし、螺盤まんりきのようにしめつける手もち、彼の頬ほおをつまみながらいつも見くびりがちに、「坊っちゃん……」などと呼びかけ

るからであつた。ことにきらいだつた——なんとなく虫が好かなかつた——わけは、他家よその者であるその男が姉を愛してるからであつた……自分の姉を、自分一人のもので他ほかのだれのものでもない大事な姉を！……

そのうちに、破綻はたんが到来した。数世紀以来同じ一隅いちぐうの土地に固着してその汁しるを吸いつくした、それらの古い中流家庭の生活には、早晩一破綻の起こるのが常である。それらの家庭は静かな眠りをむさぼつていて、自分が身を置いてる大地とともに永遠なものだとみずから信じている。しかしその足下の大地は死滅して、もはや根がなくなつてゐる。鶴嘴つるはしの一撃に会えばすべてが崩壊

する。すると人は不運だと言ひ、不慮の災いだと言ふ。けれども樹木にも少し抵抗力があつたならば、決して不運はないであろう。あるいは少なくとも、数本の枝は吹き折つても幹を揺るがするところのない暴風のように、その困難はただ通り過ぎてしまふであらう。

銀行家ジャンナンは、気が弱く信じやすく多少 きようまん 驕慢 だつた。彼はわざと眞実を見ようとせず、「實際」と「外見」とを混合しがちだつた。彼は無分別に濫費していたが、それでも財産に大した穴を明けはしなかつた。實際のところその濫費は、古来の儉約な習慣のために後悔のあまり和らげられていた——（彼は大東の薪を費消しながら、一本のマッチをおしんでいた。）彼はまたそ

の事業にもごく慎重ではなかった。友人に金を貸すのをかつて拒んだことがなかった。そして彼の友人となることもさほど困難ではなかった。彼は受取証を書かせるだけの労を取らないのが常だった。貸金の計算なども粗漏をきわめていて、向こうから返して来なければほとんど催促をしなかった。他人がこちらの誠意を信頼してくれてると思うとともに、こちらからも他人の誠意に信頼していた。それにまた、儀式張らない円滑な態度のために小心だと思われていたが、実際はそれ以上に小心だった。厚顔な哀願者を体よく断わることもなし得なかったし、その支払能力を気づかっている様子をも示し得なかった。好意と意気地なさが強く働いていた。だれの気をも害したくなかったし、また他人から侮辱さ

れるのを恐れていた。それでいつも譲歩した。そしてみずからごまかすために進んで譲歩して、あたかも金を取られるのは仕事をしてもらうことでもあるかのようだった。実際にそう思わないでもなかった。自負心と楽観とのあまり、自分のする事はみなりっぱな事だとたやすく思い込んでいた。

そういうやり方は、ますます債務者らを寄せつけるばかりだった。百姓らはいつでも彼の恩恵にすがれることを知っていたし、また実際恩恵にはずれることがなかったので、皆彼を尊敬していた。しかし世人の感謝は——善良な人々の感謝でさえも——適当な時期に摘み取らなければならぬ事実のごときものである。木の上にあまり古く放っておくと、やがて<sup>かび</sup>黴が生えてくる。数か月

たつと、ジャンナン氏から恩恵をこうむった人々は、その恩恵も当然のことだと考える癖がついてしまった。そのみならず、ジャンナン氏があんなに喜んで自分たちを助ける以上は、そこになんらかの利益があるに違いないと、自然に信じがちであつた。もつとも気のきいた者たちは、自分の手で取った兎か、自家の鶏小屋から集めた卵かを、市の立つ日に銀行家へ贈つて、それで帳消しになつたつもりでいた——負債をでなくとも、少なくとも感謝の念だけは。

それまでは、要するにまだわずかな金額のことばかりだつたし、ジャンナン氏の相手はかなり正直な人ばかりだつたので、大した不都合をきたさなかつた。金の損失は——それを彼はだれにも一

言も漏らさなかつたが——ごく僅きんし少な額しょうだった。しかしジャンナン氏がある奸かん策家さくかと接触するようになってからは、様子が違つてきた。この奸策家はある工業上の大事業を企てていて、銀行家ジャンナンの人の善よさとその資力とを聞き伝えたのだった。態度の堂々たる人物で、レジオン・ドヌールの勲章を所有し、友人としては、二、三の大臣、一人の大司教、多くの上院議員、文芸界や財界の著名な人々、などをもつてると言い、ある有力な新聞と懇意だと自称していて、相手の人柄にふさわしい高圧的なまな馴なれ馴れしい調子を巧みに取ることができた。自己推薦の方法としては、ジャンナン氏より少し機敏な人ならだれでも気づくほどのずうずうしさで、それら高名な知人らから受けたつまらない

挨拶状、すなわち晩餐へ招待の礼状やそのお返しばんさんの招待状などを、一々並べたてた。がだれでも知っているとおり、フランス人はそういうありふれた書状なんかは決しておしまないし、知り合いになつたばかりの男から握手や晩餐の招待を平気で受けるものである——ただ、その男が面白い人物でかつ金銭を求めさえしな  
いならば。なおその上に、他人が自分と同様にしてくれさえするならば、自分も新しい知人へ金を貸すことを拒まないような者も多くある。そして、隣人からその持て余してゐる金を巻き上げてやろうとする利口な男が、他の羊をも引き込むためにまつ先に海へ飛び込もうとする羊を、どうしても見出し得ないとするならば、それは不運のせいだといふのほかはない。——前にさういふば

な羊がなかつたとしたら、ジャンナン氏はたしかにその最初の人だつたらう。彼は人からむしり取られるようにできてる富裕な善人だつた。彼はその訪問者のりっぱな知人仲間だの、能弁だの、お世辞などに、惑わされてしまい、またその助言の最初の好結果に、迷わされてしまった。でも最初はあまり冒険しなかつた。そして成功した。そしてこのたびは大きな冒険をした。つぎには何もかも、自分の金ばかりでなく預金者らの金をも賭<sup>か</sup>けた。預金者らにはそれを知らせなかつた。たしかに儲<sup>もう</sup>けると信じきっていた。りっぱにやりとげて彼らをあつと言わせたかつた。

計画は蹉<sup>さ</sup>跌<sup>てつ</sup>した。彼はパリーのある人からの通信で、間接にそれを知らせられた。その人は新しい失敗の事件を、ついでに一言

述べたのであつて、ジャンナン氏がその犠牲者の一人だろうとは夢にも知らなかつた。というのは、ジャンナン氏はだれにもいつさいを秘密にしていたから。彼はほとんど考えられないほどの軽率な振舞をして、事情に通じてる人の助言を求めるところを、怠つていた——避けてるかの観さえあつた。彼はすべてを内密に行ない、自分の確実な良識に自惚うぬぼれていて、きわめて漠ぼくぜん然たる情報だけで満足していた。人生にはそういう迷めい妄もうがよくあるものがある。ある時期にはどうしても没落を免れないものらしい。あたかも人に助けられるのを恐れてるかのようなのである。救いの助言をすべて避け、自分の身を隠し、いらだちながらあせるだけで、勝手に一人で深く沈み込んでしまう。

ジャンナン氏は停車場へかけつけ、苦悶くもんに心を閉ざされながら、パリー行きの汽車に乗った。そして相手の男を捜しに行つた。報知うそは嘘であるか、あるいは少なくとも誇張されたものであるかもしれないと、虫のいい希望をつないでいた。が相手の男は見出せなかつた。そして失敗がほんとうであることを知つた。完全な失敗だつた。彼は狼狽ろうばいして帰つて来ながら、すべてを秘密にした。だれもまだそれに気づかなかつた。彼は数週間の、数日間の、余裕を得ようとつとめた。そして例の医いしがたい楽天主義のあまり、損失全部をでなくとも、せめて預金者らへかける損失だけは、回復の方法を見出せるだろうと、無理にも思い込んだ。そして種々の方法を講じてみたが、あまりへまに急いだために、なお成功の

機会があつたとしてもそれをも失つてしまった。方々へ借財を申し込んだがみな断わられた。自棄<sup>やけぎみ</sup>気味に残りのわずかな財産を投げ出して投機を試みたが、そのために万事窮してしまった。それ以来彼の性格は一変した。何事も口には出さなかつた。しかし、いらだちやすく気荒で冷酷でひどく陰鬱<sup>いんうつ</sup>になつた。他人といつしよのときにはやはりまだ快活を装つていた。しかし不安な様子  
はだれの眼にもついた。人々はそれを彼の健康状態のせいにした。けれど彼は、家族の者らにたいしてはそれほど自分を押えなかつた。何か重大なことを心に隠してるのが、すぐに彼らの眼に止まつた。平素の彼とはまったく違つていた。ともすると室の中に駆けこんで、戸棚<sup>とだな</sup>の中をかき回しながら、あるかぎりの書類をごち

やごちやに床ゆかの上に放り出し、あるいは何にも見つからないので、あるいはだれかが手伝おうとするので、狂人のように猛たけりたつた。つぎには、その乱雑な中にぼんやりしてしまった。何を捜してるのかと尋ねられても、自分でもそれがわからなくなっていた。もう家族の者らをも念頭にしていないらしかつた。かと思うと、眼に涙を浮かべて彼らを抱擁した。もう夜も眠らなかつた。もう食事も取らなかつた。

ジャンナン夫人は、破滅の迫つてることをよく見て取つていた。しかし夫の事業に少しも関与したことがなかつたので、何にも理解できなかつた。彼女は尋ねてみた。彼はそれを手荒くしりぞけた。彼女は自尊心を害せられて、そのうえ強しいては尋ねなかつた。

しかしなぜとはなしにおののいていた。

子供たちは危難に気づくことができなかつた。もちろんアントアネットは伶俐れいりだつたから、母と同じく、ある不幸を予感せずにはいなかつた。しかし彼女は、萌もえ出した恋愛の楽しさに浸つていた。心配な事柄を考えたくはなかつた。彼女は思い込んでいた、暗雲は自然と消えてしまふだろうと——あるいは、どうしてもそれを見なければならなくなるまでには、まだかなり間があるだろうと。

不幸な銀行家の魂の中に起こつてることを、おそらくもつとも理解しやすかつた者は、小さなオリヴィエであつた。彼は父が苦しんでいるのを感じていた。そして父とともに内々苦しんでいた。

しかし思い切つてなんとも言い得なかつた。もとより、何にもできはしなかつたし、何にも知りはしなかつた。そのうえ彼もまた、悲しい事柄から考えをそらして、それを見落としがちだつた。母や姉と同様に、彼も一つの迷信的傾向をもつていて、不幸は見たがらなければたぶん来るものではないと、信じがちだつた。この憐あわれな人たちは、脅かされてることを感じながらも、好んで駝だ鳥ちようの真似まねをしていた。石の後ろに頭だけを隠して、不幸からこちらの姿を見られていないことと想像していた。

不安な噂うわさが広まりかけていた。銀行の信用がだめになつたと言われていた。銀行家はその預金者らにたいしていかに保証を装つ

でも駄目だめだった。猜疑さいぎ心の深い預金者らは金の返還を求めてきた。ジャンナン氏は自分の没落を感じた。彼は自棄やけになつて弁解をしながら、憤慨を装つてみたり、傲然ごうぜんと苦にがりきつて、人々から信用されない不満を訴えたりした。はては古くからの預金者と喧嘩けんかまでした。そのために悪評は一般の信ずるところとなつてしまつた。預金返還の要求が輻輳ふくそうしてきた。彼はその要求に追いつめられてまったく途方にくれた。ちよつと旅行をして、近くの温泉町へ行き、銀行に残つてる札束さつたばを賭博とばくにかけ、たちまちのうちですつかり失つて、またもどつて来た。

その不意の旅行は、小さな町じゆうを混乱こんらんさした。彼は逃亡したのだという噂うわさまであつた。ジャンナン夫人は人々の興奮した不

安に対向するのが容易でなかった。も少し待つてくれるようにと懇願し、夫はきつと帰つてくるに違いないと誓つた。人々はそれを信じたがりながらも、ほとんど信ずることができなかつた。それで彼が帰つて来たのを知ると、皆ほつと胸をなでおろした。多くの者は、無駄むだな心配をしたのだと思いがちだつた。ジャンナン家の人たちはごく機敏だから、たとい蹉跌さてつをしたにせよ、それを切りぬけてゆけるに違いないと、人々は思いがちだつた。銀行家の態度もそういう印象を強めた。もはや最後の手段きり残つていないことが明らかになつては、彼は疲れてるようであつたが、しかしごく冷静だつた。汽車から降りて駅前いなかの並木道で、彼は数人の友人に出会いながら、数週間雨を得ないでいる田舎いなかのことや、

すてきな葡萄ぶどうの出来ばえのことや、その日の夕刊にのつてる内閣がかい瓦解のことなどを、平然と話していた。

家に帰っても彼は、夫人の心痛などを気にしてないふうだった。夫人は彼のそばに駆け寄り、不在中の出来事をごつちやに早口で話してきかした。彼女は彼の顔つきから、どういう危難か知らないがそれを彼がうまく回避し得たかどうかを、しきりに読み取るうと努めていた。それでも高慢のために何にも尋ねはしなかった。向こうから話し出されるのを待っていた。しかし彼は彼ら二人を苦しめてる事柄については一言も言わなかった。彼女が自分の心を打ち明けて彼の内密な相談にあずかりたがってるのを、それとなく避けてしまった。暑さのことや疲労のことなどを言って、ひ

どく頭痛がするところぼした。そして皆はいつものとおり食卓についた。

彼はものう懶げに考え込んで、ひたいしわ額に皺を寄せながら、あまり話をしなかつた。卓布の上を指先でたたいていた。皆から見守られてるのを知つて無理に食べようとし、沈黙のために氣遅れがしてる子供たちを、ぼんやりした遠い眼つきでながめていた。夫人は自負心を傷つけられて堅くなりながら、彼の顔を見ないでその挙動を一々うかがっていた。食事の終わるころ、彼はようやく我に返つたらしかつた。アントアネットやオリヴィエと話をしようとした。自分の旅行中二人は何をしていたかと尋ねた。しかし彼らの答えに耳を貸しはしないで、ただその声の響きだけを聞いていた。そ

して彼らの上に眼をすえてはいたけれど、ひとみ眸は他に向いていた。

オリヴィエはそれを感じた。他愛ない話の途中で口をつぐんで、

言いつづける気がしなかった。しかしアントアネットの方は、ち

よつと気まずい思いをした後に、快活な気分の方が強くなった。

愉快的なかささぎ鵲のようにしゃべりながら、父の手に自分の手を重ねたり、

父の腕にさわったりして、話してることをよく聞かせようとした。

ジャンナン氏は黙っていた。アントアネットからオリヴィエの方

へ眼を移した。その額の皺はますます深くなった。娘が話してる

最中に、彼はもう堪えかねて、食卓から立ち上がり、感動を隠す

ために窓の方へ行つた。子供たちは胸ナプキン布をたたんで、同じく立

ち上がった。ジャンナン夫人は彼らを庭へ遊ばせにやった。彼ら

が金切声をたてて小径で追っかけ合ってるのが、間もなく聞こえてきた。ジャンナン夫人は夫をながめた。夫はその方へ背中を向けていた。彼女は何か片付けるふうで食卓を回った。そして突然彼女は彼に近寄って、召使どもに聞かれはすまいかという懸念<sup>けねん</sup>から、また自分自身の心痛のあまりに、声をひそめて言った。

「あなた、どうなすつたんです？　どうかなすつたのでしょうか……。何か隠していらつしやるのでしょうか……。災難でも起こりましたか。苦しいことでもおありですか。」

しかし彼は、そのときもなお彼女を避けて、いらだたしげに肩をそびやかし、きつい調子で言った。

「いや、そんなことはないんだ。構わないでおいてくれ。」

彼女はむつとして遠のいた。どんなことが夫に起ころうともう  
気をもんでやるものかと、盲目な憤りのうちにみずから去った。

ジャンナン氏は庭へ降りていった。アントアネットは悪戯いたずらを

しつづけて、弟をいじめては駆けさしていた。しかし弟はもう遊  
びたくないと突然言い出した。そして父から数歩離れた所で、覧テ  
レースラースの牆壁しょうへきによりかかった。アントアネットはなお彼をから

かおうとした。しかし彼は口をとがらしながらそれを押しのけた。  
すると彼女は何か悪口を言った。そしてもう面白いことがなくな  
ったので、家にはいってピアノの前にすわった。

ジャンナン氏とオリヴィエと二人きりになった。

「坊や、どうしたんだい？　なぜもう遊ぼうとしないの？」と父

はやさしく尋ねた。

「くたびれちゃったの、お父さん。」

「そう。では二人でちよつと腰を掛けようよ。」

彼らは腰掛にすわった。九月の美しい夜だった。空は澄み切つて薄暗かった。ペチュニアの甘っぱい香りが、テラスの牆の下に

眠つてる暗い運河の、白けたやや腐れっぱい匂いに交つていた。

夕の蝶が、ゆうちょう金色の大きな天蛾が、てんが小さな糸車のよう羽音をたて

て花のまわりを飛んでいた。運河の向こう側の家の、戸の前にすわっている人々の静かな声が、静けさのうちに響いていた。家中ではアントアネットが、装飾用のイタリー抒情歌をピアノでひいていた。ジャンナン氏はオリヴィエの手を執っていた。彼は

煙草たばこを吹かした。オリヴィエは、しだいに父の顔だちをぼやけさしてゆく暗がりの中に、パイプの小さな火を見守った。その火は急に明るくなり、ぱつと吐かれる煙のために消え、また明るくなり、しまいにつきり消えてしまった。二人は少しも話をしなかつた。オリヴィエは二、三の星の名を尋ねた。ジャンナン氏は田舎なかのたいていの中流人士と同じく、自然界の事物についてはかなり無知だったので、尋ねられた星の名は一つも知らなかつた。ただ、だれでも知ってる大きな星座だけを知っていた。子供が尋ねてるのはそれらの星座のことだと思ってるふうをして、その名前を聞かしてやった。オリヴィエは問い返さなかつた。それらの神秘的な美しい名前を、耳にきいたり小声でくり返したりするのが、

いつもうれしかった。そのうえ彼は知識を求めることよりも、むしろ本能的に父に近づきたがっていた。二人は黙った。オリヴィエは腰掛の背に頭をもたせ、口をうち開いて、星をながめた。そしてうっとりとなつた。父の手の温かみあたたかがしみじみと感ぜられた。とにわかになその手が震えだした。オリヴィエは変だと思つて、にこやかな眠たげな声で言つた。

「おや、お父さんとうの手はたいへん震えてるよ。」  
ジャンナン氏は手を引つ込めた。

オリヴィエはその小さな頭を一人で働かしつづけていたが、やあつて言つた。

「お父さんもくたびれたの？」

「ああ、坊や。」

子供はやさしい声で言った。

「そんなに疲れちゃいけないよ、お父さん<sup>とう</sup>。」

ジャンナン氏はオリヴィエの頭を引き寄せて、それを自分の胸に寄せ掛からせながらつぶやいた。

「かわいそうに！……」

しかしオリヴィエの考えは、他の方へ向いていた。塔の大時計が八時を打っていた。彼は身を放して言った。

「本を読んでこよう。」

木曜日には、夕食後一時間たってから寝るまで、本を読むことが許されていた。それは彼のいちばん大きな楽しみだった。どん

なことがあると、その一分間をもさき与えたくはなかつた。

ジャンナン氏は彼を去らした。そしてなお一人で、薄暗い覽テラー台スの上をあちらこちら歩き回った。それから彼も家へはいった。

室の中にはランプのまわりに、子供たちと母親とが集まつていた。アントアネットは胴着にリボンを縫いつけながら、しやべつたり歌つたりするのをちよつともやめなかつた。それがオリヴィエには不満だつた。彼は書物の前にすわつて、眉まゆをしかめテープルに両肱ひじをついて、何にも聞こえないように拳こぶしを両耳に押しあてていた。ジャンナン夫人は靴くつした下を繕いながら、老婢ろうひと話をしていた。老婢は夫人のそばに立つて、一日の出費を報告し、その機会をとらえて少しおしやべりをした。いつも面白い話をもつてい

た。おかしななまり訛言で話すので、皆それに笑い出し、アントアネツトは真似まねようとした。ジャンナン氏はそういう一同を黙つてながめた。だれも彼に注意を向けなかった。彼はちよつと躊躇ちゆうちよ躊躇し、そこにすわり、一冊の書物を取り上げ、手任せのところを開き、また閉ざし、立ち上がった。どうしてもそこに落ち着けなかったのである。彼は蠟燭ろうそくをともし、挨拶あいさつの言葉を皆にかけた。子供たちに近寄つて、心をこめて抱擁した。子供たちは心を他処よそにしてそれに応じ、彼の方へ眼をもあげなかった——アントアネツトは仕事に気を取られ、オリヴィエは読書に気を取られていた。オリヴィエは耳から手はずしもしないで、気のない挨拶の言葉をつぶやいたまま、読書をつづけた——書物を読んできだつ

たら、家の者がだれか火の中へ落っこつても、彼はびくともしなかつたろう。——ジャンナン氏は室から出た。そしてなお隣の室でぐずついていた。ほどなく夫人は、老婢ろうひが帰つたあとなので、自分で箆筒たんすに着物をしまいに來た。彼女は彼の姿に氣づかないふうをした。彼はためらつたが、つぎに彼女のそばへ行つて、そして言つた。

「許してくれ。さつきは少し手荒な口をきいたが。」  
彼女は彼にこう言いたかつた。

——あなた、私は少しも恨んでおりません。ですが、いったいどうなすつたの。苦しみの種をおっしゃつてくださいね。

しかし彼女は、意趣返しをするのがうれしくて、こう言つた。

「私に構わないでください。あなたはほんとに乱暴な人ですわ。

女中かなんぞによりも、もつとひどく私にお当たりなすつたのね。  
」

そして彼女は、遺恨を含んだ激しい早口で苦情を並べたてながら、同じ調子で言いつづけた。

彼は気力のない身振りをし、苦笑を漏らして、彼女のもとを離れた。

だれも拳銃けんじゆうの音を聞かなかつた。ようやく翌日になって、夜来の出来事がわかつたとき、その真夜中ごろに、通りもひっそりとしてる中に、靴の音みたいなきつい音が聞こえたのを、隣人

らは思い出した。彼らはそのとき気にも止めなかった。夜の平穩はすぐにまた町へ落ちてきて、その重い襞ひだの中に生者をも死者をも包み込んだ。

眠っていたジャンナン夫人は、それから一、二時間後に眼を覚ました。そばに夫の姿が見えないので、不安になって起き上がり、方々部屋を見回り、階下したへ降りて行き、母家おもやと軒つづきの銀行の事務所へ行ってみた。そしてそこで、ジャンナン氏をその私室に見出した。ジャンナン氏は肱掛椅子ひしかけいすにすわり、事務机の上にごつたりとなつて、血にまみれていた。その血はまだ床ゆかにぼたぼたたれていた。彼女は鋭い叫び声をたて、手の蠟燭ろうそくを取り落とし、意識を失ってしまった。母家の人たちがそれを耳にした。召使た

ちが駆けつけて来、彼女を引き起こして手当てを施し、ジャンナンの身体を寝台の上に運んだ。子供たちの室は閉め切つてあつた。アントアネットは至福者のように眠つていた。オリヴィエは人声や足音を聞き伝えた。何事か知りたかつた。しかし姉の眼を覚ますのを気づかつた。そしてまた眠つた。

翌朝、その噂が町に広まつてからも、二人はまだ何にも知らなかつた。老婢が涙を流しながら、出来事を二人に知らしてくれた。母はまだ何にも考えることができなかつた。不安な容態でさえあつた。二人の子供は死を前にして、ただ二人きりだつた。最初のうちは、悲しさよりも恐ろしさの方が強かつた。そのうえ、落ちて着いて泣くだけの時間も与えられなかつた。その朝から早くも、

残忍な司法上の手続きが始められた。アントアネットは自分の室に逃げ込んで、青春の自己中心的なあらんかぎりの力で、息苦しい恐怖をしりぞける助けとなりうる唯一の考え、すなわち恋人へ思いをはせること、その方へすがりついていった。彼女は恋人の来訪を、今か今かと待っていた。この前会ったとき、彼は今までになくもつとも懇ろねんごだった。彼がすぐに駆けつけて来て、心痛を共にしてくれるに違いなかった。——しかし、だれも来なかった。だれからも一言の便りたよもなかった。なんらの同情のしるしも見られなかった。それに反して、自殺の噂うわさが広まるとすぐに、銀行の預金者らはジャンナン家へ押しかけ、無理にはいりこんで来て、無慈悲な癡どうもう猛もうさで、夫人や子供たちに激しい喧嘩けんかを吹きかけた。

数日のうちに、あらゆる没落がつみ重なってきた、親愛なる人の死亡、全財産と全地位と世間の尊敬との喪失、友人らの離反。それこそ全部の崩壊だった。彼らを生かしていたものは何一つ残存しなかった。彼らは三人とも、精神上の純潔さにたいする一徹な感情をもっていただけに、自分らに責のない不名誉をことにひどく苦しんだ。三人のうちで、もつともその苦悩に痛められたのはアントアネットだった。なぜなら彼女は平素もつとも苦悶くもんに遠ざかっていたから。ジャンナン夫人とオリヴィエとは、いかに断腸の思いをしたにせよ、苦しみの世界に門外漢ではなかった。本能的に悲観家である彼らは、圧倒されながらもそれほど驚きはしなかった。彼らにとっては、死の考えは常に一つの避難所だった。

今となつてはことにそうだった。彼らは死を希望した。もちろんそれは痛ましい諦めあきらには違いない。しかしながら、自信強く、幸福であり、生きること愛しているのに、この底知れぬ絶望に、あるいは身の毛もよだつ死そのものに、突然行き当たつた若人の反抗心に比ぶれば、それほど恐ろしいものではない……。

アントアネットは世間の醜悪さを一挙に見て取つた。彼女の眼は開けた。彼女は人生を見た。父や母や弟を批判した。オリヴィエとジャンナン夫人とがいつしよに泣いてる間に、彼女は一人自分の苦惱の中に閉じこもつた。彼女の絶望した小さな頭脳は、過去現在未来を考慮した。そしてもはや自分には何も残っていないのを知つた、なんらの希望もなんらの支持もないのを。もはや頼

りうるだれもいなかった。

悲しい恥ずかしい葬式が行なわれた。教会は自殺者の死体を受けることを拒んだ。寡婦と孤児たちとは卑劣な旧友らから見捨てられた。ようやく二、三の人たちがちよつと顔を出した。彼らの迷惑そうな態度は、他に会葬者がないことよりもさらにつらかった。彼らは会葬を一つの恩恵としているらしかった。その沈黙は非難と軽蔑けいべつ的な憐憫れんびんとの塊かたまりだった。親戚しんせきの方はさらにひどかった。ただに弔慰の言葉を寄せないばかりでなく、苦々にがにがしい非難を寄せてきた。銀行家の自殺は人々の怨恨えんこんを鎮しずめるどころか、破産にも劣らないほどの罪悪らしかった。中産階級は自殺者を許さない。もつとも不名誉な生よりもむしろ死を選ぶことは、

もつてのほかのことだと思われている。「諸君といっしよに生きることくらい不幸なことはない、」と言うらしい人の上には、あらゆる峻しゅんげん厳げんな法の制裁が喜んで加えられる。

もつとも卑怯ひきような者こそ、もつとも激しく自殺を卑怯な行ない

だと非難する。自殺者が人生からのがれながら、おまけに彼らの利益と復讐ふくしゅう心を毀損きそんするときには、彼らは狂人のようにな

る。——彼らは、不幸なジャンナン氏がいかに苦しんでからここまで到達したかを、ちよつとも考えてみようとしなかった。なお彼を千倍も苦しませたいほどだった。そして彼がいなくなると、その家族の者たちに非難の鋒ほこさき先を向けた。彼らはそれを自認してはいなかった。なぜならそれは不正なことだと知っていたから。

けれどもやはりそうせずにはいられなかった。一つの犠牲者が彼らには必要だったのである。

もはや嘆くよりほかに能のないように見えるジャンナン夫人も、夫が攻撃をされると、氣力を回復してきた。彼女は今や、どんなに彼を愛していたかを知った。そして三人の者は、あすはいかになりゆくか少しも考えていなかった。皆心を合わせて、母の持参財産や各自の財産を提供して、できるだけ父の負債を償却した。それからもう土地へとどまってることができなくて、パリへ行こうと決心した。

出発は逃亡に等しかった。

前日の夕方——（九月末の寂しい夕ゆうべだった。田野は白い濃霧に覆おおわれて見えなかった。水族館の植物みたいに、雫しずくをたらしてる寂しい灌かんぼく木の姿が、道の両側に霧の中から、進むにつれて現われてきた）——その夕方、彼らは墓へ別れを告げに行つた。新しく掘り動かされた墓穴のまわりの、狭い縁石に、三人ともひざまずいた。無言のうちに涙が流れた。オリヴィエはしゃくりあげていた。ジャンナン夫人はたまらなそうに涙はなをかんでいた。生前最後に会つたとき夫へ言つた言葉を飽かず思い起こしては、彼女の心はさらに苦しみもだえていた。オリヴィエは覽テラース台の腰掛でかわした話を思っていた。アントアネットは自分たちがどうなるかを考えていた。一同を没落の淵ふちに巻き込んだその不運な人にたい

しては、だれも非難の気持をもっていなかった。しかしアントアネットは考えていた。

「ああお父様とう、私たちはこれからどんなに苦しむことでございましょう！」

霧は暗くなって、その湿気が彼らの身に沁しみた。しかしジャンナン夫人は、思い切つて立ち去ることができなかつた。アントアネットは震えてるオリヴィエを見て、母へ言つた。

「お母さんかあ、私寒いわ。」

彼らは立ち上がった。立ち去る間ぎわにジャンナン夫人は、墓の方へ最後にも一度振り向いた。

「私のおかわいそうな方かた！」と彼女は言つた。

落ちくる夜の闇やみの中を、彼らは墓地から出た。アントアネットはオリヴィエの凍えた手を執っていた。

彼らは古い家にもどった。彼らがいつも眠り、彼らの生活が過ごされ、先祖の生活が過ごされた、その古巣における最後の夜だった。その壁、その竈かまど、その一隅いちぐうの土地、それらには一家のあらゆる喜びや悲しみがびったり結び合わさっていて、同じく家族の者であり、生活の一部であり、死によってしか別れることができないかと思われるものだった。

荷造りはでき上がっていた。彼らは翌朝、近所の店の戸が開かれる前に、一番列車に乗ることになっていた、近所の者の好奇心や意地悪い推測を避けるために。——彼らはたがいに身を寄せ合っ

ていたかった。けれどもいつしか各自の室には行って、そこでぐずついていた。帽子や外套マントをぬごうともしないで、じつとたたずみながら、壁や家具やすべてこれから別れようとする物に手を触れ、窓ガラスに額ひたいを押しつけ、愛する品々の接触を心に止めて長く忘れまいとした。しまいに彼らはおのおの、自分一人の悲しい考えから努めて身を振りもぎつて、ジャンナン夫人の室に集まった。奥に大きな寝所のついたなつかしい室で、昔は、夕食後客がない晩は皆でそこに集まったのだった。昔は！……というほど何もかもすでに遠くなったように思われた。——彼らはわずかな火をとりかこんで、口もきかずにじつとしていた。それから寝台の前にひざまずいて、いっしよに祈祷きとうを唱えた。夜明け前に起きな

ければならなかったから、ごく早く床についた。しかしなかなか眠れなかった。

ジャンナン夫人は、もう支度の時間ではないかと始終懐中時計を見ていたが、朝の四時ごろになると、ろうそく 蠟燭をともして起き上った。ほとんど眠らないでいたアントアネットも、その音を聞いて起き上がった。オリヴィエはぐっすり眠っていた。ジャンナン夫人はしみじみとその寝姿をながめて、思い切って呼び起こすことができなかった。彼女は爪つまさき 先で遠のいて、アントアネットに言った。「音をたてないようにしようね。かわいそうに、寝おさめにゆっくり寝かしてやりましょう。」

二人は身支度を終え、包みをこしらえ上げた。家のまわりには、

寒い夜の、人も獣もすべて生きてるものは温かい睡眠にふけつて  
る夜の、深い沈黙が立ちこめていた。アントアネットは齒の根を  
震わせていた。彼女は心も身体も凍えていた。

表門の扉とびらの音が凍った空气中に響いた。家の鍵かぎをもつて老婢ろうひ  
が、最後の御用を勤めに来たのだった。彼女は背が低くでっぷり  
していて、息が短く、肥満のために不自由だったが、しかし年齢  
のわりには妙に敏活だった。温かく頬ほおを包んだ善良な顔つきで、  
鼻頭を真赤まっかにし、眼に涙を浮かべながら、姿を現わした。そして、  
ジャンナン夫人が彼女を待たずに起き上がり、台所の炉に火を焚た  
きつけてるのを見てがっかりしてしまった。——オリヴィエは老  
婢がはいって来たので眼を覚さました。がすぐにまた眼を閉じ、夜

具の中で寝返りをして、ふたたび眠った。アントアネットは寄つて来て、その肩にそつと手をかけ、小声で呼んだ。

「オリヴィエ、ねえ、もう時間よ。」

彼はほつと息をつき、眼を開き、のぞき込んでる姉の顔を見た。姉は悲しげに微笑みかけて、その額を<sup>ほほえ</sup>手でなでてやった。彼女はくり返した。

「さあ！」

彼は起き上がった。

彼らは盗人でもあるかのようにそつと家を出た。各自に包みを手に下げていた。老婢は先に立って、かばんを積んだ手車をひいていた。彼らは所有物をほとんどすべて残しておいて、いっし

よに持つてゆく物としては、身につけたものと少しの着物とだけと言つてもよいほどだった。わずかな記念品は、あとから徐行列車で送られるはずだった。幾冊かの書物、若干の肖像、それから自分らの生命と同じ鼓動を打つてるようには彼らには思われる、古い掛時計など……。寒い空気は身に沁しむほどだった。町にはまだだれも起きていなかった。どの雨戸も閉しまっていて、街路はひっそりしていた。彼らは黙っていた。老婢ろうひだけが口をきいていた。ジャンナン夫人は、過去のすべての思い出であるあたりの風物を、最後に深く心へ刻み込もうとしていた。

停車場へ着くと、ジャンナン夫人は自尊心から二等の切符を買った。三等に乗るつもりだったけれど、こちらの顔を知ってる二、

三の駅員の前で、その恥辱を忍ぶだけの勇気がなかった。彼女はあいた車室にあわただしく乗り込み、子供たちといっしょに閉じこもった。そして皆は窓掛けの後ろに隠れて、知人の顔が見当たりはすまいかとびくびくしていた。しかしだれもやって来る者ではなかった。彼らが出発する時間には、町はようやく眼を覚さましかけてるばかりだった。汽車の中はがらんとしていた。三、四人の百姓が乗ってるきりで、その他には数頭の牛が、貨物室の柵さくの上から頭をつき出して、憂鬱ゆううつな鳴き声をたてていた。長く待たせたあとに、機関車が長い汽笛を鳴らして、汽車は霧の中を動き出した。三人の移住者は窓掛けを払い、顔を窓ガラスにくっつけて、最後にも一度ながめた、霧もやに隔てられてぼんやり見えてるゴチツ

ク式の塔のある小さな町を、茅屋ぼうおくの立ち並んでる丘を、霜氷に白くなつて湯気の立つてる牧場を。それはもはや、あるかなきかの遠い夢景色げしきだった。線路が曲がつて、ある切り通しの中にはいり込み、その景色が見えなくなつてしまふと、彼らはもう人に見られる恐れもないので気をゆるめた。ジャンナン夫人は口にハンケチをあててすすり泣いた。オリヴィエは母に身を投げかけ、その膝ひざにつつ伏して、その手に唇くちびるをつけ涙をそそいだ。アントアネツトは車室の向こう隅すみにすわり、窓の方を向いて、黙つて涙を流した。彼らは三人とも同じ理由で泣いているのではなかつた。ジャンナン夫人とオリヴィエとは、あとに残してきたものことばかりを考えていた。アントアネツトは今後の事柄をいつそう考え

ていた。彼女はそれをみずからとがめた。過去の思い出にのみふける方が好ましかつた。——彼女が未来のことを思うのは道理だった。彼女は母や弟よりもいつそう確かな見解をもっていたのである。母と弟とはパリーに幻をかけていた。アントアネットでさえ、彼らがパリーでどんな目に会うかを少しも気づいていなかった。彼らはまだかつてパリーへ行つたことがなかった。ジャンナ夫人には、パリーに、ある司法官と結婚して豊かに暮らしてる姉があつた。その姉の助力を彼女は当てにしていた。それにまた、子供たちはりっぱな教育を受けてはいるし、母親としては通例な彼女の自惚れうねぼの眼から見れば、天分もかなりあるしするから、りっぱに生活するのは容易であろうと、彼女は信じ込んでいた。

到着の印象は痛ましかつた。早くも停車場で、荷物取扱場に押し合つてる人込みや、出口の前に入り乱れてる馬車の騒々しきなどに、彼らは惘ぼうぜん然としてしまった。雨が降つていた。辻馬車つじが見出せなかつた。重い荷物に腕も折れるばかりになつて、街路のまん中に立ち止まつては、馬車にひかれるか泥どろをはねかけられるかするような危い目に会いながら、遠くまで行かなければならなかつた。いくら呼んでも応じてくれる御者はなかつた。がついに、胸悪くなるほど汚きたない古馬車を駆つてる御者を呼び止めることができた。その馬車に荷物をのせると、一卷きの毛布を泥の中に取り落とした。かばんをもつてきた赤帽と御者とは、彼らの不案内

につけこんで二倍の金を払わせた。ジャンナン夫人はある旅館を名ざしたが、それは、じいさんたちのだれかが三十年も前に泊まったからというので不便を忍んでやってくる田舎者相手いなかの、下等で高価な旅館の一つだった。そこへ馬車から降ろされた。客がいつぱいだというので、狭い所に三人いっしょに押し込まれて、三室分の代を勘定された。食事に彼らは儉約するつもりで、定食を断わって質素な食べ物を注文したが、それがまた非常に高価たかくて、おまけにすぐ腹がすいた。彼らの幻影は到着すると間もなく消えてしまった。そして旅館に落ち着いた最初の夜、風通しのない室につめ込まれて眠れはせず、寒かったり暑かったり、息をつくこともできず、廊下の足音や扉とびらを閉める音や電鈴の音におびえ、馬

車や重い荷馬車の絶え間ない響きに頭を痛められて、その怪物のごとき都会が恐ろしく感ぜられた。その中に彼らは飛び込んで、途方にくれてしまったのである。

翌日ジャンナン夫人は、オースマン大通りにぜいたくな住居を構えてる姉のもとへ駆けつけた。片がつくまでその家に泊めてもらえるだろうと、口にこそ出さなかつたが心に思っていた。ところが最初の待遇ぶりからして、彼女の夢を覚ますに十分だった。

このポアイエ・ドウロルム家の人たちは、親しんせき戚せきの没落を怒っていた。ことに夫人は、自分たちにまで世の悪評が及びはしないかを恐れ、夫の昇進の妨げになりはしないかを恐れていたので、零落した家族の者が自分たちにすがりついてきて、なおも煩いをか

けるのは、この上もなくずうずうしいことだと考えていた。司法官の考えも同様だった。しかし彼はかなり善良な男だった。夫人から見張られていなかったら、少しは義ぎぎ侠心やくしんを起こしたかもしれないなかった——がもとより、見張られてることを苦にしてみいなかった。ところで、ポアイエ・ドウロルム夫人はきわめて冷淡に妹を待遇した。ジャンナン夫人はびつくりした。余儀なく自尊心をも捨ててしまって、目下の困難な境遇や、ポアイエ家から期待してる事柄などを、遠回しに述べたてた。が向こうからはわからないふうをされた。夕食に引き止められもしなかった。そして、今週の終わりにという儀式ばった招待を受けた。その招待もポアイエ夫人から出たのではなく、司法官から出たものだった。彼は

夫人の待遇ぶりをさすがに氣の毒に思つて、その冷淡さを少し和らげようとしたのだつた。彼は温良さを装つていた。しかし彼がさほど淡泊でなくごく利己的であることは、明らかに感ぜられた。——不幸なジャンナン家の人たちは、旅館へ歸つていった。その最初の訪問については、たがいに印象を語り合うこともなしかねた。

彼らはそれから毎日、部屋を捜しながらパリーの中をさまよつた。幾階もの階段を上るのに疲れきり、人がぎっしりつまつてる兵営みたいな家や、不潔な階段や薄暗い室など、田舎いなかの大きな家に住んだあとにはいかにも惨めみじで、見るのも厭いやになるものばかりだつた。彼らはますます氣が滅入めいつた。そして、往来や商店や料

理屋などどこでも、彼らはいつも驚きあきれていたもので、皆からだまされてばかりいた。彼らが求めるものはどれもこれも法外の価だった。あたかも手に触れる物をすべて黄金になす術すべを知つてゐるかのようだった。ただ、その黄金の代を払うのは彼らだった。彼らはこの上もなく拙劣で、また身を守るだけの力をももっていなかった。

ジャンナン夫人は、もはや姉へはあまり希望をかけていなかったけれども、招待された晩ばんさん餐についてなお幻を描いていた。彼らは胸をどきつかせながら招待におもむいた。すると、親戚としてではなく客として迎えられた——がもとよりその晩餐には、儀式かねめばつた接待以外の金目はかけられていなかった。子供たちはそ

の従兄姉いとこらに会った。ほとんど同じくらいの年ごろだったが、両親に劣らずよそよそしい態度だった。娘の方は、優雅でなまめかしくて、高ぶった丁寧な様子をし、わざとらしい甘っぱい素振りをして、気取った口調で話しかけてはジャンナンの子供たちをまごつかせた。息子むすこの方は、貧乏な親戚の者と会食する役目をいやがって、できるだけ苦にが々しい顔つきをしていた。ポアイエ・ドウロルム夫人は、椅子いすの上にきちんと威儀を正して、料理を勧めるときでさえ、たえず妹へ教訓をたれてるがようだった。ポアイエ・ドウロルム氏は、真面目まじめな話を避けるために、くだらないことばかり言っていた。面白くもない会話は、うちとけた危険な話題を恐れるあまり、食べ物食べ物の範囲外に出でなかった。ジャンナン

夫人は強いて、心にかかつてる事柄に話を向けてみた。しかしポアイエ・ドウロルム夫人から、なんでもない言葉でそれをきつぱりさえぎられた。彼女はもうふたたび言い出す勇気がなかった。

食事のあとでジャンナン夫人は、娘にピアノを一曲ひかせてその技ぎりよう倆へたを示させようとした。娘は当惑し心が進まないで、ひどく下手へたにひいた。ポアイエ家の人たちは退屈して、その終わるのを待った。ポアイエ夫人は皮肉な皺しわくちびるを唇に寄せて、自分の娘を見やった。そして音楽があまり長くつづくので、彼女はジャンナン夫人へ取り留めもないことを話しだした。アントアネットはその楽曲の中に迷い込んでいて、ある箇所では先をつづける代わりに初めをくり返し、もうひき終えるにも終えられなくなってるのに、

みずから気づいてまごついたが、しまいにぴったりひきやめて、正しくない和音を二度ひき、間違つた和音をも一つつけ加えて、それで終わりとしてしまった。ポアイエ氏は言った。

「すてきだ！」

そして彼はコーヒーを求めた。

ポアイエ夫人は、自分の娘はピユノーについて稽古けいこを受けてると言った。「ピユノーに稽古を受けてる」令嬢は、言った。

「たいへんお上じょうず手ね、あなたは。」

そしてアントアネットがどこで学んだか尋ねた。

会話は困難になつてきた。客間の装飾品やポアイエの夫人令嬢らの服装など、興味ある話題は話しつくされてしまつていた。ジ

ヤンナン夫人は心の中でくり返した。

「今が話すときだ。話さなければならぬ……。」

そして彼女はもじもじしていた。ついに元気を出して話そうと決心しかけると、ポアイエ夫人はちようどそのおりに、残念だが私どもは九時半に出かけなければならぬと、別に許しを求めようともしない調子で言い出した。遅らすことのできない招待を受けてるのだった……。ジャンナンの人たちは気を悪くして、すぐに立ち上がって帰ろうとした。ポアイエの人たちは引き留めるような様子をした。

しかしそれから十四、五分たって、だれかが訪れてきた。ポアイエ家の知人で、下の階に住んでる人たちであることを、下男が

知らしてきた。ポアイエと夫人とは目配せをし、召使らに向かつてあわただしくささやいた。ポアイエは何か訳のわからない口実を言いたてながら、ジャンナンの人たちを隣の室に移らせた。

（自分の名折れとなる親戚があることを、ことにそれが押しかけて来てることを、彼は友人らに隠したがっていたのである。）ジャンナンの人たちは、火のない室に置きざりにされた。子供たちはその恥辱に憤慨した。アントアネットは眼に涙を浮かべて、帰りがたがった。母親は最初それに反対した。けれどあまり長く待たされるので、ついに心をきめた。彼らは帰りかけた。それを下男から知らせられたポアイエは、控え室まで彼らを追っかけてきて、ありふれた文句で弁解をした。彼は引き留めたがってるふうを装

つていたが、早く帰ってもらいたがつてゐることは明らかだつた。彼は手伝つて外套がいたうを着せてやり、微笑や握手や小声の愛あいきよう嬌ようなどを振りまきながら、入口の方へ彼らを導き、そして外へ追い出した。——旅館へ帰ると、子供たちは口惜くやし涙にくれた。アントアネットはじだんだふみながら、もうあんな人たちの家へ足を踏み入れるものかと断言した。

ジャンナン夫人は、植物園の近くに、五階の一部屋を借りた。居室はみな、薄暗い中庭の汚ない壁に向かつていた。茶の間と客間とは——（ジャンナン夫人はぜひとも客間をほしがつていたのである）——人通りの多い街路に面していた。毎日、蒸気馬車が通り過ぎ、また葬式馬車が列をなして、イヴリーの墓地へはいり

込んでいった。虱しらみだらけのイタリー人らが、汚ない子供を連れて、ぼんやり腰掛にすわったり、荒々しく言い争ったりしていた。あまり騒々しいので、窓を開あけておくことができなかつた。そして夕方、家に帰ってくる時には、忙しげな臭い人波を押し分け、舗石も泥だらけの込み合った街路を横切り、隣家の一階にある厭いやなビール飲み場の前を通らなければならなかつた。そのビール飲み場の入口には、黄色い髪の毛をし、脂あぶらや白粉おしろいをぬりたてた、大きなでっぷりした女どもが、卑しい眼つきで通行人をうかがっていた。

ジャンナン一家のわずかな金はまたたくまになくなつていった。毎晩財布の中がますますすすむなしくなつてゐるのを見ると、彼らは胸

迫る思いがした。つつましい生活をしようとしたができなかつた。それは一つの学問であつて、子供のときから実行していなければ、学ぶのに幾年もの困難を経なければならぬ。生来経済家でない者は、経済家たらんとして時間をつぶしてしまふ。金のいる新しい場合に臨むと、それに打ち負けてしまふ。儉約はいつもこのつぎこのつぎへと延ばされる。そして偶然、わずかなものを儲けるもうかあるいは儲けたと信ずるときには、それを口実にすぐいろんなことに金を費やして、その全額は儲けの十倍にもなつてしまいがちである。

数週間たつと、ジャンナン一家の資力はずきはててしまつた。

ジャンナン夫人は、残りの自尊心をも捨てなければならなかつた。

彼女は子供たちに知らせないで、ポアイエに金の無心をしに行つた。彼女はくふうして、彼一人にその事務所で会つた。生活できるだけの地位を見出すまで、金を少し拝借したいと願つた。ポアイエは気が弱くかなり人情深かつたので、返事を延ばそうとしたあとですぐに心がくじけた。一時の感動を制しきれずに二百フラン貸し与えた。がもとよりその感動を、彼はすぐに後悔した——ことに、夫の気弱さと妹の奸策かんさくとに腹をたてたポアイエ夫人を、いろいろなだめなければならなかつたときに。

ジャンナン一家の者は、仕事の月を見つけるために、パリージュを駆け回つて日々を過ごした。ジャンナン夫人は田舎いなかの物持

ち一流の偏見にとらわれていて、「高尚」だと言われる職業——  
飯が食えないからそう言われるに違いないのだが——それより他  
の職業につくことを、自分にもまた子供たちにも許すことができ  
なかった。娘が家庭教師としてある家庭にはいることさえ、許し  
がたく思われるのだった。不名誉でないと彼女に思われるものは、  
国家に仕える公職しかなかった。でオリヴィエが教師となるため  
にその教育を終えるだけの方法を、なんとか講じなければならな  
かった。アントアネットについては、何かの学校にはいって教きょう  
鞭べんを取らせるか、あるいは音楽学校にはいってピアノの賞金を  
得させるかが、ジャンナン夫人の望みだった。しかし彼女が聞き  
合わせた学校にはみな教師がそろっていて、しかも、取るに足ら

ぬ初等免状をもつてる娘より、ずっと違つた資格をもつてる者ばかりだつた。また音楽の方面においては、衆にぬきんでることさえできないでいる他の多くの者の才能に比べても、アントアネツトの才能はしごく平凡なものであることを、認めないわけにはゆかなかつた。ジャンナン一家の者は、恐ろしい生存競争を見出し、また、パリーが使い道のない大小の才能をやたらに蕩<sup>とうじん</sup>尽<sup>じん</sup>してることを見出したのであつた。

二人の子供は落胆して、自分の価値をひどく見下げた。彼らは自分をつまらない者だと思つた。それをみずから証明し母親にも証明しようとおせつた。田舎<sup>いなか</sup>の学校でたやすく秀才となり得ていたオリヴィエも、種々の難儀に圧倒されて、天分をことごとく失

つてしまったかのようだった。新たにはいった中学校で首尾よく給費生になり得たが、最初のうちは級別が不運だったので、給費生の資格を取り上げられた。彼はまったく自分は馬鹿だと考えた。同時に彼はまた、パリーが厭いやだった。うようよしてる人込みや、仲間の者らの汚ない不品行や、彼らのみだらな話や、彼にも忌まわしいことを勧めずにはおかない数名の者らの獸性などが、厭いやでたまらなかつた。軽蔑けいべつの意を彼らに言つてやるだけの力さえなかつた。彼らの墮落を考えるだけで自分も墮落する気がした。彼は母や姉とともに祈きと禱のうちに逃げ込んだ。彼ら三人の潔白な心には、日ごとに受ける内心の失意や屈辱なども、一つの汚れたと思われてたがいに語り合うこともできず、夜になるといつもいっ

しよに、熱心な祈祷をするのであつた。しかしオリヴィエの信仰は、パリ―で呼吸される潜在的な無神論の精神に触れて、みずから気づかないうちにすでにこわれ始めていた。ま新しい漆喰しっくいが雨に打たれて、壁からはげ落ちるのと同じだつた。彼はなお信じつづけてはいた。しかし彼の周囲には神が死にかかつていた。

母と姉とは無駄むだな奔走をつづけていた。ジャンナン夫人はまたポアイエ家を訪れた。ポアイエ家の人々は彼らを厄やっかい介かい払はいしたがつて、地位を見出してやった。ジャンナン夫人の方は、南方で冬を過ごしてある老貴婦人の家に、朗読者としてはいることだつた。アントアネットの方は、一年じゆう田舎いなかに住んでいるフランス西部のある家庭に、家庭教師として雇われることだつた。条

件はさほど悪くなかった。しかしジャンナン夫人は断わった。彼女が反対したのは、自分が他人に使われるという屈辱よりもさらに、娘がそういう地位に陥るということであり、ことに自分のもとから娘が遠く離れるということであつた。いかに不幸であつても、そしてまた、不幸であるからこそ、彼らはいっしょにいたかつたのである。——ポアイエ夫人はそれをごく悪く取つた。生活の方法がないときには高ぶつてはいけない、と彼女は言つた。ジャンナン夫人は、彼女の心なしをとがめずにはいられなかつた。ポアイエ夫人は、破産のことやジャンナン夫人が借りていつた金について、ひどいことを言いたてた。二人は和解の道のない喧嘩けんか別れをした。関係はすべて絶えてしまつた。ジャンナン夫人はも

う一つの願いしかもたなかった、借りた金を返済すること。しかしそれが彼女にはできなかつた。

無益な運動がつづけられた。幾度もジャンナン氏の世話になつた同県の代議士と上院議員とを、ジャンナン夫人は訪問した。しかしどこへ行つても忘恩と利己主義とにぶつかつた。代議士は手紙へ返事もくれなかつた。彼女が自分で訪れてゆくと、不在だとの答えだつた。上院議員は彼女の境遇に粗雑な同情を寄せた口のきき方をし、その境遇も「あの悪いジャンナン」のせいだとして、ジャンナンの自殺を手きびしく非難した。ジャンナン夫人は夫を弁護した。上院議員は言い進んだ。銀行家のあの行動は不正直から出たことではないが、愚昧ぐまいから出たことは明らかである。彼は

馬鹿者であり迂闊者うかつものであつて、だれにも相談せず、だれの意見にも耳を傾けず、自分一人の考えでばかり事を行なおうとしたのだ。それでも、彼が一人で没落したのなら、何も言うことはない。当然のことだから。しかし——他人をも没落のうちに引き込んだことは言うまでもなく——妻と子供たちとを困窮のうちに投じておいて、なんとかやつてゆくままに打ち捨てて置きざりにしたと……それは、聖者のようなジャンナン夫人の眼から見たら許されもしようが、しかしこの上院議員は、聖者 (saint) ではなくて、単に健全 (sain) なる人間——健全で思慮あり理性ある人間——であることを誇りとしているので、許すべきなんらの理由をももつてはいない。そんな場合に自殺するような男は、悪い奴やつだとい

うべきである。ただジャンナンを弁護し得る唯一の酌量すべき事情は、彼にまったく責任があるのではなかったということである。そこで、上院議員はジャンナン夫人に向かつて、彼女の夫について多少苛酷かこくな言い方をしたことを詫わび、それも実は彼女に同情したからのことであると言ひ、そして引き出しを開きながら、五十フランの紙幣——施与——を差出した。それを彼女は拒絶した。

彼女はある官省に職を求めようとした。が彼女の奔走は拙劣だったし連絡が欠けていた。一度奔走するにもある限りの勇気を費やした。そしてはがっかりしてもどつて来、数日間身を動かすだけの力もなかった。ふたたび奔走しだすときにはもう時機遅れだった。また教会の人たちからも助力は得られなかった。彼らは彼

女を助けることに利益を見出さなかつたし、また、明らかに反<sup>はんそ</sup>

僧侶<sup>うりよ</sup>主義の主人をもつていた零落してゐる家族に、同情の念を起

こさなかつたのである。幾多の努力の後にジャンナン夫人が見出し得たものは、ある修道院におけるピアノ教師の地位——ひどく給料の少ないありがたい職業——であつた。彼女はなおも少し稼<sup>かせ</sup>ぐために、晩にはある筆耕取次所の仕事をした。その人たちはきわめて手きびしかつた。彼女の筆跡はまづかつたし、またいくら注意しても、うっかり一語落したり一行飛び越したりして——（それほど彼女は他の種々なことを考えていた）——ひどい小言をくつた。そして夜中ごろまで書きつづけて、眼を真赤<sup>まっか</sup>にして身体を疲らしきつた後、書き上げたものが受け付けられな

いこともあつた。彼女は途方にくれてもどつてきた。どうしていかかわからないで、幾日も溜ためいき息ばかりもらしていた。長い前から苦しんでいた心臓の病が、難儀のために重くなつて、不吉な予感を彼女に覚えさせた。ときとするともう死にかかつてるかのよ  
うに、胸が苦しくなつたり息がつまつたりした。出かけるときにはいつも、もしや往来で倒れるようなことになつたらと思つて、  
名前と住所を書いてポケットに入れておいた。もしここで死んだらどうなるだろう？ アントアネットは無理にも平気を装いながら、できるだけ母を支持していた。身体を大事にするように母へ  
勧め、自分を代わりに働かしてくれと頼んだ。しかしジャンナン夫人は、自分が今苦しんでる屈辱をせめて娘には経験させまいと

いうことを、自分の最後のわずかな誇りとしていた。

彼女は刻苦精励しなおその上に費用を節約したが、それでもうまくゆかなかった。彼女の所得だけでは一家の生活をささえるに足りなかつた。取つて置いた数個の宝石をも売らなければならなかつた。そしてもつとも不幸なことは、必要に迫つてるその金を、ジャンナン夫人は手にしたその日に盗まれてしまった。憐れにも彼女はいつもうっかりしていて、外に出たついでにふと思いついて、その筋道に当たるかんこうば勧工場へはいつてみた。翌日がちようどアントアネットの誕生日に当たるので、何かちよつとした物を買つてやりたかつた。彼女は失わないようにと金入れを手に握つていた。そしてある品物をよく見るときに、手の金入れをちよつと

勘定台の上に何気なく置いた。ところがそれをまた手に取ろうとすると、金入れはもうなくなっていた。——それは最後の打撃だった。

それから二、三日後、八月末の息苦しい晩——蒸し暑い濃い靄もやが都会の上に重くたなびいていた晩——ジャンナン夫人は、筆耕取次所に急ぎの仕事を渡してもどつて来た。夕食の時間に遅れていたが、三スーの乗合馬車賃を儉約して歩いた。子供たちが心配してやすまいかと気づかってあまり急いだので、すっかり疲れきってしまった。五階の住居へ着いたときには、もう口をきくことも息をすることもできなかつた。彼女がそういう状態でもどつてくるのは、それが初めてではなかつた。子供たちはもうそれに驚

かなくなっていた。彼らといっしよに彼女は無理にすぐ食卓へついた。暑苦しくて子供たちは二人とも食べ物のどが喉に通らなかつた。肉の切れや味のない水を二口三口いやいや飲み込むのも、やつとのことだつた。気分がなおる余裕を母に与えるため話もしなかつた——（話したくもなかつた）——そして窓をながめていた。

突然ジャンナン夫人は、両手を動かし、食卓へしがみつぎ、子供たちをながめ、うめき声を出し、そしてがつくりとなつた。アントアネットとオリヴィエはそのまに駆け寄つて、彼女を腕に抱き止めた。二人は狂人のようになつて、叫び願つた。

「お母かあさん！　ねえお母さん！」

しかし彼女はもう返辞をしなかつた。子供たちは思慮を失つた。

アントアネットは母の身体をひしと抱きしめ、接吻せつぶんをし名を呼んだ。オリヴィエは部屋の扉とびらを開いて叫んだ。

「助けて——！」

門番の女が階段を上つて来た。そして様子を見て取ると、近くの医者へ駆けていった。しかし医者 came ときには、もう駄目だめだと認めるよりほかはなかった。頓死とんしだった——ジャンナン夫人にとってには仕合わせというべきである——（たとい、みずから死ぬことを見て取りながら、またかかる困窮のうちに子供たちだけを置きざりにしながら、彼女がその臨終のわずかな瞬間にどういふことを考えたかは、だれにもわかりはしないけれど……）。

その災厄さいやくの恐ろしさを忍ぶにも二人きりだったし、泣くにも二人きりだったし、死のつぎに来る堪えがたい仕事に気を配るにも二人きりだった。親切な門番の女が、彼らを少し助けてくれた。ジャンナン夫人が稽古けいこを授けていた修道院からは、冷やかな同情の数語がよこされた。

初めのうちは、名状しがたい絶望のみだった。二人を救ってくれた唯一のものは、過度の絶望そのものだった。オリヴィエはほんとうの痙攣けいれん状態に陥った。そのためアントアネットは自分の苦しみから気がそらされた。彼女はもう弟のことしか考えなかつた。その深い愛情はオリヴィエの心に沁しみ通り、彼が苦悶くもんのあまり危険な逆上に陥ることを防いだ。母親の遺骸いがいが休らつてゐる寝台

のそばで、小さなランプの光の下で、二人はたがいに抱き合っていた。死ぬよりほかはない、二人とも、すぐに、死ぬよりほかはない、とオリヴィエはくり返した。そして窓をさし示した。アントアネットもまたその痛ましい願望を感じていた。しかし彼女はそれと闘たたかった。彼女は生きてかかった……。

「生きて何になるんだ？」

「この方かたのためによ。」とアントアネットは言った（彼女は母を指さし示していた。）——「この方はやはり私たちといっしょにいらつしやるわ。考えてごらんなさい……私たちのためにさんざんお苦しみなすつたのだから、いちばんひどい苦しみ、私たちが不仕合わせで死ぬのをご覧なさるといふ苦しみは、ああ、おかけし

ないようにしなければいけません……。」「と彼女は感情に激して言った。「……それに、そんな諦め方あきらめをしてはいけません！ 私はいやよ。私はどうあつても逆さからうわ。あなたがいつかは幸福になることを、私望んでるのよ。」「

「幸福になるものか！」

「いいえきつとなつてよ。私たちはあんまり不幸だったわ。今に変わってくるわ。変わるに違いないわ。あなたは生活を立ててゆき、家庭をもち、幸福になるでしょう。それが、それが私の望みよ！」

「どうして生きてゆけるの？ 私たちにはとてもできない……。」「  
「できますとも。なんだと思ってるの？ あなたが自活できるよ

うになるまでの間のことよ。私が引き受けるわ。見ててごらん  
さい、私がやってみせるから。ああ、お母かあさんが私のするとおり  
に任してくだすつたら、もうちゃんどできてたのに……。」「

「何をするつもりなの？ 私は姉ねえさんに恥ずかしいことをさせた  
くない。それに姉さんにはできやしない……。」「

「できますよ……。働いて生活するのは——正直でさえあれば  
——少しも恥じることはありません。心配しないでちょうだい、  
お願いだから。見ててごらんさい。万事うまくいきます。あな  
たは幸福になります。私たちは幸福になります。ねえオリヴィエ、  
この方も私たちのせいで幸福になります……。」「

二人の子供だけが母の柩ひつぎの供をした。二人はたがいに同じ心か

ら、ポアイエ家へは何にも知らせないことにした。ポアイエ家の人たちは、二人にとってはもはやないも同様だった。母にたいしてあまりに残忍だったし、母の死の一原因だったのである。門番の女から他に親戚はないかと聞かれたとき、二人は答えた。

「だれもありません。」

あらわな墓穴の前で、二人は手を取り合つて祈りをささげた。

彼らは絶望的な一徹さと傲ごうまん慢さとのうちに堅くなつていて、冷淡で虚偽な親戚らが会葬してくれるよりも、二人きりの寂しさの方が心地よかつた。——彼らは人込みの間を分けて歩いて帰つた。だれも皆彼らの喪に無関係であり、彼らの考えに無関係であり、彼らの存在に無関係であつて、彼らと共通なのは口にする言葉ば

かりだった。アントアネットはオリヴィエに腕を取らせていた。

彼らはその建物の最上階に、ごく小さな部屋を借りた——屋根裏の二室、食堂となる小さな控え室、押し入れくらいな大きさの台所。他の町へ行けばもつといい住居が見つかるかもしれないなかった。しかしここに住んでると、彼らはなお母親といっしょにいる心地がするのだった。門番の女は彼らに多少の同情を示してくれた。けれどやがて彼女は自分の仕事に気を取られてしまった。そしてもうだれも彼らに構ってくれなかった。同じ建物に借家してゐる人たちで、彼らを知ってる者は一人もなかった。そして彼らの方でも、隣にだれが住んでるかさえ知らなかった。

アントアネットは母の跡を継いで、修道院の音楽教師となるこ

とができた。そしてなお他にも稽古けいこの口を捜した。彼女はただ一つのことしか考えていなかった、弟を育てて師範学校に入れること。彼女は一人でそうきめていた。要項を調べ、種々聞き合わせ、オリヴィエの意見をも尋ねてみた——が彼はなんの意見ももたなかった。一度師範学校にはいれば、生しょうがい涯がいパンの心配はいらないし、未来は意のままになるはずだった。そこまで彼が到達することが必要だった。それまではどうしても生活してゆくことが必要だった。五、六年の恐ろしい間だった。がどうにかやりとげられるはずだった。そういう考えがアントアネットのうちで異常な力となつて、ついに彼女の心をすっかり満たしてしまった。今後の孤独な惨みじめな生活

は、彼女の眼にもはつきり前方に広がって見えていたが、その生活をあえてなし得るのも、彼女の心を占めてる熱烈な感激のゆえであつた。弟を救つてやり、もはや自分は幸福になれなくとも、弟を幸福にしてやるという、その感激のゆえであつた……。この十七、八歳の浮き浮きしたやさしい小娘は、勇ましい決心のために一変してしまつた。だれも気づかなかつたし、彼女自身もさらに気づかなかつたが、献身の情熱と奮闘の慢りおごりとが彼女のうちにあつた。女の危険な年ごろには、かの熱っぽい春の初めのころには、多くの愛情の力が、あたかも地下に音をたててる隠れた泉のように、一身を満たし浸し包みおぼらして、絶えざる迷執の状態おとしに陥れるものであるが、そのとき愛情はあらゆる形で現われる。

そしてただ、自己を与え自己を他人の糧かてに供することしか求めない。何かの口実がありさえすれば、その清浄な深い肉欲は、ただちにあらゆる犠牲心へ変化しようとしている。愛情はアントアネツトをして友愛の餌食えじきたらしめた。

弟は彼女ほど情熱的ではなかったから、そういう動力をもたなかった。そのうえ、彼のために向こうから身をささげてくれるのであつて、彼の方から身をささげてるのではなかった——愛するときにはこの方がずっと気楽であり楽しいものである。けれど彼は、自分のために姉が刻苦してるのを見ると、重苦しい呵責かしゃくの念を感じるのだった。彼はそのことを姉に言った。姉は答えた。

「まあお気の毒ね！　私が生きがいを感じてるのはそのためだと

いうことが、あなたにはわからないの。あなたのために苦労してるといことがなかつたら、私に<sup>ほか</sup>なんで生きてる理由が他にありましようか。」

彼にはそのことがよくわかつていた。彼がもしアントアネットの地位にあつたら、彼もやはりその尊い辛苦をほしがつたであろう。しかし、自分が彼女の辛苦の原因であることは！……彼の自尊心と愛情とはそれを苦しんだ。そして、一身に負わせられた責任は、成功の義務は、彼のような弱い者にとつてはたまらない重荷であつた。姉は彼の学業の成否に自分の<sup>しょうがい</sup>生涯を賭けてるのだつた。そういうことを考えるのは、彼には堪えがたかつた。そして彼の力を増大させるどころか、時とすると彼を圧倒すること

もあつた。けれどもとにかくそれは、反抗し勉勵し生きることを彼に強<sup>し</sup>いた。そういう強制がなかつたら、彼はおそらく生きるこ  
とがでしなかつたかもしれない。敗北——おそらくは自殺——へ  
の先天的傾向が彼のうちにはあつた。霸<sup>は</sup>氣をいだし幸福であるよ  
うにと姉が彼に望まなかつたら、彼はその傾向に引きずり込まれ  
たかもしれない。彼は自分の天性が他から逆らわれることを苦し  
んだ。けれどもそれが結局仕合わせだつた。幾多の青年が、官能  
の錯誤に駆られて、二、三年間の狂愚な行ないのために、全生涯  
をふたたび回復し得られないほど害して、まったく駄<sup>だ</sup>目になつて  
しまうあの恐るべき年ごろを、危機の年齢を、彼もまた通つてい  
た。彼がもし自分の考えにふける隙<sup>ひま</sup>があつたら、落胆か遊<sup>ゆう</sup>蕩<sup>とう</sup>か

に陥ったかもしれない。彼は自分のうちを内省するたびごとに、病的な夢想に、人生にたいする嫌悪けんお、パリーにたいする嫌悪、いっしょに入り交って腐ってゆく無数の人間の、きたない発酵にたいする嫌悪の情に、いつもとらわれるのであった。しかし姉を見ると、その悪夢は消え失うせてしまった。そして、彼女は彼を生かさんがためにのみ生きていたから、彼も生きる気になった、心ならずも幸福になりたい気になった……。

かくて、堅忍と宗教と高尚な願望とでできてる熱い信念の上に、彼らの生活はうち立てられた。二人の子供の全存在は、オリヴィエの成功というただ一つの目的へ向けられた。アントアネットは

いかなる仕事をもいかなる屈辱をも甘受した。彼女は方々の家庭教師をした。ほとんど召使同様に取り扱われた。女中みたいに教え子の散歩の供をし、ドイツ語を教えるという名目で、幾時間もいっしよに往来を歩かねばならなかった。そういう精神上の苦痛や肉体上の疲労にも、彼女は弟にたいする愛情によつて、また自負心によつてまで、一種の享樂を見出すのだった。

彼女は疲れきつてもどつて来ながら、オリヴィエの世話をしやつた。オリヴィエは半寄宿生として中学で一日を過ごし、夕方にしか帰つて来なかつた。彼女は夕食の支度したくをした、ガスこんろかアルコールランプかで。オリヴィエはいつも食いたがらなかつた。どんな物にも厭いや氣けを起こし、なお肉をきらつた。無理に食べ

させるか、あるいは気に入るちよつとした料理をくふうしなければならなかった。そしてかわいそうにアントアネットは、料理がじょうず上手ではなかった。非常に骨折つたあとでも、彼女の料理は食えないと彼から言われるような、悲しい目に出会つた。台所のかまどの前の絶望——無器用な若い世帯婦のみが経験する、だれにも知られないところの、生命を毒し時には睡眠をも毒する無言の絶望——それを幾度もくり返したあとにようやく、彼女は少し覚え知つたのだつた。

食事のあとで彼女は、使つた少しの皿さらを洗つてから——（彼のその仕事を手伝おうとしたが、彼女は承知しなかつた）——弟の勉強を母親みたいに監督した。その感じやすい少年の気持を害さ

ないようにいつも注意しながら、学課を暗誦させ、宿題を讀んでやり、調べてやることさえあつた。食卓と勉強机とに兼用してゐるただ一つのテーブルで、二人は晩を過ごした。彼は宿題をし、彼女は縫い物か写し物かをした。彼が寝てしまうと、彼女は彼の服の手入れをしたり、または自分の勉強をした。

とやかく暮らしてゆくのでさえ非常に困難ではあつたが、二人はたがいに心を合たくわわして、貯たくわえることのできる金はまず何よりも、母がポアイ工家から借りてゐる負債を返すのにあてることとした。それはポアイ工家の人たちがうるさい債権者だからといふのではなかつた。彼らからは風の便たよりもなかつた。彼らはその貸し金をまったく失つたものだと思つて、もう念頭においてはいなかつた。

それだけの金で、不名誉な親戚をやっかい厄介払いしたことを、心では喜んでいた。しかし二人の子供の方から言えば、けいべつ軽蔑すべきその連中に母親が何かの借りがあることは、自尊心と孝行心との上から苦しかった。二人は不自由を忍び、少しの慰みや服装や食べ物などからわずかなものを節して、借りの二百フランだけになそうとした——それも彼らにとつては大金だった。アントアネットは自分一人だけ不自由を忍ぼうとした。しかし弟は彼女の考えを知ると、ぜひとも同様にせずにはいなかった。彼らは二人ともその仕事に心を尽くして、日に幾スーかを余し得るときはうれしかった。

儉約を旨としてわずかずつ貯えながら、彼らは三年間に所要の

金額に達することができた。非常な喜びだった……。アントアネツトはある晩ポアイエ家へ行った。彼女は無愛想に迎えられた。援助を求めに来たと思われたのだった。彼らは機先を制するのが得策だと考えて、少しも便りをしなかったこと、母親の死を知らせもしなかったこと、用のあるときにしか顔を出さないこと、などを冷やかに彼女へ責めた。彼女はそれをさえぎって、迷惑をかけるつもりで来たのではないと言った。借りた金をもって来たまでのことだと言った。そしてテーブルの上に二枚の紙幣を置きながら、返済証を求めた。彼らはすぐに態度を変え、そして受け取りたくないふうを装った。数年たってから、もはや当てにしている金を返しに来る債務者にたいして、債権者がにわか感ずる

あの愛情を、彼らは彼女にたいして覚えたのだった。弟といっしよにどこに住んでるか、どういふふうに暮らしてるか、などと彼らは尋ねかけてきた。彼女は答えを避け、ふたたび返済証を求め、急いでると言い、冷やかに挨拶あいさつをし、そして立ち去った。ポアイエの人たちは、彼女のそういう恩知らずの態度を憤慨した。

かくてアントアネットは心にかかつてた思いを晴らしたが、やはり同じ儉約の生活をつづけた。それも今では弟のためにだった。ただ彼女は、弟に知られまいといつそう隠しぬいた。自分の身のまわりを節約し、ときには食べ物みなりを節してまで、弟の服装や娯楽のためをはかり、その生活を多少なりと楽しく派手やかにしてやり、ときには音楽会や音楽劇に行くこと——それがオリヴィエの

最大の喜びだった——を得させようとした。彼は姉を連れずに一人で行くことを好まなかった。しかし彼女は種々な口実を設けて、いっしょに行かないようにし、また彼に心苦しい思いをさせないようにした。たいへん疲れてると言ったり、外に出かけたくないと言った。音楽は退屈だとまで言った。彼はそういう愛情のこもった嘘うそにだまされはしなかった。しかし年少の利己心に打ち負けた。彼は劇場へ行つた。が一度そこへはいると自責の念にとらえられた。見物してる間そのことばかり考えていた。彼の喜びは害されるのだった。ある日曜日に、彼は姉に勧められてシャートレ座の音楽会へ出かけたが、三十分ばかりするともどつて来た。サン・ミシエル橋まで行くと、もうそれより先へ行く勇氣がなく

なつた、と彼はアントアネットへ言つた。アントアネットにとつては、弟が自分のために日曜の娯楽を廃してしまつたことは、悲しくもあつたがまた非常に心うれしかつた。オリヴィエは別に遺憾とはしなかつた。家にもどつて来て、姉の顔が包みきれぬ喜びに輝くのを見ると、いかにりつぱな音楽を聴<sup>き</sup>くよりもいつそう幸福な気がした。二人はその日曜の午後を、窓のそばに向き合つてすわりながら過ごした。彼は書物を手にし彼女は仕事を手にしていたが、どちらもほとんど縫いも読みもせず、たがいの身に関係のないなんでもないことを話し合つた。かつて日曜がこんなに楽しく思われたことはなかつた。これから二人いつしよでなければ音楽会へも行かないという氣になつた。もはや二人は一人一人で

幸福を味わうことができなくなつた。

彼女はひそかに儉約しながら、ピアノを一つ借りるだけの金をためて、オリヴィエをびつくりさせた。そのピアノは一定の賃貸借の方法で、幾か月かたつとまったく彼らの所有になるはずだつた。負担の上にさらにその重い負担を、彼女はあえて担になつたのだ。期限ごとの支払いが夢の中まで気にかかつた。必要な金を得るのに彼女は健康をそこなつた。しかしそういう熱中は、彼ら二人に非常な幸福をもたらしてくれた。音楽はつらい生活の中における樂園だつた。音楽は広大な場所を占めた。彼らは音楽に包まれてその他の世界を忘れた。それには危険が伴わないでもなかつた。音楽は近代の大なる害毒物の一つである。暖房のようなま

たは頼りない秋のようなその暖かい倦怠けんたいは、人の官能をいらだたせ意志を死滅させる。しかしそれは、アントアネットのように喜びのない過度の働きを強しいられてる魂にとつては、一つの休息となるのであつた。日曜日の音楽会は、たえざる労働の一週間中に輝く唯一の光明だつた。この前の音楽会の思い出やつぎの音楽会に行く希望、パリーを忘れ時を忘れて過ごすその二、三時間、それだけで彼らは生きていた。雨の中や雪の中に、あるいは風と寒さとの中に、たがいに身を寄せ合つて、もう座席がなくなりはずまいかと恐れながら、外で長く待った後、劇場にはいり込んで狭い薄暗い席につき、群集の中に没してしまつた。息をさえぎられ四方から押しつけられて、ときとすると暑さと窮屈さに気分

が悪くなりかかるともあつた。——が二人は楽しかつた。自分の幸福と相手の幸福とに楽しかつた。ベートーヴェンやワグナーなどの偉大な魂から流れ出る、善良と光明と力との波が心の中に注ぎ込むのを感じて楽しかつた。愛する同胞はらからの顔——あまりに年若くてなめた労苦や心労のために蒼あおざめてるその顔——が輝き出すのを見て楽しかつた。アントアネットはぐったりして、母親から両腕で胸に抱きしめられてるような心地がしていた。そのやさしい温あたたかい巢の中にうずくまっていた。そしてひそかに泣いていた。オリヴィエは彼女の手を握りしめていた。その恐ろしい広間の暗がりの中で、彼らに注意を向けてる者は一人もなかつた。が、その暗がりの中で、音楽の母性的な翼の下に逃げ込んで

る傷ついた魂は、彼ら二人きりではなかった。

アントアネットはまた信仰をもっていて、いつもそれから支持されていた。彼女はきわめて敬虔けいけんであつて、毎日欠かさず長い熱心な祈禱きとうをなし、日曜日には欠かさずミサに行つた。不当な惨みじめな生活の中にあつて彼女は、人とともに苦しみ他日人を慰めてくれる聖なる友の愛を、信ぜずにはいられなかつた。また神よりもなおいっそう、自家の故人たちと心を通わせていて、自分のあらゆる苦難をひそかに彼らへ打ち明けていた。しかし彼女は独立の精神と堅固な理性とをもっていた。他のカトリック教徒らから離れていて、彼らからあまりよくは見られていなかつた。彼らは彼女のうちに邪悪な精神があるとし、彼女を自由思想家もしくは

それになりかかっている者だと見なしがちだった。なぜなら、彼女は善良なフランス娘として、自分の自由判断を捨てようとはしなかつたから。彼女は卑しい家畜みたいに服従心によつてではなく、愛によつて信仰していたのである。

オリヴィエはもう信仰をもつてはいなかつた。パリーでの生活の初めのころからして、次第に信仰から離れていったが、ついにはそれを全然失つてしまった。彼はそれをひどく苦しんだ。彼は信仰なしで済ましてゆけるほど、十分強い人間でも凡庸な人間でもなかつた。それで激しい苦悶くもんの危機を通つたのだつた。しかし彼はなお神秘的な心を失わなかつた。そして、いかに無信仰になつたとはいえ、彼の思想は姉の思想にもっとも近いものだつた。彼

らはどちらも宗教的雰<sup>ふん</sup>囲<sup>い</sup>氣<sup>き</sup>のうち<sup>うち</sup>に生きていた。一日離れていたあとで各自に夕方帰つてくると、彼らの小さな部屋は彼らにとつて、一つの港であつた。貧しくはあるが清浄な犯しがたい避難所であつた。彼らはその中であつて、パリーの腐敗した思想から、いかに遠く離れてる心地がしたことだろう！……

彼らは自分がした事柄については多く話さなかつた。疲れて家に帰つて来る時には、苦しかった一日のことを話してそれをまた思い起こすことは、好ましくないものである。彼らは知らず知らずに、その日のことをいっしょに忘れようとつとめていた。ことに夕食のにおりに顔を合わせてしばらくの間は、たがいに尋ね合うことを差し控えた。ただ眼つきで挨拶<sup>あいさつ</sup>をかわした。ときとする

と、食事中一言もいわないことさえあった。アントアネットは弟をながめた。弟は昔小さかったときのよう<sup>に</sup>、皿<sup>はら</sup>を前にしてぼんやり考えていた。彼女はその手をやさしくなでてやった。

「さあ、」と彼女は微笑<sup>ほほえ</sup>みながら言った、「しつかりなさいよ。」

彼も微笑みを浮かべて、また食べ始めた。食事はそういうふうにして終わってゆき、彼らは口をきこうとつとめもしなかった。

彼らは沈黙に飢えていた。……しまいに、ようやく休らった心地がし、各相手のつつましい愛情に包まれて、その日のよごれた印象が一身から消え去った心地がするとき、初めて彼らの舌は少しほどけてくるのだった。

オリヴィエはピアノについた。アントアネットはいつも自分で

ひかないで、彼にばかりひかせておいた。なぜなら、ピアノをひくのが彼の唯一の慰みだった。そして彼は全力を尽くしてひいた。彼は音楽にたいしてりっぴな天分をそなえていた。活動するよりも愛するのに適した彼の女性的な天性は、自分が演奏する音楽家らの思想にやさしく結びつき、それといっしょに融とけ合い、そのもつとも微細な色合いをも熱心な忠実さで演奏し出した——がそれも、彼の弱い腕と息との許すかぎりにおいてであって、トリスタンやベートーヴェンの後期の奏鳴曲ソナタなどをひく非常な努力には、腕は折れそうになり息は絶えだえになるのだった。それで彼は好んで、モーツアルトやグルツクのうちに逃げ込んだ。そしてそれらはまた、姉の好きな音楽でもあった。

ときとすると、彼女も歌うことがあった。しかしそれはごく単純な歌で、古い旋<sup>メロデー</sup>律のものだった。彼女は重く弱い中音の含み声をもっていた。ごく内気だったので、だれの前でも歌えなかった。オリヴィエの前でさえようやくのことだった。喉<sup>のど</sup>がつまりそうになった。彼女がことに好んでいたものに、スコツトランドの言葉でベートーヴェンの曲になった、忠実なるジョニーというのがあった。ごく静かで……底には情愛がこもっていた……。ちようど彼女の性質に似ていた。オリヴィエは彼女がそれを歌うのを聴くと、いつも眼に涙を浮かべた。

しかし彼女は弟の演奏を聴く方が好きだった。早く食事の後片付けを終わろうと急いでいた。そしてオリヴィエの演奏をよく聴

くために、台所の扉とびらを開け放しておいた。彼女は非常に注意していたけれども、彼は我慢しかねて、皿を片付ける音がすると不平を言った。すると彼女は扉を閉めた。後片付けが終わると、やって来て低い椅子いすにすわった。それもピアノのそばにはなく——（なぜなら、彼は演奏中そばにだれかがいることを許し得なかつた）——暖炉のそばにであつた。そしてそこで、子猫ねこのようにかがみ込み、背をピアノの方に向け、一塊の練炭が音もなく燃えつきてゆく炉の赤い輝きに眼をすえながら、過去の事柄をうつとりと思ひ浮かべていた。九時が打つと彼女は無理にも、もうよす時間だとオリヴィエに知らせなければならなかつた。彼にその演奏をやめさせるのはつらいことだつたし、また自分もその夢から

覚めるのはつらいことだった。しかしオリヴィエにはまだ晩の勉強が残っていたし、寝るのがあまり遅れてもいけなかった。けれど彼はすぐには言うことをきかなかつた。音楽をやめて真面目まじめに仕事にかかるには、いつもしばらく時がかかつた。彼の考えは他の方面へうろついていた。そのぼんやりした心持から脱しないうちに、三十分が鳴ることがしばしばだった。アントアネットは机の向こう側で、かがみ込んで仕事をしながらも、彼が何にもしていないことを知っていた。けれど、彼を監視してゐるようなふうをしながら、彼の気分をいらだたせはすまいかと恐れて、あまり彼の方をのぞき込むことができなかった。

彼はその日々をとりとめもなく過こしてゆく自由気ままな年齢

——幸福な年齢——に達していた。清らかな額ひたい、ときどき黒い隈くまで縁取られる、ずるそうな率直な娘らしい眼、大きな口、その唇くちびるは乳飲み子のようにふくれ上がって、悪戯いたずらっこ兇らしい上の空のぼんやりした多少ゆがみ加減の微笑を浮かべるのだった。多すぎる髪は、眼のところまでたれていて、首筋のところでは髻もとどりのようになり、かたい一房ふさの毛は後ろへ巻き上がっていた。首のまわりにゆるいネクタイ——（姉がそれを毎朝丁寧に結んでくれた）——短い上着、そのボタンはいくら姉から縫いつけてもらってもすぐに取れた。カフスはつけなかった。手首の骨立った大きい手をしていた。嘲ちやうしやう笑的な眠たそうな恍惚こうこうとした様子で、いつまでもぼんやりしていた。つまらぬことをも面白がるその眼は、アン

トアネツトの室の中を見回していた——（勉強の机はアントアネツトの室に置いてあるのだった）——黄楊つげの小枝といっしよに象牙ぞうげの十字架が上方にかかつてる、鉄の小さな寝台——父や母の肖像——塔と鏡のような池とをもった田舎いなかの町を示してる古い写真、などの上に彼の眼は落ちた。それから、黙つて仕事をしてる姉の蒼あおざめた顔を見ると、彼女にたいする深い憐れん憫びんと自分自身にたいする腹だちとに、彼はとらわれるのだった。そこで彼ははつと我に返つて、ぼんやりしてたことをいらだつた。そして元気に勉強を始めて、無駄むだにした時間を取り返そうとした。

休みの日には書物を読んだ。二人は別々に読んだ。たがいに愛情をいだいてはいたけれど、同じ書物を声高くいっしよに読むこ

とはできなかつた。慎みが足りないように思われて厭いやだつた。りっぱな書物は、心の沈黙のうちにのみささやかなるべき秘密のようだつた。あるページが非常に面白いときには、彼らはそれを相手に読んできかせはしないで、その部分に指をあてて書物を渡し合つた。そして言つた。

「読んでごらんなさい。」

そして一人が読んでいる間、それを読んでしまった方は、眼を輝かしながら、相手の顔に現われる情緒を見守つていた。そしていつしよにその情緒を楽しんだ。

しかし多くは、書物を前にして肱ひじをつきながら、別に読もうともしなかつた。二人は話をした。ことに夜がふけてくるにつれて、

ますます心の中のことをうち明けたくなり、口がききやすくなつていった。オリヴィエは悲しい考えをいだいていた。弱い男である彼は、他人の胸に自分の悩みを注ぎ込んで、その悩みからのがれる必要があつた。彼は種々の疑惑に苦しめられていた。アントアネットは彼を励まし、その弱点にたいして彼を保護してやらねばならなかつた。それは毎日くり返される不断の闘たたかいだつた。オリヴィエは苦にが々がしい痛ましい事柄を口にした。言つてしまふとほつとした。そういう事柄がこんどは姉を苦しめるかどうかは、気にかけて知ろうともしなかつた。いかに姉をがっかりさしてるかは、ずっとあとになって気づいた。彼は姉の力を奪つてしまい、自分の疑惑を姉のうちにしみ込ませてるのだつた。がアントアネ

ツトはそういう様子を少しも見せなかった。生まれつき勇敢で快活であったから、もう長い前から快活さを失ったあとでもなお、強しいてうわべだけはそれを装っていた。ときとすると深い倦怠けんたいに襲われ、みずから決心してる一生犠牲の生活に反発心が起こることもあった。しかし彼女はそういう考えをしりぞけ、そういう考えを分析しようとしなかった。心ならずも起こってくる考えであつて、それを容認してるのではなかった。そして祈きとう祷の力で助けられた。ただ、心が祈り得ない時——（そういうこともあった）——心が乾かわききってしまったようなときは、そうはいかなかつた。いらいらして自分を恥じながら、神の恵みがふたたび来るのを黙って待つよりほかはなかつた。オリヴィエはかつてそうした苦惱

に気づかなかつた。そういうときにアントアネットは、いつも何かの口実を設けて、彼のもとから離れるか自分の室に閉じこもるかした。そして危機が過ぎ去つたときにしか出て来なかつた。出て来るときには、苦しんだことを悔いてるかのよう、にこやかにやましげで前よりいつそう優しかつた。

二人の室は隣り合つていた。たがいの寝台は一つの壁の両側にくつついていた。壁越しに低声で話が出来た。眠れないときには、壁をそつとこつこつたいて言つた。

「眠つたの。私は眠れない。」

仕切りの壁は非常に薄かつたので、二人は同じ床に清浄な添い寝をしてる友だちに等しかつた。しかし両方の室の間の扉とびらは、本

能的な深い貞節きで——きよ聖い感情で——夜の間にいつも閉め切られていた。開け放してあるのは、オリヴィエが病氣のときだけだった。それがまたごくしばしば起こった。

彼の虚弱な身体は、なかなか丈夫にならなかった。かえつてますます弱くなるかと思われた。のど喉や胸や頭や心臓をたえず悩んだ。ちよつとした風邪かぜも気管支炎に変わる恐れがあつた。しょうこうねつ猩紅熱

にかかつて死にかかつたこともあつた。たとい病氣でなくても、重い病氣の変な徴候を現わして、ただ幸いにも発病していないのだと思わせた。肺や心臓のある部分に痛みを覚えた。ある日医者しんのうえんは彼を診察して、心嚢炎か肺炎かの徴候があると言つた。つぎに専門の大家に診みてもらつたが、やはりそういう徴候だと断定さ

れた。けれども別に病気は起こらなかつた。要するに彼のうちで病気なのは、ことに神経であつた。そして人の知つてるとおり、そういう種類の悩みはもつとも予想外な形で現われる。それから不安な数日を過ごすともう癒なおつてゐる。しかしアントアネットにとっては、それがどんなにかつらいことだつた。幾晩も眠れなかつた。しばしば起き上がつて、扉越しに弟の息づかいをうかがつたが、寢床の中でも突然恐怖にとらえられた。弟が死にかかつてるのだと考へた。それがはつきりわかつてゐる。確かにそうだ。彼女は震えながら身を起こし、両手を合わせ、それを握りしめ、それを口に押しあてて声をたてまいとした。

「神様、神様！」と彼女は懇願した、「私から弟を奪わないでく

ださいませ。いいえ、あなたはそんな……そんなことをなさつてはいけません！……お願いです、お願いですから。……おうお母様！ 私を助けに来てくださいます。弟を助けて、生かしておいてくださいます！……」

彼女は全身を緊張さしていた。

「ああ、こんなに努めてきたあとに、ようやく成功しかけたときに、これから幸福になろうとするときに、途中で死ぬとは……。いいえ、そんなことがあるものですか、それはあまりひどすぎます！……」

オリヴィエはやがて、他の心配をも姉に与えることとなった。

彼は姉と同様にまったく清浄だったが、意志が弱くて、それに、あまり自由な複雑な知力をもっていたので、多少曖昧あいまいで懷疑的で、悪だと知ってる事柄にも寛大であつて、快樂にひかされていた。アントアネットはきわめて純潔だったから、弟の精神中に起こつてゐることを長く知らないでいた。がある日突然気づいた。

オリヴィエは彼女が外出してゐると思つていた。通例その時刻に彼女は出稽古でげいこをしていた。ところがつい少し前に、彼女は弟で子しから一言の手紙を受けて、今日は来ていたただかなくてもよいと知らせられた。それは乏しい予算から数フラン引き去ることではあつたが、彼女はひそかにうれしかった。そしてたいへん疲れていたので寢床に横たわつた。気がとがめずに一日休息し得るのが

楽しかった。オリヴィエが学校から帰って来た。友人が一人ついてきた。彼らは隣室にすわり込んで話しだした。その言葉がすっかり聞き取れた。彼ら二人きりだと思つて遠慮していなかった。アントアネットは微笑ほほえみながら、弟の快活な声に耳を傾けた。がやがて、彼女は微笑をやめた。血のめぐりが止まったかと思われた。彼らは生なまなま々々しい嫌いやな言葉でひどい事柄を話していた。それを喜んでるがようだった。オリヴィエの、あのかわいいオリヴィエの、笑い声が聞こえた、潔白だと信じていた彼の唇くちびるから、聞くもぞつとするほど嫌な、卑猥ひわいな言葉が漏れた。彼女は鋭い苦悩に身内を貫かれた。それが長くつづいた。彼らは話に飽きなかった。そして彼女は耳を貸さずにはいられなかった。しまいに彼らは出

かけた。アントアネット一人残った。すると涙が出てきた。心の中のあるものが滅びてしまった。自分の弟——自分の子供——についてこしらえていた理想の幻が、汚れてしまったのである。それは致命的な苦しみだった。晩に顔を合わせたとき、彼女はそれについて弟に何も言わなかった。彼は彼女が泣いたのを見てとつたが、その訳を知ることができなかった。どうして自分にたいする彼女の態度が変わったか、理由がわからなかった。彼女が自分を制し得るまでにはしばらく時がかかった。

しかし、彼が彼女に与えたもつとも痛ましい打撃は、ある夜家をあげたことだった。彼女は寝ないで一晩じゆう待ち明かした。そのために彼女が苦しんだのは、精神上の純潔さにおいてばかり

ではなく、心のもつとも神秘的な奥底——恐ろしい感情がうごめいてる深い奥底においてまでだった。その奥底を彼女は見まいとして、取り除くことを許さない被いおおを上おに投げかけた。

オリヴィエはことに自分の独立を断言してやろうと思っていた。朝になると、取り澄ました態度を装いながらもどつてきて、もしなんとか言われたら横柄おうへいな答えをするつもりだった。彼女の眼を覚さまさないように爪つまさき先立つつて部屋にはいつてきた。しかし見ると、彼女は起きたまま彼を待っていて、蒼あおざめて眼を真赤まっかに泣きはらしていた。彼に少しの非難をも加えないで、黙もくつて学校へ行く世話をしやり、その朝食をこしらえてやった。なんとも言いはしなかったが、気がくじけてしまつて様子だった。その全

身が生きた叱責しつせきであつた。それを見ると、彼は對抗しきれなかつた。彼は彼女の膝ひざに身を投げて、彼女の着物に顔を隠した。そして二人とも泣いた。彼は自分自身が恥ずかしく、過ぎした一夜がいとわしく、身が汚れてしまった心地がした。彼は話してしまいたかつた。彼女はその口に手をあてて話させなかつた。彼女はその手に唇くちびるを押しあてた。二人はそれ以上なんとも言わなかつた。たがいに心がわかつていた。オリヴィエは姉から期待されてるとおりの者になろうとみずから誓つた。しかし彼女はいかにつとめても、すぐにはその傷を忘れ去ることができなかつた。ちようど回復期と同じだつた。二人の間には気まずい隔てができた。彼女の愛情は前に劣らず強かつた。しかし彼女は弟の魂のうちに、今

や自分と縁遠いしかも恐ろしいあるものを、見てとつたのだつた。

オリヴィエの心の中に瞥べっけん見したものから、彼女がことに狼ろうば

狙いさせられた訳は、ちようどそのころ彼女は、ある男子連の追

求を苦しんでいたからである。日の暮れ方家にもどつてくるとき、

またことに、筆耕の仕事を取りに行つたり持つて行つたりするた  
め、夕食後出かけなければならぬようなとき、男から近寄られ  
たりついて来られたり、いやなことを聞かされたりするのが、彼  
女には堪えがたい苦痛だつた。弟を連れて行けるときはいつも、  
散歩させるといふ口実で連れ出した。しかし弟は快く同行しな  
かつたし、彼女も無理に強しいることはできなかつた。彼女は彼の勉

強を邪魔したくなかった。が彼女の純潔な田舎風の魂は、パリー  
のそうした風習になじむことができなかった。彼女から見れば、  
パリーの夜は暗い森であつて、きたない獣から追ひ回される心地  
がした。自分の住居から出るのが恐ろしかった。それでも出かけ  
なければならなかつた。出かけようと決心するにはかなり時間が  
かかつた。そのためにいつも苦勞していた。そしてかわいいオリ  
ヴィエも、自分を追つかける男どもの一人と同じように、いつか  
なるだろう——もうおそろくなつてるかもしれない——と考える  
とき、家に帰つて挨拶あいさつをしながら彼に手を差し出すのが、彼女  
には心苦しかった。彼のほうでは彼女が自分にたいしてどうい  
う考えをもつてるか想像もしてはいなかつた……。

彼女は大してきれいではなかったが、きわめて魅力に富んで、少しもつとめないのに人目をひいた。ごく質素な服装をし、たいていいつも喪服をまとい、背もそう高くなく、細そりしてひ弱な様子で、ほとんど口もきかず、人込みの中をこつそり歩いて、人の注意を避けていたが、その疲れたやさしい眼や清い小さな口のごくしとやかな表情で、やはり人の注意をひいていた。人から好かれてるとみずから気づくこともときどきあった。そしては当惑した——がやはりうれしくもあった……。他の魂の同情ある接触を感じると、その穏やかな魂のうちにも、言い知れぬやさしいつつましい浮かれ心が、知らず知らずはいつてくるのだった。それがへまなちよつとした身振りや恥ずかしげな横目などとなって

現われた。その様子が面白くもあればかわいくもあつた。そういう心乱れのためにいつそう魅力が増した。人々の欲望は募るのみだつた。そして彼女は貧しい娘で、世に保護者もなかつたから、人々はその思いを彼女に打ち明けてはばからなかつた。

彼女はときどき、富裕なイスラエル人ナタン家の客間へ行つた。ナタン家と親しい家に彼女は出稽古でげいこをしていたが、そこで出会つてから同情を寄せられたのだつた。そして彼女は人づきが悪かつたにもかかわらず、ナタン家の夜会へも一、二度出席を強しいられた。アルフレッド・ナタン氏は、パリーで知名な教授であつて、秀ひいでた学者であるとともにいたつて交際家で、ユダヤ人仲間によくある学識と軽けいちよう佻ひょうさが不思議に混和してゐる人物だつた。ナ

タン夫人のうちには、ほんとうの親切と過度の俗臭とが同じ割合に混ざり合っていた。二人ともアントアネットにたいして、騒々しい真実なしかも間歇かんけつ的な同情をやたらに見せつけた。——アントアネットは一般に、自分と同宗教の人たちの間によりも、ユダヤ人らの間により多くの温良さを見出していた。ユダヤ人らは多くの欠点をもつてはいるが、しかしまた大なる美点を、おそらくはあらゆる美点のうちの第一のものをもっている。彼らは生活者であり、人間的である。人間的なものならいかなるものにも無関心でなく、また生活してるすべての人に同情をもっている。真の熱い同情の念は欠けてるとは言え、不断の好奇心をそなえていて、なんらかの価値ある魂や思想なら、たとい自分らの魂や思想

といかに異なつたものであろうとも、それを捜し求めている。と言つて彼らは一般に、それを助けるために大したことをなすのではない。なぜなら、彼らはまた同時に、利害の念にあまり多くとらわれていて、世俗的な虚栄心などに支配せられてはしないと自称しながらも、やはりだれよりももつとも多くそれに支配せられてるのだから。しかし少なくとも、彼らは何かをしている。そして現代の無情な社会のうちにあつては、それでもなお多とすべきである。すなわち彼らは、活動の発酵素であり、生活の酵母である。——アントアネットは、カトリック教徒らのうちで、氷のように冷淡な壁へぶつかったので、ナタン夫妻が示してくれる同情はいかに皮相なものであつたにせよ、その価をだれよりもよく感

じたのだった。ナタン夫人はアントアネットの献身的な生活をおよそ見てとった。彼女の身体と精神との美しさに心ひかれた。そして彼女を保護してやろうと思った。夫人には子供がなかった。しかし若い者が好きで、しばしば若い人々を家に集めていた。アントアネットにも来るように、孤独の生活から出て少しく気晴らしをするようにと、夫人はしきりにすすめた。そして、アントアネットがもじもじしてる一部の原因はその貧しいゆえだと、たやすく推察し得たので、きれいな身回りの品を与えようとまでした。アントアネットは自尊心からそれを断わった。しかし親切な保護者たる夫人は、彼女をたいへん鼻<sup>ひいき</sup>に<sup>き</sup>して、いろいろくふうのあまりに、それらの小さな贈り物の幾つかを無理に受けさせて

しまった。女の無邪気な虚栄心にとつてはきわめて貴重な品物だった。アントアネットは感謝するとともにまた当惑した。ときおりはナタン夫人の夜会へつとめてやって来た。そして彼女はまた若かったから、さすがにその夜会が楽しくないでもなかった。

しかし、多くの青年らがやって来る多少雑多なその集まりの中で、ナタン夫人から愛顧されてる貧しいきれいな彼女は、すぐに二、三の道楽者の目標となった。彼らはすっかり確信しきつて、彼女は自分のものだときめていた。前もって彼女の臆おくびよう病びょうさにつけ込んでいた。彼女を賭かけ物とさえ見なしていた。

彼女はやがて、無名の手紙——なおくわしく言えば、上品な偽名を用いてる手紙——を幾通か受け取った。それらはみな意中を

明かす手紙だった。愛の手紙で、初めはまず密会場所を定めた阿あ諛ゆ的な急せき込んだものだった。つぎにはすぐに、威いかく嚇かくを試みた大胆な手紙となり、やがて侮辱的な卑しい誹ひぼう謗ぼうの手紙となった。それは彼女を裸体にし、彼女の身体の秘処を細かく述べたて、露骨な渴望で彼女の身体を汚していた。定めた密会場所へもし彼女が来なかつたら、公衆の中で侮辱してやるとおどかしながら、彼女の無邪気な性質に乗じようとしていた。彼女はそういう申し込みを招いた心痛から涙を流した。そしてそれらの侮辱は彼女の身体と心との自尊心をひどく害した。彼女はもうしたらそれからのがれられるかわからなかつた。弟には話したくなかつた。弟があまり心配して事件をなおいつそう重大ならしむることは、わかりき

つていた。また彼女には他に男の友だちもなかった。警察に訴えることも、世間の悪評を気にしてなしかねた。それでもどうにか片をつけねばならなかった。黙っていたのでは十分に身を守り得ない気がした。つけねらつてる悪者は執拗しつようであつて、こちらに危険を及ぼすほどの極端にまで走るかもしれなかった。

男のほうからは、あすリユクサンブルの博物館で会うことを命令する、一種の最後通牒つうちようを送つてきた。彼女はそれへ赴おもむいた。——いろいろ考えめぐらしたうえついに、相手の悪者はナタン夫人の家で会つた男に違いないと信ぜられた。手紙の一つに書いてあつたある言葉は、そこでしか起こりようのない一事に説き及ぼしていた。彼女はナタン夫人に骨折りを願ひ、博物館の入口

まで馬車でついて来てもらい、そこでしばらく待っていてもらった。彼女は中にはいった。約束の画面の前に立つてると、脅迫者が揚々と近寄ってきて、わざとらしい慇懃いんぎんさで話しかけた。彼女は黙ってその顔を見つめた。男は言い終えてから、なぜそんなに顔を見てるのかと冗談げに尋ねた。彼女は答えた。

「私は卑劣な人を見てるのです。」

彼はそれくらいのことでは閉口しなかった。そしてしだいに狎なれ狎れしくしだした。彼女は言った。

「あなたは私に悪名を着せるといっておどかしなさいましたね。」

私はその悪名をあなたに差し上げにまいったのです。受け取ってくださいませようね。」

彼女は身を震わし、声高に口をきき、人々の注意をひくつもりでいる様子を示していた。人々は彼らのほうをながめていた。彼女がどんなことにも辟<sup>へきえき</sup>易<sup>えき</sup>しないのを彼は感じた。そして声の調子を低めた。彼女は最後にも一度言つてやった。

「あなたは卑劣な人です。」

そして彼のほうへ背を向けた。

彼はまいった様子をしたくないので、彼女のあとについてきた。彼女はそれをすぐ後ろに従えながら博物館を出た。待つてる馬車のほうへまっすぐに進んでいって、いきなりその扉<sup>とびら</sup>を開いた。ついてきた男はナタン夫人と顔を合わせた。夫人はその男を見てとつて、名前を呼びながら挨拶<sup>あいさつ</sup>をした。男は度<sup>ど</sup>を失つて逃げ出し

た。

アントアネットはナタン夫人へ事情を述べなければならなかった。彼女は心ならずもそしてたいへん控え目に話した。傷つけられた貞節の悩みの秘事に、他人を立ち交らせるのは心苦しかった。ナタン夫人はもつと早く知らせなかつたことを責めた。アントアネットはだれにも内密にしてもらおうように頼んだ。事件はそれきりだった。そしてアントアネットが頼りにしてる夫人は、その客間をあの男に向かって閉ざす必要はなかつた。彼のほうでもうやっつて来なかつたから。

それとほとんど同じころ、アントアネットにはまったく違つた

種類の他の心痛が起こった。

四十歳ばかりのごく正直な男で、極東に領事の役を帯びて、数か月の休暇をフランスで過ごしに帰って来ていたのが、ナタン家でアントアネットに出会った。そして彼女に惚れ込んでしまった。その出会いは、アントアネットの知らないまにナタン夫人が前もって手はずを定めたのだった。夫人はかわいい彼女を結婚させようと考へてるのだった。その男もやはりイスラエル人だった。美男ではなかった。頭が少し禿<sup>は</sup>げて背が曲がっていた。しかし温良な眼をしていて、態度もものやさしく、自分が苦しんだので他人の苦しみにも同情し得る心をもっていた。アントアネットはもう昔の空想的な少女ではなかった。麗わしい日に恋人とともにす

る散歩といったふうに人生を夢みる、甘やかされた子供ではなかった。彼女は今では、人生をきびしい戦いだと思なしていた。長い労苦の歲月の間に少しずつ獲得していった地歩をも、一瞬間に失うかもしれない憂いの下にあつて、決して休むことなく、毎日くり返さなければならぬ戦いだと思なしていた。そして、男性の友の腕によりかかり、彼と労苦を分かち、彼が見守つていくれる間少し眼をつぶることができたら、どんなにか楽しいだろうと考へていた。それは一つの夢であることを彼女は知つてはいたけれど、しかしまだ、その夢をまったく見捨てるだけの勇氣はなかつた。それでも実は、自分の周囲の社会では持参財産のない娘は何物も望み得ないということを知らないではなかつた。フラ

ンスの古い中流社会が卑しい利害観念を結婚にもち出すことは、全世界によく知れ渡つてることである。ユダヤ人らは金銭にたいしてそれほど下劣な貪欲どんよくをもつてはいない。富裕な青年が貧しい娘を望み選ぶことや、財産のある娘が知力の秀でた男を熱心に捜し回ることなどは、彼らの間によく見受けられる。しかしフランス中流のカトリック教徒の田舎紳士いなかの間では、いつも財囊ざいのうと財囊との捜し合いである。しかもなんのためであるか？ 憐れむあわべき彼らにはくだらない欲求をしかもつてはいない。食べること、欠伸あくびをすること、眠ること——また、儉約すること、それだけしか彼らはなし得ないのである。アントアネットはそういう連中をよく知っていた。子供のときから見てきたのだった。富裕と貧困

との眼鏡で見てきたのだった。自分が期待できる事柄について、もう幻を描いてはいなかった。それで、結婚を求めてきた男の申し出は、彼女にとっては意外の喜びだった。彼女は初め彼を愛してはいなかったが、深い感謝と情愛とがしだいに胸に沁<sup>し</sup>み通ってきた。彼女はその申し込みを承諾したかった。しかしそれには、彼に従って植民地へ行き、弟を見捨てなければならなかった。で彼女は断わった。相手の男は、彼女の拒絶の理由がりっぱなものであることを理解しはしたけれど、それでも許し得なかった。恋愛の利己心は、恋人のうちでもっとも尊いものと思われるその美德をさえも、こちらのために犠牲にしてもらわなければ承知しないのである。彼は彼女に会うことをやめた。もう手紙もくれな

った。そして彼が出発してからは、彼女はその消息を少しも聞か  
なかつた。最後にある日——五、六か月後のことだったが——他  
の女と結婚したという宛名<sup>あてな</sup>自筆の通知状を受け取った。

それはアントアネットにとつて大きな悲しみだつた。こんども  
また悲痛のあまりに、彼女は自分の苦しみを神にささげた。弟の  
ために身を犠牲にするという唯一の務めを、ちよつとでも等閑<sup>なおよさり</sup>  
にした罰を受けたのだと、みずから信じたかつた。そしてますま  
すその務めに身を投げ出した。

彼女はまったく世間から身を退<sup>ひ</sup>いた。ナタン家へ行くことまで  
やめた。ナタン夫妻は、せつかく選んでやった相手を断わられて  
から、多少冷淡になっていた。彼らもまた彼女の拒絶の理由を認

めなかつた。ナタン夫人は、その結婚がかならず成立ししかも申し分のないものだ、前もつてきめていたところへ、アントアネットのせいで成立しなかつたので、自尊心を傷つけられた。彼女の憂慮は、確かに尊重すべきものではあるがしかしひどく感傷的なものだと思つた。そして日に日に、その馬鹿な娘へ同情を失つていった。そのうえ、相手の承知不承知にかかわらず他人に尽くしたいという欲求から、夫人は他の女を選び出して、費やさずにはいられない同情と親切との全部を、しばらくはその女から吸い取られていた。

オリヴィエは、姉の心中に起こつてゐる悲しい物語を、少しも知らなかつた。彼は自分の夢想の中に生きてゐる感傷的な浮わつた

青年だった。鋭いりっぱな精神をもっていたにもかかわらず、また、アントアネットの心と同じく愛情の宝庫とも言うべき心をもっていたにもかかわらず、浮き浮きとして少しも頼りにならなかつた。前後どうちやく撞ぶつ着ちやく、意気沮喪そそう、逍遙しょうよう、頭の中だけの恋愛、そんなことに時間と力とを無駄むだに費やしては、数か月の努力勉強をもたえず駄目にしてしまっていた。ちよつと見かけたきれいな顔に夢中になったり、客間で一度話をしただけで少しも注意を向けてくれなかつた婀娜あだっぽい小娘に、すっかり心を奪われたりした。ある文章や詩や音楽などに心酔して、勉強などは放り出しながら、それに幾月もの間一途いちずに没頭した。アントアネットはそれをたえず見張り、しかも彼の氣を害するのを恐れて、彼に気づか

れないようにと非常に注意しなければならなかった。いつどんな向こう見ずなことをされるかが恐ろしかった。肺結核に襲われる人たちにしばしば見かけるような、熱狂的な激げつこう昂や平静の欠乏や不安なおのきなどに、彼はよく陥った。アントアネットはその危険さを医者から聞かされていた。田舎からパリーいなかへ移し植えられたすでに病的なその植物には、よい空気と光とが必要なはずだった。アントアネットはそれを彼に与えることができなかつた。二人は休暇中パリーを離れるだけの金がなかつた。休暇のほかは一年じゅう、毎週仕事がいっぱいだった。そして日曜日には、音楽会へ行くときのほかは、もう外出したくないほど疲れていた。

それでも夏の日曜日にはときおり、アントアネットは元気を出

して、シャヴィルやサン・クルー方面の郊外の森へ、オリヴィエを連れ出した。しかし森の中は、騒々しい男女や、カフエー・コンセー奏楽珈琲店<sup>ル</sup>の歌や、きたない紙くずなどでいっぱいだった。人の心を休め清むる神聖な静寂境ではなかった。そして夕方帰り道では、列車の混雑、低い狭い薄暗いみじめな郊外客車の、むせるほどの人込み、けんそう喧騒、笑い声、歌の声、わいざつ猥雑、悪臭、たばこの煙。アントアネットとオリヴィエは、どちらも平民的な魂をもたなかった。厭<sup>いや</sup>ながつかりした気持で帰ってきた。オリヴィエはもうそんな散歩をくりかえさないようにアントアネットへ願った。アントアネットもしばらくはもうその気が起こらなかつた。けれどもやがて彼女は、その散歩をオリヴィエよりもいつそう不快がっ

てる癖にまた主張しだした。弟の健康にはそれが必要だと彼女は信じていた。弟を強<sup>し</sup>いてまた散歩させた。がこんどもやはり愉快ではなかった。オリヴィエは苦<sup>にがにが</sup>々しげに彼女を責めた。それからもう彼らは、息苦しい都会の中に閉じこもった。そしてその牢<sup>ろう</sup>獄<sup>ごく</sup>みたいな中庭から、悲しげに田野をしのんでいた。

最後の学年だった。師範学校の入学試験も終わりかけた。ようやくこぎつけてきたのだ。アントアネットはたいへん疲れた気がした。彼女は成功を当てにしていた。弟は万事運よくいつていた。中学校では優等な志願者の一人だと見なされていた。いかなる事柄にも容易になずまなない不規律な精神を除いては、その勉強と知

力とは教師たちからこぞつて賞賛されていた。しかし身に担になつて  
る責任のためにオリヴィエはひどく圧倒されて、試験が近づくに  
つれて能力を失つていった。極度の疲労、失敗の恐れ、病的な臆お  
くびょう  
病は、前もつて彼を麻痺まひさせてしまった。公衆の中で試験官  
の前に出ることを考えただけで、震えおののいた。彼はいつも自  
分の臆病を苦しんでいた。教室では顔を真赤まっかにし、口をきかなけ  
ればならないときには喉のどがつまった。最初のうちは名を呼ばれて  
返辞をするのもようやくのことだった。今に尋ねかけられるとわ  
かつてるときよりも、不意の問いに答えるほうがずっと容易だつ  
た。前からわかつてると病的になった。頭がたえず働きつづけて、  
これから起こる事柄を細かく思い浮かべた。待てば待つほど気に

かかった。どの試験も少なくとも二度は受けたと言っているほどだった。前の晩に夢の中で試験を受けて、それに全精力を費やしてしまった。で実際の試験にはもう精力がなくなっていた。

しかし彼は恐ろしい口述試験まではゆけなかった。晩にその試験のことを考えると、冷たい汗が流れた。筆記試験で、平素なら熱中できるような哲学の問題について、六時間に二ページも書けなかった。最初のうちは、頭が空<sup>から</sup>っぽになって、何一つ考えられなかった。真黒な壁にぶつかってつぶされかかっているかのようなだった。それから、試験が終わる一時間ばかり前に、その壁が割れて、割れ目から数条の光がさし込んできた。そこで彼はすぐれた答案をだいぶつづつた。それでも及第には不十分だった。その苦

難から出て来た彼のがっかりした様子を見て、アントアネットは落第の余儀ないことを予見した。そして彼女も彼と同じくらいがっかりした。しかし様子には現わさなかった。そのうえ彼女は、もつとも絶望的な情況にあつても、不撓ふとうの希望をもちつづけることができたのだった。

オリヴィエは入学ができなかった。

彼は落胆してしまった。アントアネットは別に大したことではないように微笑を装った。しかしその唇は震くちびるえていた。彼女は弟を慰め、単なる不運ですぐに取り返せると言い、来年はずっと上席で入学できるに違いないと言った。今年彼の成功することがいかに彼女に必要であつたか、もう身体も魂もいかに消耗されつく

してる気持ちがしてるか、も一年同じことを繰り返すのがいかにないしがたい気持ちがしてるか、それを彼女は言わなかった。それでもとにかくも一年やらねばならなかった。もしオリヴィエの入学前に彼女がいなくなったら、オリヴィエはけっして一人で戦いをつづけてゆく勇氣はないだろう。彼は人生からのみつくされてしまおうだろう。

彼女は自分の疲労を隠した。さらに努力を重ねました。血の汗をしぼって働きながら、休暇中彼に多少の慰安を得さして、学校が始まったらいっそうの力をもって勉強にかかれるようにしてやろうとした。しかし学校が始まると、彼女のわずかな貯蓄はひどく減っていた。それに加えて、もつとも収入の多かった二、三

の稽古けいこの口を失った。

もう一年！……二人の若者は最後の困難を見て精いっぱい気が張りつめた。何よりもまず暮らしてゆかなければならなかった。そして他の収入の道を捜さなければならなかった。ナタン夫妻の尽力でドイツに見つかった家庭教師の口を、アントアネットは承諾した。それは彼女がもつとも決心しかねる事柄だった。しかし、さし当たって他に方法もなかったし、また待つてゐるわけにもゆかなかつた。六年前から彼女はただの一日も弟のもとを離れたことがなかつた。毎日弟の顔も見ず声も聞かなかつたら、これから自分の生活がどうなりゆくか見当もつかなかつた。オリヴィエも考えてみるとぞつとした。しかし彼はなんとも言いかねた。その悲

惨も彼のせいだった。もし彼が入学できてたら、アントアネットはそんな羽目に陥らないですむわけだった。彼には反対する権利がなく、自分自身の悲痛を勘定にいれる権利がなかった。彼女一人で決定して構わなかった。

最後の数日を、彼らはあたかもどちらか一人が死にかかっているかのように、無言の悲しみのうちにいつしよに過ぎた。あまり苦しいときには姿を隠した。アントアネットはオリヴィエの眼中にその意見を求めた。「発<sup>た</sup>つてはいや！」ともし彼が言ったら、ぜひとも出発しなければならなくても、なお彼女は出発しかねたであろう。最後の時間まで、東停車場へ二人をはこんでゆく辻<sup>つじ</sup>馬車の中でまで、彼女は決心を翻えそうとしかけていた。もう決心

を実行するだけの力を身に感じなかった。弟の一言、たった一言！……しかし彼はそれを言わなかった。彼は彼女と同じように堅くなっていた。——彼女は彼に約束させた、毎日手紙を書くこと、何事も隠さないこと、ちよつとでも変わったことがあつたら呼びもどすことを。

彼女は出発した。中学校の寄宿舎にはいることを承諾していたオリヴィエが、その寢室に冷たい心で帰ってゆくうちに、悲しみ震えてるアントアネットを汽車は運び去っていった。夜のうちに眼を見開きながら、二人は一瞬間ごとにますますたがい遠ざかるのを感じて、低く呼びかわしていた。

アントアネットはこれからはいつてゆく世界が恐ろしかった。

彼女は六年前から非常に変わってしまった。昔はあれほど大胆で何物をも恐れなかった彼女も、今は沈黙と孤独との習慣になじんで、それから出るのが苦痛なほどだった。昔の幸福な日のにこやかで、饒舌じょうぜつで快活なアントアネットは、その幸福な日が過ぎ去るとともに死んでしまった。不幸は彼女を世間ざらいにしてしまった。オリヴィエといっしよに暮らしてきたので、その内気さ感染したのも事実だった。彼女は弟を相手のとき以外は、なかなか口がきけなかった。何事もいやがり、訪問なども恐れきらった。それで、これから外国人の家に住み、彼らと話をし、たえず人前を取り繕わねばならないと考えると、いらいらした心苦しさを感

じた。そのうえ憐あわれな彼女は、弟と同じく教師としての天稟てんぴんをそなえていなかった。心して職務を果たしてはいたが、それを信じてはいなかった。有益な仕事をしてるといふ感情で助けられることがなかった。彼女の天性は愛することにあつて、教えることにあるのではなかった。そして彼女の愛情については、だれも心にかける者はいなかった。

ドイツに来て新しい地位につくと、どこにいたときよりもなおいつそう、彼女はその愛情の用途を見出さなかった。彼女がフランス語を子供たちに教える役目ではいったグリュエーネバウム家の人たちは、彼女に少しの同情も示さなかった。彼らは横柄おうへいで無遠慮であり、冷淡でぶしつけだった。金はかなりよく出した。が

そうすることによつて彼らは、金を受け取る者を一種の債務者だ  
と見なして、その者にたいしてはどんなことをしてもいいと思つ  
ていた。彼らはアントアネットをやや高等な一種の召使として取  
り扱い、ほとんどなんらの自由をも許し与えなかつた。彼女は自  
分の室をももたなかつた。子供たちの室につづいてる控え室に寝  
て、間の扉は夜通しあけ放されていた。けつして一人きりになる  
ことがなかつた。ときどき自分自身のうちに逃げ込みたい彼女の  
欲求——内心の静寂境にたいしてすべての人がもつてる神聖な権  
利、それも尊敬されなかつた。彼女の幸福といつてはただ、心の  
中で弟に会つて話をする事だつた。彼女はわずかな隙をも利用  
しようとした。がその隙まで邪魔された。一言書き始めるや否や、

だれかに室の中を身近くぶらつかれて、何を書いているかと尋ねられた。手紙を読んだと、何が書いてあるかと聞かれた。ちよろろ 嘲

弄う的な馴なれ馴れしきで「いとしい弟」のことを尋ねられた。彼

女は隠れ忍ばなければならなかった。彼女がときどきどういうくふうをめぐらしたか、オリヴィエの手紙を人目を避けて読むために、どういう片隅かたすみにこもったかは、語るも恥ずかしいことだっ

た。もし手紙を室の中に置いておくと、きつと人に読まれていた。そしてかばん以外には、締まりのできる道具をもっていなかった。ので、人に読まれたくない紙片は、すっかり膚はだにつけていなければならなかった。出来事や心の中のことをたえずうかがわれ、思考の秘所をつとめてあばこうとされた。それも、グリューネバウ

ム家の人たちが彼女に同情してるからではなかった。彼らは金を払つてる以上彼女を自分たちのものだと思つていた。と言つて悪意をいだいてるのではなかった。無遠慮は彼らの根深い習慣だった。彼らの間ではたがいに無遠慮を不快とは思わなかった。

アントアネットがもつとも堪えがたく思つたものは、日に一時間も無遠慮な眼つきからのがれることを許さない、そういう探索、精神上の羞しゆうち恥を失つた行ないであつた。グリユーネバウム家の人々にたいする彼女のやや尊大な控え目は、彼らの氣分を害した。そしてもとより彼らは、自分らの厚かましい好奇心を正当とし、それからのがれようとするアントアネットの考えを不当とするために、高い道徳上の理由を見出した。彼らは考えた、「家に同居

し家族の一員となり、子供らの教育を引き受けてる若い娘の、内心の生活を知ることとは、自分たちの義務である。自分たちは責任がある。」——（これは、多くの主婦たちがその召使どもについて言うところと同じである。その「責任」というのは、不幸な召使どもから一つの労苦や一つの不快をも除いてやろうとはしないで、ただ彼らにあらゆる種類の楽しみを禁じようとはかりするのである。）——彼らは結論した、「良心の命ずるかかる義務を認めることをアントアネットが拒むなら、それは彼女が多少自責すべき点を見ずから感ずるからである。正しい娘は何も隠すべきものをもっていないはずである。」

かくて、アントアネットはたえず周囲からうかがわれていた。

それにたいして彼女は常に身を守った。そのために平素よりはさらに冷やかなうち解けない様子となった。

弟からは毎日、十二ページもの手紙が来た。そして彼女も毎日なんとかして、たとい二、三行でも書き送った。オリヴィエはつとめて大人びた態度をして、悲しみをあまり示すまいとした。しかし彼はやるせなくてたまらなかつた。彼の生活はいつも姉の生活とごく密接に結合していたから、今や姉を奪い去られてみると、自身の半ばを失ってしまったような気がした。もう自分の腕をも足をも思想をも働かせることができず、散歩もできず、ピアノをひくこともできず、勉強もできず、何にもすることができず、夢想にふけることも——姉のことを夢みる以外には——できなかつ

た。朝から晩まで書物にかじりついた。しかし何にもためになることはなし得なかった。考えはよそにあつた。苦しむか、または姉のことを考えた。前日来た手紙のことを考えた。眼を時計にすえて、今日の手紙を待った。手紙が来ると、その封を開きながら、喜びに——また懸念に——指先が震えた。恋人の手紙は相手の手に気がかりな愛情の震えを起こさせるものであるが、それ以上だつた。その手紙を読むのに、彼もまたアントアネットと同様に目を避けた。手紙をみんな身につけていた。そして夜には、最後に受け取つたのを枕の下に置いた。そして手紙がやはりそこにあるのを確かめるために、ときどき手でさわりながら、なつかしい姉のことを夢みて長く眠れなかつた。いかに姉から遠く離れてる

心地がしたことだろう！ 郵便が遅れて、出された日の翌々日にしかアントアネットの手紙が着かないときには、ことに切ない思いをした。二人の間には二日二晩の距離がある！……彼はかつて旅をしたことがなかっただけになおさら、その時間と距離とを大袈裟おげさに考えた。彼の想像はいろいろ働いてきた。「ああ、もし姉が病気になったら！ 会いに行くうちには死ぬかもしれない……。昨日なぜ数行しか書いて来なかったんだろう？……もし病気だったら？……そうだ、病気に違いない……。」「彼は息がつけなかった。——また、その嫌いやな学校の中で、寂しいパリーの中で、冷たな人たちの間にあつて、姉から遠く離れたまま一人ぼっちで死はすまいか、という恐怖になおしばしば襲われた。それを考える

だけでも病気になった。……「帰って来てくれと書き送ろうかしら？」——しかし彼は自分の卑怯ひきようを恥じた。そのうえ、手紙を書き始めてみると、彼女とそうして言葉を交えるのが非常に幸福に感ぜられて、苦しんでることをしばし忘れてしまった。姉の顔を見、姉の声を聞くような気がした。そして姉に何もかも物語った。いっしょにいたときでさえ、それほどうち解けて熱心に話したことはなかった。「私の信実な、りっぱな、親愛な、親切な、慕わしい、恋しい恋しい姉様ねえ、」と彼は呼んでいた。それはまったく恋の手紙だった。

その手紙は愛情でアントアネットを浸した。日々に彼女が呼吸し得る空気はそれだけだった。毎朝待ってる時間に手紙が着かな

いと、彼女は悲しくなった。グリユーネバウム家の人たちが、不注意からかあるいは——ことによると——意地悪なからかいからか、手紙を彼女に渡すのを晩まで忘れたことが、二、三度あつた。あるときなどは翌朝まで忘れられた。そのために彼女はいらだつた。——新年には、二人は別に相談したわけではないが同じ考えをいただいた。二人とも長い電報——（高い料金がかかった）——を送つて相手をびっくりさした。その電報はどちらもちようど同じ時刻に届いた。——オリヴィエはなおつづいて、自分の勉強や疑惑についてアントアネットに相談した。アントアネットは助言し支持し、自分の力を吹き込んでやった。

が彼女自身も、あまり力をもつてはいなかつた。彼女はその外

国の土地で息がつけなかった。一人の知人もなければ、一人の同情者もなかった。ただある教授夫人だけが同情を示してくれた。

夫人は近ごろその町に移住してきたのであって、アントアネットと同じく異境の寂しみを感じていた。善良なかなり慈愛心深い婦人であつて、愛し合いながらたがいに離れてる二人の若者の苦しみに同情してくれた——（というのは、アントアネットへその身の上話を少しさせたのだつた。）——しかし彼女はいかにも騒々しくて凡庸で、氣転と慎みとがひどく欠けていたので、アントアネットの貴族的な小さな魂は、反感をそそられて打ち解けなかつた。彼女はだれも心を打ち明けるべき者がいないので、あらゆる心配を自分一人の胸に収めた。それはきわめて重い荷だつた。と

きとするともう倒れそうな気がした。しかし彼女は唇をかみしめて、また進みつづけた。健康は害せられて、ひどく痩せてしまった。弟の手紙はますます力ないものとなってきた。落胆の発作にかられて彼は書いた。

——帰って来てください、帰って来て、帰って来てください！  
……

しかし彼はその手紙を出すとすぐ恥ずかしくなった。も一つ手紙を書いて、初めの手紙は裂き捨てて気にしてくれるなど、アントアネットへ願った。元気なふうまで装って、姉がいなくてもいいという様子をした。彼の疑い深い自尊心は、姉がいなくてはやっていけないと人に思われることを苦にした。

アントアネットはそれに欺かれはしなかった。弟の考えをすっかり読みとつていた。しかし彼女は どうしていいかわからなかった。ある日などは、すぐに帰りかけようとした。パリー行きの汽車の時間をはつきり知るために、停車場まで行った。それから、正気のやり方ではないと考えた。その地で得てる金でこそ、オリヴィエの寄宿料が払えるのだった。どちらも我慢できるだけ我慢すべきだった。彼女はもう何かを決断するだけの気力がなかった。朝になると元気が出て来た。しかし夕闇が近づいてくるに従つて、力がくじけて逃げ出すことを考え始めた。彼女は故国にたいして——彼女につらく当たりはしたが、しかし彼女の過去の遺物がすべて埋もれてる、その国にたいして——なつかしきの情に堪えな

かった。また弟が話してる国語、弟にたいする愛情が表現される国語にたいして、恋しさの情に堪えなかつた。

ちようどそのとき、フランス俳優の一団が、その小さなドイツの町を通りかかつた。アントアネットは、芝居へはめつたに行かなかつた——（行くだけの隙も趣味ももたなかつた）——がそのときは、自国語を聞きフランスのうちに逃げ込みたいという、押えがたい欲求にとらえられた。その後のことは読者の知つてるとおりである。もう劇場には座席がなかつた。彼女は青年音楽家のジャン・クリストフに出会つた。見知らぬ間柄だつたけれども、クリストフは彼女の失望を見てとつて、自分がもっているボックス敷敷に入れてやろうと申し出た。彼女はうっかり承諾した。そしてク

リストフといっしよにいたことが、小さな町の噂うわさの種となった。その悪い噂はすぐにグリューネバウム家の人たちの耳にもはいった。彼らはもうすでに、その若いフランスの女に関するよからぬ疑いを認めたい気持ちになっていたし、また、他の所で（第四巻反抗参照）述べておいたとおりの事情からして、リストフにたいして憤っていたので、非道にもアントアネットを解雇してしまつた。

弟にたいする愛情のうちにすっかり包み込まれ、あらゆる汚れた考えから脱している、彼女の貞節な羞しゆう恥うち深い魂は、なんで非難されたかを知ったとき、たまらない恥ちずかしさを感じた。けれど彼女は片時もリストフを恨まなかつた。自分と同様に彼のほ

うも潔白であつて、たとい彼が自分に悪をなしたとしてもそれは善をなさんと欲してであつたことを、彼女はよく知つていた。そして彼に感謝していた。彼女が彼について知つてゐることは、音楽家であることと、人からたいへん悪口を言われてゐることとだけだつた。しかし彼女は、世の中や人間について無知ではあつたが、生まれつき人の魂を見てとる直覺力をそなへ、不幸のためにそれがなお鋭敏になされていたので、劇場で隣り合つた不行儀な多少狂氣じみたその青年のうちに、自分と同じような廉潔さと一種の男々しい善良さを見てとつた。そしてその思い出だけでも彼女には慰安だつた。彼にたいする人の悪口をいくら耳にしても、彼から起こさせられた信頼の念を少しも損じなかつた。自身で人か

らさいなまれていた彼女は、彼もまた自分と同じく、しかも自分よりずっと前から、侮辱してくる人々の悪意を苦しんでる、同じ被害者に相違ないと思った。そして、他人のことを考えて自分のことを忘れる癖がついていたから、クリストフが苦しんできたに違いないと考えては、自分自身の苦しみから多少気をそらすことができた。けれど彼に再会したり手紙を書いたりすることは、少しも求めなかった。貞節と自負との感情から、そういうことをなし得なかった。彼女は自分にかけてた損害を彼が知らないでいるだろうと思った。そして温良な心から、彼がいつまでもそれを知らずにいるようにと願った。

彼女は出発した。町から一時間ばかりのところで、彼女を運び

去つてゐる汽車は、隣の町で一日を過ぎ去つたクリストフを連れ歸つてゐる汽車と、偶然にもすれちがつた。

向き合つて数分間止まつたその車室から、二人はひっそりした夜の中にたがいに顔を見合つた。そして言葉を交えなかつた。通俗な言葉以外に何を彼らは言い得たであらうか？ 彼らのうちに生まれ出で、内心の幻覚の確實さの上にのみかかつてゐる、相互の憐憫れんぴんと神秘的同情とのえも言えぬ感情は、通俗な言葉では汚されるに違ひなかつた。たがいによく知らないままで顔を見合つたその最後の瞬間に、彼らは二人とも、いつしよに暮らしてゐる人たちから見らるゝのは、まったく違つた見方で、たがいに相手から見られた。すべては過ぎ去る、言葉や接吻せつぶんや恋しい肉体の

抱擁などの種々の思い出は。しかしながら、あまた数多の一時の形象の間で、一度触れ合つてたがいに認める魂と魂との接触は、けつして消え失せるものではない。アントアネットはそういう接触を、長く心の奥に秘めた——その心は、悲しみに包まれてはいたけれど、オルフェウスのせんきよう仙境の靈を浸してる光に似たおぼろな光が、悲しみのまん中にほほえ微笑んでいた。

彼女はふたたびオリヴィエに会つた。ちようどよいときに歸つて来たのだつた。オリヴィエは病気になつていた。いらいらしたむら気な青年である彼は、病気にならない前から病気を恐れおののいていたが、今やほんとうに病気にかかると、姉に心配させま

いとしてそれを知らせなかった。しかし心のうちでは姉を呼びつづけ、姉の帰国を奇跡をでも願うように待ち望んでいた。

その奇跡が実際起こったときには、彼は熱にうかされうとうとしながら、学校の病室にふせ臥っていた。姉の姿を見ても声をたてなかつた。姉がはいって来るような幻を幾度見たことだつたらう！

……彼は寢床の上に身を起こし、口をうち開いて、こんども幻覚ではないかと気づかっていた。そして彼女が寢台の上に彼のそばへ腰をおろし、彼を両腕に抱きしめ、彼は彼女の胸に寄りすがり、くちびる唇の下に彼女のやさしい頬ほおを感じ、手の中に彼女の夜旅に冷えた手を感じ、最後にそれはまさしくなつかしい姉であることを確かめ得たとき、彼は泣き出した。泣くよりほかにしかたがなかつた。

今でもなおやはり、子供のおりの「泣きむし」のままだった。姉がまた逃げ出しはしないかと恐れて、しつかと胸に抱きしめた。彼らは二人ともいかに変わったことだろう！　いかに悲しい顔つきをしてることだろう！……それはともあれ、ふたたびいっしょになったのだ！　病室も学校も薄暗い日も、すべてふたたび光り輝いてきた。二人たがいに抱き合つて、もう離れようとしなかった。彼女が何にも言わない先に、彼は彼女にもう出発しないと誓わした。しかし誓わせるには及ばないことだった。彼女はもう出発する気はなかった。彼らはたがいに離れているとあまりに不幸だった。母親の考えは道理だった。何事も別離よりはましである。困窮も、死も、ただいっしょにいさえすれば……。

彼らは住居を借りることを急いだ。きたなくはあったが以前の住居をまた借りたかった。しかしそれはもうふさがっていた。そして新たに借りた住居は、やはり中庭に面していた。そして壁の上から、小さなアカシアの木の梢こざえが見えていた。自分らと同じく都会の舗石の中にとらわれてる野の友にたいする心地で、彼らはすぐにその木へ愛着の念をいだいた。オリヴィエは間もなく健康を、もしくは健康と言われてきたところのもの——（というのは、彼において健康とされていたものも、もつと丈夫な人においては病気だったかもしれない）——それを回復した。アントアネットはドイツのつらい生活のために、多少の金を手に入れていた。それにドイツのある書物の翻訳を出版屋に引き取ってもらって、な

お幾いくばく何かの金が手にはいることになった。で物質上の心配はしばし除かれていた。そして学年の末にオリヴィエが入学できさえしたら、万事都合よくいくはずだった。——がもし入学できなかつたら？

彼らが共同生活の楽しみにふたたび馴なれだすや否や、試験のことがしきりに気にかかつてきた。彼らはそれをたがいに避けて話さなかった。しかしどんなにつとめても、やはりそのほうへ氣をとられた。ただ一つのその考えが、氣を紛らそうとしてるときでも始終つきまよってきかた。音楽会で、樂曲を聴いてる最中に突然それが湧わき上がってきた。夜中に眼を覚ますとき、それが深淵しんえんのように口を開いてきた。ことにオリヴィエのほうには、姉を慰

め姉がその青春を犠牲にしてくれたことに報いたいという、熱烈な願望のほかにも一つ、兵役にたいする恐怖があつた。試験に失敗したら兵役を免れることができなかつた。——（高等の学校へはいれば兵役を免れる時代だつた。）——当不当はともかく兵營生活のうちに見てとられる、大勢の身心の混和にたいして、一種の知的退歩にたいして、彼は押えがたい嫌悪けんおの情を感じた。彼のうちにある貴族的な童貞的な情操は、兵役の義務にたいして反発した。それと死といずれがまじりだかわからないほどだつた。かかる感情は、目下一つの信条となつてゐる社会道德の名のもとに、嘲笑ちやうしやうしもしくは非難することができるかもしれないけれど、それを否定する者は盲者と言うべきである。現時の放漫蕪雜ぶざつな共産

主義によつて精神的孤立の犯される苦しみ、それ以上の深い苦しみは世に存しない。

試験が始まつた。オリヴィエはも少しで試験を受けられないところだつた。彼は気分がよくなかつた。そしてまた、ほんとうに病氣になつたほうがいいと思うほど、及第してもしなくてもとにかく経なければならぬ心痛を、非常に恐れていた。がこんどは、筆記試験にはかなり成功した。しかし通過か否かの成り行きを待つのはつらいことだつた。革命の国でありながら世にもつとも旧慣墨守ほくしゆの国たるこの国の、ごく古くからの習慣に従つて、試験は七月に、一年じゆうのもつとも酷暑のころに、行なわれたのだつた。あたかも、各試験官でさえその十分の一も知らないような

恐るべき科目の準備に、すでにまいってしまつてる憐れな受験者  
らを、さらに圧倒しつくそうと目論もくろまれてるかのようだった。述  
作の受験は、人出の多い七月十四日の祭日の翌日に当たっていた。  
自身愉快でなくて静肅を必要とする人々にとっては、非常につら  
い陽気な祭りだった。戸外の広場には、午ひるごろから夜中まで、屋  
台店が立ち並び、射的の音が響き、蒸気木馬が唸うなり声をたて、オ  
ルガンが鳴り響いていた。その馬鹿騒ぎが一週間もつづいた。そ  
れから、共和国大統領は人望をつなぐために、わいわい連中にな  
お半週間の祭りを与えた。彼はそれについてなんの迷惑もこうむ  
らなかつた。それらの騒ぎが聞こえなかつたから。しかしオリヴ  
イエとアントアネットとは、喧騒に頭を痛められ、害せられ、窓

を閉め切つて息苦しい室の中にこもり、自分で自分の耳をふさぎ、朝から晩まで繰り返される馬鹿げたきいきい騒ぎが、小刀で刺すように頭の中へしきりとはいつてくるのを、いたずらにのがれようとつとめながら、苦しさにたまらなくなつていた。

おおよその採用がきまると間もなく、口頭試験が始まつた。オリヴィエはアントアネットへ列席してくれるなど頼んだ。彼女は門口に待つていた——彼よりもなお震えながら。彼はもとより、満足な試験の受け方をしたとは彼女へ言わなかつた。彼が言ったことも言わないこともともに彼女には心配の種となつた。

最後の発表の日が来た。ソルボンヌ大学の校庭に、採用者の名前が掲示された。アントアネットはオリヴィエ一人で行かせなか

った。二人は家から出かけながら、口には出さなかつたが、帰つてくるときにはもうわかつてるのだと考えたり、少なくともまだ希望が残つてるこの心配な今のほうを、そのときになつたら残り惜しく思うかもしれないなどと考えた。ソルボンヌ大学が見えだすと、足もよく立たない気がした。あれほどしつかりしていたアントアネットも、弟へ言つた。

「ねえ、そんなに早く歩かないでちょうだい……。。」

オリヴィエは姉のほうをながめた。彼女は微笑ほほえもうとつとめていた。彼は言つた。

「この腰掛にちよつとかけましようか。」

彼は向こうまで行きたくない気がしていた。しかしやがて、彼

女は彼の手を握りしめて言った。

「なんでもないことよ。行きましよう。」

人名表はすぐには見当たらなかつた。それから幾つもの人名表を読んだが、ジャンナンという名はなかつた。最後にその名前を見たとき、すぐには腑ふに落ちなかつた。何度も読み返したがまだ信じられなかつた。それから、それはほんとうであること、ジャンナンというのは彼であること、ジャンナンが採用されたこと、それが確かになったとき、二人は一言も口に出なかつた。逃げるようにして帰っていった。彼女は彼の腕をとらえ手首を取り、彼は彼女へよりかかつていた。走らんばかりに歩いて、周囲のものは何一つ眼に止まらなかつた。大通りを横切るときには危ひうく轢ひき

殺されようとした。二人は繰り返していた。

「オリヴィエ！……姉さん！……」

彼らは大股おおまたに階段を上つていった。室にはいると、たがいに抱き合つた。アントアネットは弟の手を取つて、父と母の写真の前に連れていった。それは彼女の寝台のそばに、室の片隅かたすみにあつて、一つの聖殿をなしていた。彼女はその写真の前に彼とともにひざまずいた。そして二人はひそかに泣いた。

アントアネットはちよつとした御馳走ごちそうを取り寄せた。しかし二人ともそれに手がつけられなかった。食欲がなかった。オリヴィエは姉の膝ひざにすがりつき、またはその膝の上に乗つて、子供のように愛撫あいぶされながら、そのまま二人は晩を過ごした。ほとんど口

がきけなかった。もううれしがる力さえなかった。二人とも精がつきていた。九時前に床について、ぐっすり眠った。

翌日、アントアネットは激しい頭痛を感じたが、しかし心からは非常な重荷が取り去られた気がした。オリヴィエはようよう初めて息がつける心地がした。彼は救われたのだ。彼女は彼を救い、自分の務めを果たしたのだ。そして彼は彼女の期待にそむかなかったのだ……。——幾年も、幾年もの後に初めて、彼らは怠惰に身を任せた。午ひるごろまで床にはいつていて、たがいの室の扉とびらを開け放しながら、たがいに話し合った。鏡の中でたがいに見合わして、疲れに脹はれたうれしい顔をながめた。たがいに微笑ほほえみかわし、接吻せつぶんを送り合い、またうとうとし、疲れはてがっかりして、

やさしい単語を言いかわすだけの力しかなくて、またいつのまにか眠ってゆくのをたがいにながめ合った。

アントアネットは、なお少しづつ貯蓄をつづけていて、病気の場合の金を少し残しておいた。弟をびっくりさしてやろうと思つて黙っていた。そして、入学許可の翌日に、数年間の苦しみの褒<sup>ほ</sup>美<sup>う</sup>に二人とも、スイスへ一月ばかり行こうと言ひ出した。今やオリヴィエは、官費で師範学校の三年を過ごし、それから学校を出ると、職を得られることも確かだったから、彼らは愉快をつくして貯蓄を使い果たしても構わなかった。オリヴィエはそれを聞いて喜びの叫び声をたてた。アントアネットは彼よりもなおうれし

かった——弟の幸福がうれしかった——あこがれていた田舎いなかを見るのだと思つてうれしかった。

旅の支度したくは大事件だったが、それがまた始終の楽しみだった。二人が出発したときは、もう八月もだいぶふけていた。彼らはあまり旅には馴なれていなかった。オリヴィエはその前夜眠れなかった。そして汽車の中でもその夜眠れなかった。一日じゆう、汽車に乗り遅れはすまいかと心配したのだった。二人はせかせか急いでいて、停車場では人から押しのけられ、二等車の中にぎっしり詰め込まれて、眠ろうとて肱ひじをつく余地も得られなかった——

（平民主義をもつて知られてるフランスの鉄道会社は、富裕でない旅客からつとめて特権を奪つて、金のある旅客らに、自分たち

だけ特権を享受し得ると考える愉快さを与えようとしてるのである。——オリヴィエはちよつとの間も眼をつぶらなかつた。正しい汽車に乗つてるかどうか安心してきれないで、各停車場の名前ばかり気にしていた。アントアネットは半ばうとうととしては、またたえず眼を覚さました。列車の動揺のため頭をぶつつけていた。移動墓穴のような車室の天井に輝いてる無気味なランプの光で、オリヴィエは彼女をながめた。そして彼は突然、その顔の変化に動かされた。眼のまわりはくぼみ、あどけない口は半ば開き、皮膚の色は黄色っぽくなり、小さな皺しわが頬ほおのあちらこちらに寄つて、悲嘆と幻滅との悲しい月日の跡をとどめていた。年老い病んでる様子だった。——そして実際、彼女はまったく疲れきつてゐるのだ

った。もしできることなら出発を延ばしたかったろう。しかし彼女は弟の楽しみを妨げたくなかった。自分はただ疲れてるだけで、田舎へ行つたら元気になるだろうと、強<sup>しい</sup>いて思い込みたかった。いなが途中で、病気になりはすまいかとどんなにか心配していた。——彼女は弟からながめられてるのを知った。押つかぶさってくる眠気を無理にしりぞけて、眼を見開いた——その眼はいつもあんなに若々しく清らかで澄んでいたが、今は小さな湖水の上を雲が渡るように、無意識的な苦痛の影がときどき通りすぎた。彼は気がかりなやさしい調子で声低く、気分はどうかと尋ねた。彼女は彼の手を握りしめて、気分はよいと断言した。愛情のこもった一言で彼女は気を引きたてられていた。

やがて、ドールとポントアルリエとの間の蒼茫そうぼうたる平野の上の  
 赤い曙あけぼのめざ、眼覚めくる田野の光景、大地から上つてくる太陽——パ  
 リーの街路ほこりと埃だらけの人家と濃い煤煙ばいえんとの牢獄ろうごくから、彼ら  
 と同じように逃げ出してる太陽、それから、乳のような白い息吹いぶ  
 きの薄靄うすもやに包まれてそよいでる牧場、また、村の小さな鐘楼や、  
 ちらちら見える小川や、地平線の奥に浮かんでる丘陵の青い線な  
 ど、途中のいろんな細かな事物、あるいはまた、静まり返つて  
 田舎いなかのまん中に汽車が止まるとき、遠くから風に運ばれてくる細  
 いしめやかな御告アンジェリユスの鐘の音、線路に臨んだ土手の上で夢み  
 てる、牝牛めうしの群れの重々しい姿、——すべてのものにアントアネ  
 ットとオリヴィエとは注意をひかれ、すべてが目新しかった。彼

らは歓喜して大空の水を吸う二本のかわききった樹木に似ていた。その朝、スイスの税関で汽車から降りた。平野の中の小さな停車場だった。夜眠れなかったので少し気持が悪く、夜明けの湿った冷気に身体が震えた。しかし天気は穏やかで、空は澄み渡り、牧場の風が四方から寄せてきて、口の中に流れ込み、舌の上から喉のどの中を通って、小さな流れとなって胸の奥まではいってきた。そして、濃い牛乳を入れた、空のように甘く野の草や花のようにかお香りのいい、元気づける熱いコーヒーを、露天のテーブルで立ちながら飲んだ。

彼らはスイスの汽車に乗った。その設備が彼らにはもの珍しくて、子供らしい喜びを与えられた。しかしアントアネットはたい

へんげだるかった。気分が悪いわけが自分にもわからなかった。周囲のすべてのものが眼にはいかにも麗わしく面白いのに、胸にはうれしさをあまり感じないのは、なぜだったろう？ 楽しい旅行、いっしょに弟を伴い、将来の心配は除かれ、そしてなつかしい自然、それは彼女が長年夢想してたことではなかったか……。それをどうしたというのだろうか？ 彼女はみずから自分の気持ちをがめて、弟の無邪気な喜びを強しいてうれしがり同感しようとした。

二人はトゥーンで止まった。翌日は山のほうへ向かって出発するはずだった。がその晩アントアネットは旅館で、激しい熱が出て、嘔吐おうとと頭痛とに襲われた。オリヴィエはすぐ途方にくれて、

不安な一夜を過ごした。朝になると医者と呼ばなければならなかった。——（不意の余分の費用で、彼らのわずかな所持金にとつては等閑にできなかつた。）——医者の言うところによれば、さしあたり大したことはないが、極端な疲労をきたして、身体組織がこわれかけてるのだった。すぐに旅をつづけるなどはもちろんできなかつた。医者はアントアネットへ一日じゆう起き上がることを禁じ、なおしばらくはトゥーンにとどまっていなければならぬことを告げた。二人はがっかりした——それでも、あんなに心配していたあとで、それくらいなことでは済んだのはうれしかった。しかしながら、かく遠くまでやって来て、熱い太陽の光がさし込む温室のような、旅館のいやな室に閉じこもってい

なければならぬのは、実につらいことだった。アントアネットは弟に散歩をすすめた。彼は旅館から少し外へ出た。美しい緑の衣をまとつてゐるアール河を見、空の遠くに浮き出してる白い山の頂を見た。そして喜びに打たれた。しかしその喜びを一人で味わうことはできなかつた。急いで姉の室へもどつてきて、ながめた景色を感動しながら話してきかした。そして姉が彼の帰りの早いのを驚いて、も一度散歩してくるよう勧めると、彼はかつてシヤートレー座の音楽会からもどつて来たときと同じことを言った。「いいえ、あまり美しすぎます。姉<sup>ねえ</sup>さんをおいて一人で見るのは苦しいんです。」

そういう感情は彼らにとって別に新しいものではなかつた。ま

つたくの自分であるためには二人いつしよにいなければならぬことを、彼らはよく知っていた。しかしそれを耳に聞くのはやはりうれしいことだった。そのやさしい言葉は、あらゆる薬剤よりもアントアネットへ効果があつた。彼女はもううれしげな弱々しげな様子で微笑ほほえんでいた。——そして彼女は一晩快く眠つたあとで、すぐに出発するのは軽率な仕方ではあつたけれども、なお引き止めるに違いない医者へは知らせもしないで、朝早く逃げ出すと決心した。清らかな空気のために、美しい景色を二人いつしよに見るといふ喜びのために、その軽率な出発も彼女の身体にさわらなかつた。そして二人は他になんらの故障もなく、旅の目的地へ着いた。——シユピーツから少し隔つた、湖水の上の山間

の村だった。

二人はその小さな旅館で、三、四週間過ごした。アントアネツトはもう発熱しはしなかったが、元どおりには回復しなかった。いつも頭が痛んで、たまらないほど気分が重苦しく、たえず不快な心地だった。オリヴィエは彼女の健康をしばしば尋ねた。彼女の顔色がいくらかよくなるのを見たかった。しかし彼は土地の美景に酔っていた。そして知らず知らず悲しい考えを避けていた。たいへん気分がいいと彼女から言われると、彼はそれをほんとうだと信じたかった——反対だとよく知ってはいたけれど。それに彼女は、弟の晴れ晴れしい元気を、清い空気を、ことに休息を、深く楽しんでいた。幾年もの恐ろしい努力のあとに休まし

得ることは、いかに楽しいことだったろう！

オリヴィエは彼女を散歩に連れ出したがった。彼女も彼といっしよに歩き回るのは愉快だったろう。しかし幾度も、元氣に出かけたあとで、二十分間もたつと、息が苦しくなり胸がつまってきて、立ち止まらなければならなかった。そこで彼は一人遠足をつづけた——それも危険のない山登りなどだったが、彼女は彼がもどってくるまでひどく心配をした。あるいはまた、二人はいっしよに手近な散歩をした。彼女は彼の腕にもたれ、小足で歩きながら、たがいに話をした。彼はことに饒舌じょうぜつになり、快活になり、これからの計画を語ったり、冗談を言ったりした。谷間の上の山腹の道から、静かな湖水に映ってる白い雲をながめ、水たまりの

面を泳いでる虫のような船をながめた。温和な空気を呼吸し、刈られた牧草や熱い樹脂の匂いにおとともに、風のために遠くからときどき吹き送られる、家畜の鈴の音を吸い込んだ。そして二人いっしよに、過去や未来や現在のことを夢みた。その現在が、あらゆる夢のうちでももつとも架空的なもつとも楽しいもののように思われた。アントアネットも時としては、弟の子供らしい快活に感染した。二人は追っかけ合ったり草を投げ合ったりして遊んだ。そしてある日、彼は彼女が昔子供のときののように笑ってるのを見た。それは泉のように透き通った呑気のんきな小娘の馬鹿笑いであつて、数年来彼が一度も聞いたことのない笑いだった。

しかし往々オリヴィエは、長い遠足をなす楽しみを制しきれな

かった。その後で彼は多少の後悔を感じた。姉と楽しい会話をしなかつたことを、あとでみずから責めざるを得なかつた。旅館でも姉を一人にさしとくことがしばしばあつた。旅館には少数の若い男女の連中がいた。二人は初めのうちそれから遠ざかつて、そのうちに、気の弱いオリヴィエは彼らに引きつけられて、その仲間に加わつてしまつた。彼には友だちというものがなかつた。姉を除いては、嫌悪けんおの情を起こさせられる下等な学校仲間とその情婦ら以外に、ほとんど知人がなかつた。それで育ちのいい愛嬌あいきようのある快活な同年配の男女の中に交ふことは、彼にとつて非常な愉快だつた。彼はきわめて粗野ではあつたけれど、無邪気な好奇心をもち、感傷的な清い逸樂的な心をそなえていた。女

の眼の中に輝くちらちらした<sup>りんこう</sup>燐光的な炎に、たやすくとらわれてしまう心だった。彼自身もその内気さにかかわらず人の氣に入ることができた。愛し愛されたいという純真な欲求のために、知らず知らず若々しい美しさが出て来、情のこもった言葉や身振りや<sup>いんげん</sup>慇懃さなどを見出し得た。そのやり方が無器用なだけにかえって人の心をひいた。彼は同情の天分に富んでいた。孤独のうちにごく皮肉になつてゐる彼の知力は、人の凡俗さや欠点を見てとつて、しばしばそれに<sup>いやけ</sup>嫌氣を起こしはしたけれど、人と顔を合わして立つときには、彼はもはや相手の眼をしか見なかつた。その眼の中には、他日死ぬべき人、彼と同じく一つの生命しかもつていない人、そして彼と同じくその生命をやがて失うべき人、そ

う人の姿が表われていた。すると彼はその人にたいして、知らず知らずの愛情を感じた。どんなことがあっても、その瞬間に相手へ苦しみを与えたくなかった。心からでもあるいは心ならずでもとにかく、親切にしてやらずにはいられなかった。彼は弱かった。したがって彼は、あらゆる悪徳やあらゆる美德を——すべてその他の美德の条件たる力という一つを除いては——ことごとく許す社交界の人々の気に入るように、初めからできていたのである。

アントアネットはその若い仲間に交らなかつた。その健康と疲労とただなぜとも知れぬ心の屈託とのために、少しものびのびとした気持になれなかつた。身と魂とをすりへらす配慮と勤労との長い年月のうちに、弟と彼女との役割が変わってしまっていた。

彼女はもう今では、世間から遠ざかり万事から遠ざかり、しかも非常に遠ざかった気がしていた。……もうふたたびそこへもどることはできなかつた。それらの談話、騒ぎ、笑い、他愛ない楽しみ、などはすべて彼女を退屈させ、疲らして、気分を害するほどだつた。彼女はそういう自分の状態が苦しかつた。他の若い娘たちといつしよになり、皆が面白がるものを面白がり、皆が笑うものを笑いたかつた……。が彼女にはもうできなかつた！……彼女には胸迫る思いがした。死んでしまったような気がした。夜は自分の室に閉じこもつた。そして燈火もつけないことがしばしばだつた。暗い中にじつとすわつたままでいた。その間オリヴィエは、例の取り留めもない恋心地の楽しみにふけりながら、下の広間で

面白がっていた。そして、令嬢らと談笑しつづけ、なおいつまでも別れかねて、扉口とぐちで何度も挨拶あいさつをかわしながら、ついに自分の室のほうへ上がってきた。その足音が聞こえるときに、アントアネットは初めて惘ぼうぜん然としていたのから我に返った。そして暗くららやみ闇の中に微笑を浮かべて、立ち上がって電燈をつけた。弟の笑い声を聞くと元気になるのだった。

秋はふけていった。日の光は薄くなり、自然はしおれてきた。十月の靄もやと雲とにつつまれて、色彩は褪あせてきた。山には雪が降り、野には霧がかけた。旅客は一人ずつ、つぎには組をなして、帰っていった。そして友だちが立ち去るのは、たとい心の残らない友だちが立ち去るのでも、見るに悲しいことだった。ことに、

生活の中の林泉オアシスとも言うべき、安静と幸福との時だった。夏が去るのは、悲しいことだった。二人はいつしよに、ある薄曇りの秋の日に、森の中を山に沿って、最後の散歩をした。たがいに口をきかず、やや憂鬱ゆううつな夢想到にふけりながら、寒げに寄り添って、襟えりを立てた外套がいとうにくるまっていた。二人の指は組み合わさっていた。湿った林はひっそりとして、無言のうちに泣いていた。冬に来るのを感じてる寂しい一羽の小鳥の、やさしい憂わしげな鳴き声が、奥のほうに聞こえていた。澄みきった家畜の鈴の音が、遠くほとんど消え消えに、霧の中に響いていて、あたかも二人の胸の奥に鳴ってるがようだった……。

彼らはパリーへ帰った。二人とも寂しかった。アントアネット

はその健康を回復していなかった。

オリヴィエが学校へもって行くべき荷物を支度したくしなければならなかった。アントアネットはそれに残りの貯蓄を費やした。ひそかに数個の宝石さえ売り払った。それで構わなかった。あとで彼が買いもどしてくれるかもしれない。——それにまた、彼がいなくなれば、彼女はもうそんな物には用はなかったのだ！……弟がいなくなった後のことなどを彼女は考えたくなかった。彼女はただ弟の荷物することに気を配り、弟にたいする熱い情けをすべてその仕事のうち込み、これが世話のおしまいではないかという予感がしていた。

二人はいつしよに過ごす終わりの数日間、もうたがいにそばを離れなかつた。少しの時間も無駄にすまいと懸念していた。最後の晩は、暖炉のほとりにおそくまでとどまつていた。アントアネツトは家にただ一つのひしかけいす肱掛椅子にすわり、オリヴィエはその足先の腰掛にすわつて、いつものように大きな駄々だだつ児として愛撫あいぶされていた。彼はこれから始まる新生活にたいして、不安を覚えていた——がまた好奇心も動いていた。アントアネツトはこれが自分たちのなつかしい親しい生活の終わりではないかと考え、自分は今これからどうなるだろうかと空恐ろしく想像していた。その思いをさらにつらくなさせるためかのように、彼はその晩これまでになくごくやさしくて、出発のときに初めて自分のいちばんよい

点や美しい点を示そうとする人々に見受けるような、無邪気な甘え方までしていた。彼はピアノについて長くひいてやった、二人がもつとも好きなモーツァルトやグルツクの曲を——二人の過ぎ去った生活が多く結び合わされてる、やさしい幸福と清い悲しみとの幻影の曲を。

別れるときになると、アントアネットは学校の入口までオリヴィエについて来た。それから家にもどった。またもや一人ぼっちになった。しかしそれはドイツへの旅とは違って、辛棒できないときにいつでも捨て得る別離ではなかった。こんどは彼女のほうが残っていた。立ち去ったのは彼だった。長く一生の間立ち去ってしまったのは彼だった。それでも彼女は親愛の情に満ちていて、

別れたすぐあとでも、自分のことより彼のことを多く考えた。今までと非常に異なつた彼の生活の初めのうちのこと、学校の古参者たちの意地悪な仕業しわざ、孤独な生活をして愛するもののため常に心痛しがちな人々の頭の中では、たやすく不安なものとなつてくる、取るに足らぬ小さな不快な事柄、そういうものについて彼女は氣をもんだ。がその懸念は少なくとも、彼女の心を孤独の寂しさから多少紛らせるのに役立つた。翌日応接室で彼に会える三十分ばかりのことも、彼女はもう考えていた。その時になると十五分も前からやつて行つた。彼は彼女へたいへんやさしかった。しかし眼に触れた事物にすっかり心を奪われ面白がつていた。それから彼女は常に気がかりな愛情に満ちてやつて来たが、その

しばらくの面会にたいする彼の気持と彼女の気持との間の矛盾は、しだいに大きくなつていった。彼女にとっては、今ではその面会時間が全生命だった。しかし彼のほうは、もちろん彼女をやさしく愛してはいたけれど、彼女のことばかりを思えと要求されるのは無理なことだった。一、二度は少し遅れて応接室にやつて来た。ある日彼女は彼へ寄宿が厭いやかどうかと尋ねた。彼は厭でないと答えた。彼女はちよつと胸を刺される心地がした。——彼女はそういうふうな自分自身を恨んだ。自分を利己主義者だと見なした。二人がたがい別々で暮らしてゆけないということは、また自分が人生に他の目的を有しないということは、馬鹿げたことであるし、いけない不自然なことでさえあるということを、彼女はよく

知っていた。そうだ、彼女はそれを知りつくしていた。しかし知ってるだけで何になるろう？ どうにもできなかつた。それほど彼女は、十年この方、弟という唯一の考えの中に全生活をうち込んできたのだつた。その生活の唯一の中心が奪われた今となつては、もう何にも残つてはいなかつた。

彼女は元氣を出して、仕事や読書や音楽や好きな書物などに、手をつけようとつとめた……。けれど彼がいなくなつては、シエイクスピアもベートーヴェンもなんと空虚なことだつたらう！——まさしく美しいには違いなかつたが……。しかし彼がもうそばにいないのだつた。いかに美しいものも、愛する者の眼が共に見えてくれないときには、なんの役に立とうぞ。美もまたは喜びでさえ

も、それをもう一つの心の中に味わうのでなければ、何にならうぞ。

もし彼女がもつと強かったら、自分の生活をまったく立て直して、他の目的を定めようとしたかもしれない。しかし彼女は行きづまっていた。ぜひともしつかりしていなければならぬという必要がなくなった今となつては、みずから強しいていた意志の努力が破れて、ぐったりとなつてしまった。一年余り前から彼女のうちにきざして、彼女の氣力で押えられていた病氣が、今や自由に伸び出してきた。

彼女は自分の室にただ一人で、火の消えた暖炉のほとりにすわりながら、鬱うつうつ々として晩を過ごした。暖炉に火を入れるだけの

元氣もなければ、床にはいるだけの力もなかった。夢想にふけり寒さに震えうとうとしながら、夜中まですわっていた。過去の生しょうがい涯いを思い起こし、なつかしい故人や消え失うせた幻影といっしよにいた。そして、恋もなく滅んでしまった青春を考えると、たまらない寂しさにとらえられた。薄暗い茫ぼう漠ぼくたる悲しみだつた……。往來の子供の笑い声、階下の室のよちよちした小さな子供の足音……。その小さな足が自分の心の中を歩いてるように思われた……。疑惑が、いけない考えが、彼女を襲つてき、利己的な快樂的なこの都会の魂が、彼女の弱つた魂に感染してきた。——

彼女はそれらの悔恨の念をしりぞけ、それらの欲望を恥じた。なんのために苦しんでるのかみずからわからなかった。そして自分

の悪い本能のゆえだとした。この憐あわれな小さいオフエリア姫は、不思議な悩みにさいなまれていて、生命の奥底から来る濁った獸的な息吹いぶきが、身内の深みから上つてくるのを感じて、おびえるのだった。彼女はもう働かなかった。稽古けいこの口もたいてい捨ててしまった。あんなに早起きだったのが、時には午後まで床にはいつてることもあった。起き上がるのもふたたび寝るといふ理由しかなかった。ろくに食事もしなかつたし、まったく食べないこともあった。ただ、弟の休みの日——木曜の午後と日曜の終日——には以前のとおりにつとめて弟といっしょにいた。

弟は何にも気づかなかつた。新しい生活を面白がり、それに気を奪われていて、姉の様子をよく観察することができなかつた。

彼はちょうど青春期にはいつていた。青春期には一つのものに気をこめることができにくい。やがては心を動かされる事柄も、交渉が新しいおりには、それにたいして無関心な様子をするものである。年とつた人のほうが、二十歳ごろの青年よりも、自然と人生とにたいしていつそう新鮮な印象といつそう率直な享樂とを、時とするともつがように思われる。すると人は、青年のほうが心が古い込み感情が鈍つてると言う。しかしそれはたいてい誤りである。青年が無感覺らしく見えるのは、感情が鈍つてるからではない。情熱や野心や欲望や固定観念などによつて、魂がとらわれてるからである。身体が磨滅まめつして、もはや人生から何も期待しなくなる、私心なき情緒が自由に動いてくる。そして子供らしい

涙の泉が開けるのである。オリヴィエはいろんなつまらない事に  
気をとられていた。そのうちでもっともおもなものは、荒唐無稽むげい  
な恋愛であつて——（彼はいつもそんなことを空想していた）——  
——それが頭につきまとい、他のすべてのことにたいして盲目とな  
り無関心となつていた。——アントアネットは弟の心中に何が起  
こつてるかを少しも知らなかつた。ただ彼が自分から離れてゆく  
ことばかりを見てとつていた。しかし彼が離れていったのも、そ  
れはまったく彼のせいばかりではなかつた。時には彼も、家にや  
つて来ながら、彼女に会い彼女と話すのが非常にうれしかった。  
ところが家にはいると、彼の心はただちに冷たくなつた。彼女が  
彼にすがりついて来、彼の言葉を吸い込み、やたらに世話をやく、

その落ち着かない愛情と熱い心とに出会うと——その過度のやさしさといらいらした注意とに出会うと、すぐに彼は心を打ち明けたい願いを失ってしまうのだった。アントアネットが普通の状態でないことを、彼は考うべきであつたらう。思いやりのある慎み深い平素の態度とは、まったく異なつていたのである。しかし彼はただそうだとかさうでないとかいうごく冷淡な答えをした。彼女が彼をしゃべらせようとすればするほど、彼はますます黙り込んでいった。あるいは乱暴な返辞をして彼女の気を害した。すると彼女もがっかりして口をつぐんだ。その楽しい一日はただ無駄に過ぎ去つていった。——彼は家の敷居をまたいで学校にもどりにかけるや否や、自分の仕打ちに堪えがたい後悔を感じた。姉を苦

しめたことを夜中に考えては、みずから自分を責めたてた。学校に帰ってすぐに、情に駆られた手紙を姉へ書いたこともあった。

——しかし翌朝それを読み返しては引き裂いてしまった。そしてアントアネットは、そんなことは少しも知らなかった。もう弟から愛されていないのだと思っていた。

彼女はなお——最後の喜びと言えないまでも——心が元気づいてくる若々しい愛情の最後の動きを、愛や幸福の希望などにたいする力の捨鉢すてばちな眼覚めめざを、経験したのだった。それはもとより根のないものだったし、彼女の穏和な性質に矛盾することだった。それが実際に起こったのも実は、彼女の心が乱れていたせいであ

り、疾病の前駆たる忘我と興奮との状態のせいであつた。

彼女は弟とともに、シャートレー座の音楽会に臨んでいた。弟がある小雑誌の音楽批評を担任することになつたので、以前よりも多少よい席に、しかしはるかに相容れ<sup>あい</sup>ない聴衆の間に、二人はすわつていた。舞台のそばの管弦楽席であつた。クリストフ・クラフトが演奏するはずだつた。彼らは二人ともそのドイツの音楽家を知らなかつた。やがて音楽家が出て来るのを見たとき、彼女は胸にどきりとした。疲れた眼でぼんやり見ただけだつたけれど、彼が舞台にはいつたときにはもう疑いの余地はなかつた。ドイツで厭<sup>いや</sup>な日を送つてたおりに見覚えてる、あの名も知らぬ友だつたのだ。彼女はかつて弟に彼の話をしたことはなかつた。心の中で

彼のことを考えたこともほとんどなかった。あのとき以来彼女のすべての考えは、生活の苦勞に奪われてしまっていた。それにまた彼女は、理性の勝ったフランス娘であつて、起原のわからない曖昧あいまいな感情を、是認することができなかつた。彼女のうちには、窺うかがいがたい深いところに、魂の広野が横たわっていた。そこには彼女自身でも見るのを恥じる他の多くの感情が眠っていた。彼女はそれらの感情がそこにあることを知っていた。しかしながら、人の精神で制御できない存在者にたいする一種の敬虔けいけんな恐れからして、彼女はそれらの感情から眼をそらしていた。

胸騒ぎが少し静まったとき、彼女は弟の双眼鏡を借りてクリストフをながめた。楽長の譜面台についてる彼の横顔を見て、その

気荒な一徹な表情を見てとった。彼ははなはだ不似合いな古ぼけた服をつけていた。アントアネットは口をつぐみ冷たくなつて、その悲しい音楽会の騒動に列した。クリストフは聴衆の露あらわな悪意にぶつかった。聴衆は当時ドイツの芸術家に好意をもつていなかったし、クリストフの音楽に悩まされた（第五卷広場の市参照）。あまり長すぎると思われた交響曲シンフォニーのあとに、ピアノでなおよ曲演奏するためにふたたび出て来たとき、彼は愚弄ぐろう的な喝采かつさいで迎えられた。ふたたび彼を見るのを聴衆があまり喜んでいないことは、疑いの余地がなかった。それでも彼は構わずに、聴衆のあきらめきつた倦怠けんたいの中で演奏を始めた。後ろの方の棧敷さしきにいた二人の聴衆が声高に悪口を言い出して、それが広がってゆき、

全部の人々がうれしがった。するとクリストフはひきやめた。悪童めいた無鉄砲さで、マルブルーの出征を一本の指でひいた。そしてピアノから立ち上がり、聴衆に向かって言った。

「諸君にはこれが適當です！」

聴衆はその音楽家の意味をとつきに解しかねたが、すぐに怒鳴りだした。それから異常な騒ぎとなった。口笛を吹き、叫んだ。

「謝れ！<sup>あやま</sup> 謝りに出る！」

人々は怒って真赤<sup>まっか</sup>になり、やたらに猛り<sup>たけ</sup>たつて、ほんとうに憤激してるのだと思ひ込みたがつていた。そして多分ほんとうに憤激していたのであろうが、しかしことに、騒ぎたてて気晴らしする機会を得たのを喜んでいた。それはあたかも、二時間の課業の

あとの学生みたいだった。

アントアネットは身を動かす力もなかった。石のように堅くなつていた。引きつった指先で黙つて手袋を引き裂いていた。交シンフ響曲オーの初めの音を聴きいたときから、彼女はその成り行きをはつきり感じた。聴衆の暗黙な敵意を見てとり、それが募つてゆくのを感じ、クリストフの心中を読みとり、破裂しないでひき終えはすまいと確信した。彼女はしだいに心痛の度を高めながらその破裂を待った。それを防ごうと精いっぱいになった。いよいよ破裂してしまつたときには、予見していたとおりに、どうにもしかたのない宿命にでも圧倒されたかのような気がした。そして彼女はなおクリストフを見守り、クリストフは怒号する聴衆を傲ごうぜん然と

見つめていたので、二人の視線はかち合った。おそらくクリストフの眼は一瞬間彼女を認めたであろう。しかし彼は喧騒けんそうに巻き込まれて、精神では彼女を認め得なかった。(彼女のことはもう久しい前から彼の念頭になかった。)彼は嘲罵ちょうばのさなかに姿を隠してしまった。

彼女はなんとか叫びたて言いたててやりたかった。しかし悪夢の中のよう自由がきかなかつた。ただ、善良な弟の声をそばに聞いて多少慰められた。弟は彼女の心中に何が起こってるかは夢にも知らずに、その悲痛と憤慨とを共にしていた。オリヴィエは音楽にたいする理解が深く、何物にも害されない独立した趣味をそなえていた。何か一つのを好むときには、いかなること

があろうともそれを好んだ。交響曲シンフォニーの初めのほうの小節を聴いたときからすでに、何か偉大なものを、まだかつてこの世で出会ったことのない何かを、彼は感じたのだった。そして心から熱心に、「いいなあ、いいなあ！」と小声で繰り返した。すると姉は、ありがたそうに知らず知らず身を寄せてきた。交響曲シンフォニーが済むと、聴衆の皮肉な冷淡さに対抗するため、彼は熱狂的な喝采かつさいをした。それから騒擾そうじょうのおりになると、彼は我を忘れた。彼は立ち上がり、クリストフが正当だと叫び、非難者を反駁はんぱくし、格闘したがっていた。臆病おくびょうな少年たる彼とは思えなかった。彼の声は喧騒けんそうのうちにもみ消された。露骨な罵言ばげんを招いた。鼻垂小僧はなたれとののしられ、いい加減に寝てしまえと怒鳴られた。アントアネ

ツトは反抗の無益なことを知って、彼の腕をとらえて言った。

「お黙りなさいよ、お願いだからお黙りなさいよ！」

彼は絶望して腰をおろした。がなおうなりつづけていた。

「恥だぞ、恥だぞ、馬鹿どもが！……」

彼女はなんとも言わなかった。黙って心を痛めていた。彼は彼女がその音楽を感じていないのだと思った。彼女に言った。

「姉<sup>ねえ</sup>さん、りっぱな音楽だとは思わないんですか、ええ？」

彼女はただうなずいた。凍りついたようになって、元気を出すことができなかった。しかし、管弦楽隊が他の曲を始めかけると、突然彼女は立ち上がりながら、一種の憎悪をもって弟にささやいた。

「いきましよう、いきましよう。もうこんな人たちは見ていられ  
ません。」

二人は急いで立ち去った。往来で、たがいに腕をとり合いなが  
ら、オリヴィエは憤激してしゃべっていた。アントアネットは黙  
っていた。

その後彼女は幾日も、一人室にこもって、ある感情にぼんやり  
浸っていた。その感情を彼女は正面まともにながめることを避けたが、  
しかしそれはいかなる考えにも打ち消されずに、ちようど顛顛こめかみ  
の重苦しい脈搏みやくはくのように、いつまでも頭から去らなかつた。

あれからしばらくたって、オリヴィエはクリストフの歌曲集を

ある書店で見出して、それを彼女へもって来てくれた。彼女はいい加減なところをひらいてみた。するとちよどそのページに、楽曲の初めに、ドイツ語の捧<sup>ほつてい</sup>呈文が読まれた。

わが親愛なる憐れなる犠牲者へ

そして下に日付がついていた。

彼女はその日をよく覚えていた。——彼女は胸騒ぎがして、読みつづけることができなかつた。楽譜を下に置いて、弟に演奏してくれと頼みながら、自分の室にはいつて閉じこもつた。オリヴィエはその新しい音楽に喜びきつていて、姉の感動に気もつかず

にひき始めた。アントアネットは隣室にすわりながら、胸の動悸どうきを押えた。それからふいに立ち上がって、戸棚とだなの中の小さな小こづか遣い帳を捜した。ドイツを出発した日とあの妙な日とを見つけるためだった。が彼女はそれを調べないでも知っていた。そうだ、それはまさしくクリストフといっしよに芝居を見た晩だった。彼女は寢床に横になり、顔を赤めて眼をつぶり、胸の上に両手を組みながら、なつかしい音楽に耳を傾けた。心は感謝の念でいっぱいになっていた……。ああ、なぜかひどく頭が痛かった。

オリヴィエは姉がふたたび出て来ないので、ひき終えてからその室にはいつてみた。彼女は寝ていた。病気かと彼は尋ねた。彼女は少しだるいのだと言い、身を起こして彼の相手になった。二

人は話をした。しかし彼女は、彼から尋ねかけられてもすぐには返辞をしなかった。遠くへ行つてゐる心を引きもどらしい様子だった。微笑を浮かべ、顔を赤らめ、頭痛のためにぼんやりしてるのだと詫<sup>わ</sup>びた。やがてオリヴィエは帰つていった。彼女はその楽譜を置いていってくれと頼んだ。ひとり、夜おそくまで起きていて、隣の人々から小言を言われはすまいかと気づかつて、音符を一つずつごく静かにピアノで押しながら、それらの曲をひくのではなく読んでいった。また多くは読んでもいかなかった。ぼんやり夢想していた。自分に憐<sup>あわ</sup>れみをかけてくれ、温情の不思議な直覚力で自分の心を読みとつてくれた、その魂のほうへ、感謝と愛情とに駆られて引き寄せられた。彼女は考えをまとめることができ

なかった。うれしかった、また悲しかった——悲しかった！……  
ああ、ほんとにひどく頭が痛かった！

甘い切ない夢想のうちに、押つかぶさってくる憂愁のうちに、  
彼女は夜を明かした。昼になると、少し気分をはつきりさせたい  
と思つて、ちよつと外に出てみた。なお頭が痛みつづけてはいた  
が、目当てを定めるために、ある大きな店へ買い物に行った。自  
分が何をしてるのかほとんど考えていなかった。なんとはなしに、  
始終クリストフのことを考えていた。疲れきつたたまらなく悲し  
い気持で、人込みの中を歩いていると、街路の向こう側の歩道に、  
クリストフが通るのを見つけた。彼のほうでも同時に彼女を見た。  
ただちに——（なんの考えもなくとつきにだった）——彼女は

彼の方へ両手を差し出した。クリストフは立ち止まった。このたびは彼女だとわかったのだった。彼はもう中央路に飛び降りて、アントアネットのほうへ来ようとした。アントアネットは彼に会いに行こうとつとめた。しかし残忍な人雪崩なだれは、彼女を藁屑わらくずみたいに押し流した。その間に、乗合馬車の馬が一頭、すべって、アスファルトの上に倒れて、クリストフの前に土手をこしらえた。そのため馬車の二重の流れが乱れて、脱しがたい柵さくをしばし築いた。クリストフはそれにも構わず、なお通り過ぎようとした。しかし馬車の列の間にはさまれて進むことも退くこともできなかつた。やがてようやく身を脱して、アントアネットを見かけた場所まで来ると、もう彼女は遠くなっていた。彼女はいたずらに身

をもがいて、人込みの流れから出ようとしたが、つぎにはあきらめて、もう争おうとしなかった。自分の上にのしかかっている、クリストフに会わせまいとしてるらしい宿命を、彼女は感じた。

宿命にたいしてはいかんともしようがなかった。群集の外にようやく出られはしたが、彼女はもう引き返そうとしなかった。恥ずかしい気がしていた。彼になんと言えよう？ 何をなし得よう？

彼はどう考えるだろうか？——彼女は自分の家へ逃げ帰った。

家にもどって初めて、彼女は安堵あんどの心地がした。しかし自分の室にはいり、暗がりくらがりに身を置くと、帽子も手袋もぬぐ元気がなくて、テーブルの前にじつとすわったままでいた。彼と話すことのできなかつたのが悲しかった。と同時にまた、心の中に光が輝い

ていた。もう暗闇くらやみが眼に映らなかつた。自分を悩ましてる病苦のことも気にかからなかつた。先刻の光景を細かくいつまでも思ひふけた。その事柄を変えて、もしこれこれの事情が違つていたら、どうなつたらうかということ、心に描き出した。クリストフのほうへ腕を差し出してる自分の姿が見えた。自分を認めたクリストフの喜ばしい表情が見えた。そして彼女は笑えみを浮かべ、顔を赤らめた。顔を赤らめて、だれからも見られない暗い室の中に一人きりで、ふたたび彼へ両腕を差し出した。もう堪えられなかつた。彼女は自分自身が消えてゆくような心地がした。そばを通りかかつて、温情の眼つきを見せてくれた力強い生命へ、本能的にすがりつこうとしていた。愛情と悩みとに満ちた彼女の心は、

夜の中で彼に叫んでいた。

「助けてください。救ってください！」

彼女はわくわくしながら立ち上がって、ランプをともし、紙とペンをとった。そしてクリストフに手紙を書いた。もし彼女がそのとき病気にかかっていたら、気位の高い恥ずかしがりの娘たる彼女は、彼に手紙を書くことを考えはしなかったろう。が彼女は何を書いているのかも知らなかった。もう自分が自分の自由にならなかった。彼を呼びかけ、彼を愛してると言っていた：  
：。手紙のなかほどで、彼女はびっくりして筆を止めた。手紙を書き直したかった。がもう氣力がなくなっていた。頭が空つ<sup>から</sup>ぽで燃えるようだった。書くべき言葉を見出すのが非常に困難だった。

疲労のためにぐったりしていた。彼女は恥ずかしかつた……。こんなことをして何になるう？　彼女はみずから自分を欺こうとしてることを知ってたし、けっしてその手紙を送らないことも知っていた……。送ろうと思っても、どうして先へ届けられよう？

彼女はクリストフの住所を知らなかつた……。憐あわれなクリストフよ！　たといすべてを知り、彼女に好意をもつてたにせよ、彼は何をなし得よう？　もうおそかつた。駄目、駄目、何もかも無益だつた。それは、息がつまってやたらに羽ばたきをする小鳥の、最後の努力だつた。あきらめるよりほかにしかたなかつた……。

彼女はなお長くテーブルの前に残つて、身を動かすこともできずに思い沈んでいた。ようやくに——元氣を出して——立ち上が

つたのは、夜中過ぎだった。手紙の草稿を片付ける気力も引き裂く気力もなく、ただ機械的な習慣から、それを小さな書棚しよだなのある書物にはさんだ。それから熱に震えながら床についた。謎なぞの言葉は解けた。神意の果たされるのを彼女は感じた。

そして大きな平安が彼女のうちに降りてきた。

日曜の朝、オリヴィエが学校からやって来たとき、アントアネットは床について多少昏迷こんめいのうちにあつた。医者を呼ぶと、急性の肺結核だと診断された。

アントアネットは近来、自分の容態に気づいていた。そして、みずから恐れていた精神的悩みの原因を、ついに見出したのだつ

た。わが身を恥じる憐れな娘たる彼女にとつては、まったく自分のせいではなくて、病気のせいだったと思うことは、ほとんど一種の慰安であつた。彼女にはまだ少し力が残つていて、あらかじめ多少の注意をなし、いろんな書類を焼き、ナタン夫人へあてた手紙を用意した。自分の死——（彼女はこの言葉を書き得なかつた……）——のあとしばらくの間は、弟の世話をしていただけだ。いと、ナタン夫人へ頼んだ。

医者も施す術すべがなかつた。病勢は非常に激烈だつたし、アントアネットの身体は、長年の過労のためにすっかり磨滅まめつしていた。

アントアネットは落ち着いていた。もう駄目だと感じてからは、別に心の悩みを覚えなかつた。切りぬけてきたさまざまの困難を、

頭の中に思い出していた。自分の仕事が成就したこと、大事なオリヴィエが救われたことを、思い浮かべていた。そしてえも言えぬ喜びが心にしみとおった。彼女はみずから言った。

「それを成し遂げたのは私だ。」

彼女は自分の傲慢ごうまんをみずからとがめた。

「私一人では何にもできなかつたろう。神が助けてくださつたのだ。」

そして彼女は、務めを果たすまで神から生かしてもらつたことを感謝した。今この世を去らなければならぬことは、やはり悲痛ではあつた。しかし不平は言えなかつた。それは神にたいして恩知らずとなるのだった。もつと早く神から呼び寄せられること

もあり得たはずだった。もし彼女が一年早く去っていたら、どうなっていたであろう？——彼女は嘆息をもらした。感謝の念で自分を卑下ひげした。

ごく息苦しくはあつたが、彼女はそれを少しも訴えなかつた——ただ、重い眠りの中で、小さな子供のようになり、ときどき呻うめき声を出すきりだった。あきらめきつた微笑を浮かべて、事物や人々をながめた。オリヴィエの姿を見るのが、彼女にとってはいいつも喜びだった。言葉には出さないで唇くちびるだけで彼の名を呼んでいた。自分のそばに枕まくらの上に彼の頭を置かせたがつた。そして眼と眼とを近寄せて、黙って長い間彼をながめた。しまいには、両手で彼の頭をかかえながら、身を起こして言った。

「ああ、オリヴィエ……オリヴィエ……」

彼女は首につけてるメダルをはずして、それを弟の首につけてやった。親愛なオリヴィエを自分の聴罪師となし医者となしすべての者に見立てた。それ以来彼女は彼のうちに生き、死に臨んで、島の中へのように彼の生命の中へ逃げ込んでるのが、見てとられた。ときどき彼女は、愛情と信仰との神秘的興奮のために、酔わされてるがようだった。もう苦痛も感じなかった。悲しみは喜びに——<sup>きよ</sup>聖い喜びに変わって、口もとや眼の中にそれが輝いていた。彼女は繰り返し返した。

「私は幸福だ……」

失神の状態が襲ってきた。まだ意識を保ってる最後の瞬間に、

彼女の唇は動いていた。何かを誦とえてるのが見てとられた。オリ  
ヴィエはその枕ちんとう頭とうに来て、彼女の上に身をかがめた。彼女はま  
だ彼を見分けて、弱々しく微笑ほほえみかけた。その唇はなお動いてい  
て、眼には涙がいつぱいたまっていた。何を言ってるのかは聞こ  
えなかった……。しかしオリヴィエはついに、古い歌の文句を、  
息の根のように細く聞きとった。それは二人が非常に好きであつ  
て、彼女が幾度も彼に歌ってくれたものだった。

吾われまた来きたらん、いとしき者よ、また来きたらん……。

それから、彼女はまた失神の状態に陥った……。そしてこの世

を去った。

彼女はみずから知らずに、多くの人たちに、知り合いでもない人たちにさえ、深い同情の念を起こさしていた。同じ建物に住んでる名も知らない人たちにも、同様だった。でオリヴィエは、見ず知らずの人たちから同情を表された。アントアネットの葬式は、母親の葬式ほど人から見捨てられはしなかった。友だち、弟の間、彼女が稽古けいこを授けていた家の人たち、または、彼女が一身のことは何にも言わずに黙ってそばを通りすぎ、向こうでも何にも言わないで彼女の献身を知ってひそかに感心していた、多くの人たち、さらにまた、貧しい人たち、彼女を助けてくれてた家事女、

町内の小売商人、そういう人々が彼女を墓地まで見送つてくれた。オリヴィエは姉の死んだ晩から、ナタン夫人に迎えられ、強<sup>し</sup>いて連れて行かれ、その悲しみを無理に紛らされた。

それは、彼がかかる災厄に堪え得る、しょうがい生涯中の唯一の時期

——彼が絶望に陥りきることを許されない、唯一の時期だった。

彼はちようど新しい生活を始めていて、ある団体の一員となつていて、心ならずもその流れに引きずられていった。その一派の仕事や心労、知的興奮、試験、生活のための奮闘などは、自分の心のうちに閉じこもることを彼に許さなかつた。彼は一人きりでいることができなかつた。彼はそれを苦しんだが、しかしそれは彼の救済であつた。もう一年早かつたら、あるいはもう数年後だつ

たら、彼は破滅したに違いなかった。

それでも彼はできるだけ、姉の思い出に一人でふけた。二人  
いっしょに暮らした住居を保存し得ないのが、彼にはつらかった。  
彼は金をもたなかった。自分に同情を寄せてくれるらしい人たち  
から、姉の所有品を取り留め得ない悲しみを悟ってもらいたかつ  
た。しかしだれも悟ってくれそうになかった。で彼は多少の金を、  
半ばは借り半ばは個人教授で手に入れて、それで屋根裏の室を一  
つ借り、姉の寝台やテーブルやひじかけいす肱掛椅子など、取り留め得られる  
だけの器具をすべてつめ込んだ。彼はそれを追懐の聖殿だとした。  
意気沮喪そそろうしたおりにはそのこに逃げ込んだ。友人らは彼に婦人関係  
でもあると思っていた。彼はそこで幾時間ひたいも、額を両手に埋めて

姉のことを夢想した。不幸にも彼女の肖像は一枚もなかった。ただ、子供のとき二人いつしよに写った小さな写真きりだった。彼は彼女に話しかけ、涙を流した……。彼女はどこにいるのか？もしそれがこの世のどこかであったなら、いかなる場所であろうとも、どんなに行きにくい場所であろうとも——せめて一歩ごとに近づけさえしたら、たとい跣足はだしで幾世紀間歩かせられようと、幾多の艱難かんなんをも忍んで、いかなる喜びと不撓ふとうの熱心とをもつて、彼女を捜しに突進したことであろう！……そうだ、彼女のところへ行き得る機会が、たとい万に一つでもありさえしたら！……しかし何もなかった……彼女に会えるなんらの方法もなかった……。なんとる寂寥せきりょうぞ！自分を愛し助言し慰めてくれる彼女がい

なくなつた今では、彼は頓馬とんまでお坊っちゃんのまま人生に投げ出されたのだつた……。親愛な心の限りない完全な親和を、ただ一度でも知るの幸福を得た者は、もつとも聖なる喜びを——その後一生の間不幸だと感ずるような喜びを——知つたものと言うべきである。

樂しかりし時を悲惨のうちにて思い出すほど、世に大なる苦痛はあらず……。

弱いやさしい心の人にとってのもつともつらい不幸は、一度もつとも大なる幸福を味わつてきたということである。

しかしながら、生涯の初めのころに愛する者を失うのは、いかにも悲しいことのように思われるけれども、あとになつて生命の泉が涸れつくしたときにおけるほど、恐ろしいものではない。オリヴィエは若かつた。そして、生来の悲観性にもかかわらず、不幸な境涯きょうがいにもかかわらず、やはり生きていたかつた。アントアネットは死にさいして、自分の魂の一部を弟に吹き込んでいつたらしかつた。彼はそう信じていた。彼女のように信仰はもつていなかったが、彼女が誓つてくれたとおりに、彼女はまったく死滅したのではなくて自分のうちに生きてるのだと、彼は漠然ぼくぜんと思ひ込んでいた。ブルターニュで一般に信じられてるところによれば、若い死人は死んだのではなくて、普通の生存期限を果たす

までは、その生きてた場所になお彷徨ほうこうしてゐるそうである。——  
そのとおりにアントアネットも、なおオリヴィエのそばで生長してゆきつつあった。

彼は彼女の書いたものを見出しては読み返していった。があいにく彼女はほとんどすべてを焼き捨てていた。そのうえ彼女は、自分の内生活をしるしとどめておくような女ではなかつた。自分の思想を暴露ばくろすることを彼女は恥はずかしかつたであらう。ただ彼女がもつてたのは、自分以外の者にはだれにもほとんどわからない小さな控え帳——ごく細かな備忘録だけだった。その中にはなんらの注意書きもなしに、ある日付が、日々の生活のある小さな出来事が、書きつけてあつた。それは彼女にとって、喜びや感動

のおりおりで、詳細に書きしるしておかなくても思い出せるものだった。それらの日付のほとんどすべては、オリヴィエの生活に起こった事柄に関係していた。また彼女は、彼からもらった手紙を一つも失わずに全部保存していた。——悲しくも彼のほうはそれほど丹念ではなかった。彼女から受け取った手紙のほとんどすべてを失っていた。なんで手紙を取っておく必要があつたろう？

いつも姉がそばについていてくれることと思っていた。大事な愛情の泉はいつまでも涸れないような気がしていた。いつでもその泉で唇と心とを清涼にすることができると、安心しきっていた。それから受け取れる愛を浅慮にも浪費していた。そして今では、そのわずかな雫までも集め取りたかつた……。かくして、アント

アネットのもつてた詩集の一冊をひらきながら、一片の紙に鉛筆で書かれたつぎの言葉を見出したとき、どんなに彼は感動したろう。

「オリヴィエ、なつかしいオリヴィエ！……」

彼は気が遠くなるほどだった。墓から彼に話しかける眼に見えない口に向かつて、自分の唇を押しあてながら、すすり泣いた。

——その日以来、彼は書物の一冊一冊を取り上げて、他にも何か内心の思いを書き残してはすまいかと思つて、ページごとに捜していった。そしてクリストフにあてた手紙の草稿を見出した。それによつて、彼女のうちにできかけてた暗黙の恋愛を知つた。これまで知らないでいたしまった知ろうとも求めなかつた、彼女の感

情生活を初めて洞見<sup>どうけん</sup>した。弟から見捨てられて、縁遠い友のほうへ両手を差し出してた、彼女の心乱れた最後の日々を、彼はまざまざ想像した。かつて彼女は、以前クリストフに会ったことを彼に打ち明けていなかった。が手紙の数行によつて彼は、二人が近いころドイツで出会ったことを知った。細かな点は少しもわからなかったが、ある場合にクリストフがアントアネットへ親切だったこと、そのときからアントアネットの想<sup>おも</sup>いがぎざしたこと、それを彼女が最後まで秘めつづけたこと、などを彼は了解した。

彼はそのりっぱな芸術のためにすでにクリストフを好んでいたので、ただちに言い知れぬなつかしさを覚えた。姉がクリストフを愛していたのだ。クリストフのうちになお姉をも愛してるよう

に、オリヴィエには思われた。彼はあらゆることをしてクリストフに接近しようとした。しかしその行くえを探るのは容易なことではなかった。クリストフは音楽会の失敗後、広大なパリーのうちに姿を隠してしまった。だれの前にも出て来なかつたし、まただれももう彼のことを念頭においていなかつた。数か月の後オリヴィエは、病氣上がりの蒼あおしろ白やい瘦せ衰えたクリストフに、偶然往来で出会つた。しかし彼は呼び止めるだけの勇気がなかつた。遠くからその家までつけていった。手紙を書きたかつたが、それもほんとうには決心しかねた。なんと書いたらよいかわからなかつた。オリヴィエは自分一人ではなく、アントアネットがいつしよについていた。彼女の恋と羞しゆう恥うちとが彼のうちにはいり込んで

いた。姉がクリストフを愛していたという考えのために、彼はあ  
たかも自分が姉自身であるかのように、クリストフにたいして顔  
を赤らめた。それでもやはり、クリストフといっしよに姉の話が  
したかった。——けれどもそれができなかつた。姉の秘密によつ  
くちびるて唇に封印されていた。

彼はクリストフに会おうとつとめた。クリストフが行きそうな  
所へは、どこへでも出かけて行つた。彼へ握手を求めたくてたま  
らなかつた。が彼の姿を見るとすぐに、彼から見られないように  
身を隠した。

ついに、二人はある晩知人の客間に行き合わして、そこでクリ

ストフはオリヴィエを認めた。オリヴィエは彼から遠のいていて、何にも言わなかつた。しかし彼のほうをながめていた。そしてアントアネットがその晩、オリヴィエといっしょにいたに違いない。クリストフは彼女の姿を、オリヴィエの眼の中に認めたのだった。その突然現われた彼女の面影に誘われて、クリストフは客間を横切つて近寄つていった、若いヘルメスのように幸ある<sup>さち</sup>霊の<sup>うれ</sup>愁わしげなやさしい会釈をもたらしてる、その未知の使者のほうへ。

# 青空文庫情報

底本：「ジャン・クリストフ（三）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年8月18日改版第1刷発行

入力…tatsuki

校正：伊藤時也

2008年1月27日作成

2009年12月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 第六巻 アントアネット

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>